

**Annual Report 2022**

**Laboratory of Regional Design with Ecology**

**Hosei University**

**法政大学 エコ地域デザイン研究センター**

**2022年度報告書**

表紙 井の頭恩賜公園\_井の頭池  
裏表紙 井の頭恩賜公園\_神田川  
写真 Yusuke SHIMADA / apgm\*

## はじめに

法政大学エコ地域デザイン研究センター（以下「エコ研」と言います。）は、その前身である法政大学エコ地域デザイン研究所から数え、2022年度で18年目ということになる。この間設立から2017年度まではずっと陣内秀信先生に所長・センター長を務めていただいたが、先生が法政大学を退職された後は大学の規則でセンター長は現役の教員でなくてはならないのだそうで、その後なんとなく持ち回りのようなことになっていて、私（高見）が今年度からセンター長を拝命した。

構成員の数などからは法政大学デザイン工学部がエコ研の中心をなしているように見えるものの、エコ研の特徴は文理融合型の活動を中核としている点にあり、学内の複数の学部のメンバーと一緒に議論し、研究活動を行ってきた。また非常に多くの学外の客員研究員の方々とともに活動してきたことも強みだと思っている。このような形での活動であったこともあり、COVID-19によりフィールドワークや対面の会議などが制限されたことは、エコ研の活動に大きな影響を与えた。もとより私自身はコロナ前からさほど活発に活動に参加していた訳でもないのだが、私事でいえば2018年度に国内研究の仕組みを使って島根大学に数カ月間在籍させていただき、その時にさまざま仕込んだ材料などから、2019年度にエコ研内に斐伊川島根半島プロジェクトをお認めいただき、さあこれから、というタイミングでCOVID-19がやってきた。長いトンネルの出口のようなものがおぼろげに見え始めている現在であるが、2020年度前半など本当に動きがとれず、毎月開催しているエコ研の運営委員会もリモート開催を余儀なくされてきた。2022年度においては7月まではリモートのみであったが、9月の運営委員会から対面を含めたハイブリッド開催にこぎつけ、やはり対面でのみ得られる情報交換力

のようなものを感じざるを得ない。そして年度末発表会も対面開催となる訳であるが、そのプログラムを調整する中で大きな課題を認識した。文理融合で学内外との連携、そしてここ数年掲げるメインの研究テーマである「テリトリー」に関わるそれぞれの地元とのつながりやその場での活動など、COVID-19に分断され強制停止されてきたことがいかにほどであるかということ。

さて、持ち回りのように仰せつかったセンター長であるが、考えてみたら私が法政大学に着任し、学科の先輩であった高橋賢一先生の導きでエコ研に入れていただいてからかれこれ14年。現任教員の中では気づけば古株の部類であり、COVID-19からの立ち直りに際し、長きに渡る諸活動のみてきて、またこれに関わった多くの方々のおつきあいの経験なども活かし、エコ研の適切な再起動をお手伝いすることが責務かな、などと思い、責任重いなど困惑している段階にある。そのような考えではいますので、みなさまよろしくお願いたします、という気持ちです。

末尾になりますが、今年度の不便な状況にも関わらず熱心に活動して下さった兼担研究員、客員研究員の皆様、学生諸君、エコ研事務局の倉本課長・宮崎様他、学内外からサポートして下さった皆様に感謝申し上げます。また、継続的なご支援をいただいている総合資格学院様に心より御礼申し上げます。

今後も皆様のエコ研へのご支援をよろしくお願いたします。

2023年2月28日

法政大学エコ地域デザイン研究センター  
センター長 高見公雄

## 目次

|  |    |
|--|----|
| はじめに   | 1  |
| <b>1 プロジェクト報告</b>                                  |    |
| <hr/>  |    |
| <b>テリトリープロジェクト</b>                                 |    |
| 武蔵野・多摩プロジェクト                                       | 4  |
| 潟プロジェクト  | 8  |
| 瀬戸内プロジェクト  | 10 |
| 佐原域学連携プロジェクト                                       | 12 |
| 江戸東京周辺プロジェクト                                       | 14 |
| <b>東京都心プロジェクト</b>                                  |    |
| 外濠市民塾  | 16 |
| 千代田学事業 一社会的包摂と場所愛着からみた千代田区内の着座空間評価一                | 18 |
| <b>2 関連研究（2021 年度報告会より）</b>                        |    |
| <hr/>  |    |
| 「平地林の変遷と都市空間における自走的活用手法について」小野寺一貴                  | 22 |
| 「石見銀山街道と結びついたテリトリーに関する研究」野市将太                      | 24 |
| 「遠賀川流域における石炭産業で形成されたテリトリーの変遷に関する研究」太田結貴            | 26 |
| 「近世以前の佐原テリトリーに関する研究」三木歩嵩                           | 28 |
| 「都市との接続性に着目した河川空間のオープン化事業の分析」原聖剛                   | 30 |
| 「学校林とそれを取り巻く環境の調査および学校林更新の提案」南春香                   | 32 |
| <b>3 テリトリーの日本的展開「実践者とのクロストーク」（2021 年度報告会第 2 部）</b> |    |
| <hr/>  |    |
| イントロダクション：陣内秀信（法政大学特任教授）                           | 36 |
| 「秋田におけるテリトリー」小杉栄次郎（秋田公立美術大学教授）                     | 39 |
| ディスカッション：陣内秀信，小杉栄次郎，樋渡彩，木村純子，小島聡                   | 47 |
| <b>4 研究業績</b>                                      |    |
| <hr/>  |    |
| 研究業績   | 60 |
| <b>5 活動報告</b>                                      |    |
| <hr/>  |    |
| 活動報告   | 78 |
| 法政大学エコ地域デザイン研究センター メンバー ※2023 年 3 月現在              | 80 |

# 1 プロジェクト報告

Project Report

## 武蔵野・多摩プロジェクト報告 Musashino-Tama project report

神谷 博\*1  
Hiroshi Kamiya

キーワード：水都学、江戸東京、渋谷川、スピリチャリティ、モンスター

これまで活動してきた、水都府中、源流、野川 GI などのプロジェクトを統合し、武蔵野・多摩の枠組みとして継続しています。

### 【概要】

2022年8月11日（木）に、法政大学江戸東京研究センター及びエコ地域デザイン研究センターと青山学院大学総合文化政策学会の共催で、シンポジウム「川のエコヒストリーとスピリチャリティ～江戸東京の都市構造と精神性～」が開催されました。このイベントは、日欧ミーティング「渋谷川魂」の一環として企画され、他に、8月1日～10日にワークショップ・展示会「渋谷川モンスターを探る」及びまち歩き＋ワークショップ、路上イベントなどが行われました。

### 【開催の趣旨】

きっかけはドイツやフランスなどの若者たちからの問いかけでした。「モンスターとなった渋谷川」、彼らにはそう見えた。「渋谷川魂はどこへ行ったのか」「都市の変革はどうあるべきか」と私たちに問いかけたのです。これを受けて、東京に住む私たちにとって「渋谷川魂」とは何かを考えることにしました。

川は生態系として生きた自然であり、渋谷川・古川は江戸東京の骨格を形成する重要な川です。江戸市中の西南部の境界を劃した川であって、上中流部はのどかな田園、東京湾に注ぐあたりは、舟入があり、江戸湊の一部として荷揚場や河岸が栄え、武家屋敷も多く立地しました。

渋谷川については、これまでに多くの社会的、文化的な問いかけがなされてきました。文学やアート、アニメの題材としても取り上げられてきました。これをあらためて国際都市東京の地球環境時代における課題として受け止め、渋谷川の歴史、文化、環境を探り、未来に向けた都市の生態学的再生の展望を語り合いたいという事が趣旨でした。

### 【シンポジウム】

シンポジウムは、青山学院大学 14 号館 12 階大ホールを会場とし、対面・オンライン併用系 s 期で開催されました。会場参加者は 19 名、講師 10 名、スタッフ 8 人、計 37 名で、オンライン参加者は 50 名、参加者合計は 87 名でした。はじめに主催者として宮澤淳一・青山学院大学総合文化政策学会長と陣内秀信・法政大学特任教授からご挨拶を頂きました。



（1）基調講演、報告：基調講演が 2 題あり、基調講演 1 として横山泰子・法政大学教授から「江戸東京の川と妖怪」というテーマでお話をいただきました。代表的な妖怪として河童を取り上げ、その歴史を掘り下げるとともに現代の妖怪について、かつての怖い否定的なイメージからかわいい肯定的なイメージに変わってきているとの指摘があり、更に新たな妖怪まちおこしという視点も示されました。基調講演 2 は「ドイツのエコシティ計画における河川の生態学的復活と水管理」と題してエクハルト・ハーン・ドルトムント大学教授からリモートでご講演をいただきました。ハーン先生はエコ地域デザイン研究センターの客員研究員でもあり、かねてより交流を重ねてきました。今回のお話は、地球環境時代に至るまでの世界の都市計画を振り返り、都市計画と水資源の管理を根本的に見直す必要があるとし、未来に向けたドイツのエコロジカルな都市プロジェ

クトを示しました。続いて、ワークショップの報告があり、「渋谷川魂／都市の変革」として、ピノ・ヘイエ、ウォルフラム・マイナー（ミュンヘン工科大学建築・都市開発科修了）、セシル・カーマイディク（ヴェルサイユ国立建築学校修了）の3名から発表がありました。これに対して、彼らを指導したマティアス・アーマンガード・ヴェルサイユ国立建築学校教授よりコメントがあり、“TERRITORIAL RECONFIGURATION”というタイトルで講演もいただきました。そのお話の中に都市の変革のキーワードとしての「モンスター」という言葉が示されました。

（2）リレートーク：昼食をはさみ、午後からはリレートークが行われました。①「渋谷川の景観」西村幸夫（國學院大學教授）は、渋谷川が作り出した都市景観を詳細に分析し、渋谷川が渋谷の変化の「幹」となり得ることを示しました。②「水と地域の靈性」彦根アンドレア（A H ARCHITECTS）はリモート講演で、生命も人も水から始まったとし、信仰や龍伝承とのかかわりも深く、現代アートや建築における水の靈性を表現する作品例を紹介されました。③「渋谷リバーストリートのにぎわいづくりと國學院大學」田原裕子（國學院大學教授）は渋谷川のまちづくりの具体的な取り組みとして渋谷リバーストリートを取り上げ、産・官・学・地元が一体となって進めているまちづくり活動の事例を紹介し、地域による維持管理の重要性を語りました。④「江戸東京の構造と渋谷川」神谷 博（法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員）は、渋谷川・古川が江戸東京の都市構造の骨格を形成する重要な川であることを示し、そこに寄り添う「水霊」ともいえる人々の想いがあることを示しました。⑤「川から見たテリトリー」陣内秀信（法政大学特任教授）は、江戸東京の構造をテリトリーとして捉え、渋谷川・古川の歴史を掘り下げ、消えたまちに想いを馳せつつ今後のまちづくりへの視野を示しました。⑥「渋谷川流域のグリーンインフラ」福井恒明（法政大学教授）は、今日的課題であるグリーンインフラの視点から渋谷川を解析し、下水道と化した渋谷川の現況と課題を示し、新たなグリーンインフラ施策の必要性を示唆しました。⑦「音風景で辿る／自然と交信する都市の感性」鳥越けい子（青山学院大学教授）は、サウンドスケープの考え方をもとに江戸東京の都市構造と精神性に触れ、自然と交信する

都市の感性の重要性を語りました。

（3）パネルディスカッション：リレートークに引き続き、まとめとして「渋谷川魂の蘇生とは」と題してパネルディスカッションを行いました。パネリストは國學院大學から西村先生、田原先生、法政大学から陣内先生、福井先生、青山学院大学から鳥越先生の5名が登壇し、コーディネーターは法政大学の神谷が務めました。難しいテーマに戸惑いつつも、様々な角度から意見を交わしたことでモンスターの真相に迫ることができました。西村先生は、川が1本の道を2つに分けたり結び付けたりする役割があり、まちの辿る歩みを物語として描く必要があると切り出しました。田原先生は、国道246を境に町がにぎわいと静けさの二面性を持っていると引継ぎ、平時の流量は少なく、もっと流量を増やして欲しいという意見がある一方、想定を超える降雨が発生した場合の洪水を懸念する声もあり、調整は容易ではないと語られました。陣内先生は、これほどに変化に富んでいる川は稀で普通ではない違和感があると指摘し、清正の井の流れとカリスマ美容師通り、いきなり開渠となる寂しさを映した写真家や裏原宿という傑作の物語性を作り出したプロデューサーなどに触れつつ、東急のつくったプロムナードの可能性や下流の古川から小舟で入ってつなぐと重要な場所になるという提案もされました。福井先生からは、渋谷という地域の様相が大きく変わってきている状況に対してモンスターと捉えることはキャッチーで流域全体の議論につながるとしたうえで、処理水の配分だけに頼らず玉川上水への多摩川河川水の導入復活など東京都全体の水システムの中で考える必要があると指摘しました。鳥越先生は、鴨も来ているがコンクリートの浅い水でかろうじて歩いているように見えると語り、その姿が渋谷川の問題を象徴しているように見えると語られた。ハーン先生は国を動かして大きなエコプロジェクトに取り組んでいるがどういふ戦略なのか学ぶ必要もあると指摘しました。ここでフロアの横山先生にどうすればモンスターが喜ぶか発言が求められました。横山先生は、渋谷川は存在の見えないところが想像力を掻き立て、見ようとしないと見えない不思議な川だと指摘されました。正体不明のモンスターで、人を引き寄せる力を持っており、スクランブル交差点の強力な磁力など海外の彼らがスーパークールと言う所以なのだ

ろうとのこと。少し見ない間に大化けした化け物、その隠せぬ正体が臭気なのだろうと語られた。その異臭をすべて排除するのがよいのか、むしろそこにモンスターがいることの証左になるのではと指摘された。この後、臭気問題は盛り上がり、対策されつつも完璧に押しとどめることはできない状況に対して、むしろ臭気はモンスターを察知したというポジティブ発想でもよいのではという話に落ち着きました。ここで、フロアの参加者意見を求めたところ、自然災害に対して人間の開発に対する反省の方が大事であり、自然生態系を復活させる議論が必要との指摘がありました。この意見も踏まえて、まとめに入りました。西村先生は、海外の人から見たら渋谷がスーパークールと言うが、我々から見たら普通はそうは思わない。とはいえ、海外の美しい都市や自然一杯のところでも育った人たちがなぜそう言うかそこに面白さを見出してもよいと語られました。田原先生は、もっと自然をという考え方は大事で、商業主義的開発の中でも敢えて緩傾斜護岸にして植物を根付けるなど一生懸命努力していると語られた。陣内先生は、水の都市全体をどう再生するか、80年代後半は過密分散しようとした時期があったが実際はバブル後むしろ都心回帰になった。どんどん超高層ビルが建つ都市は他にあまりない。長期的視点に立ち東京をどう考えていくかは大きなテーマ。日本の都市だけが成熟社会に向かって人口減少していながら逆行しているのは変だと指摘されました。福井先生は、複雑な東京の問題を皆自分の持ち場で考えていて全体の議論ができていない。渋谷川モンスターは川の中だけにいるのではなく、渋谷川の流域全体を考えるプラットフォームとして文化から防災の話まで語れる場として意味があるのではと語られました。鳥越先生は、再開発は区より民間の力が大きく、まちは誰のものか、資本主義の世界でそうせざるを得ないが、悪いことばかりではない。ではどうするか評論家ではなくマティアス教授が主張されたように個人が評論家にとどまらず主体的に発信・行動することの重要性についても忘れてはならない、と指摘された。最後に神谷から、まとめに代えて、私たちがやってきたつもりでも外から見たらモンスターだという、外圧をうまく使って、国際的な議論を続けていきたいという意思表示が示されました。



#### 【イベント関係】

まち歩き・ワークショップ「渋谷川モンスターを探る」

シンポジウムに先立ち、まち歩き・ワークショップや展示会、路上イベントなどが開催されました。8月1日から6日までは、欧州から来日した若者たちが主催するまち歩き・ワークショップが実施されました。1日は、宇田川ルートでテーマは「界隈」、渋谷区観光協会の協力で参加者13名でした。小田急線代々木八幡駅から宇田川沿いに歩き、千代田稲荷に立ち寄り、渋谷百軒店商店会長のお話を伺いました。その後、ワークショップ会場の青山学院アスタジオに移り、ワークショップ終了後にキックオフイベントが開かれ、12名が参加しました。8月2日は、隠田川ルートを歩き、NPO雨水まちづくりサポートが協力し、参加者10名でした。コースはJR代々木駅から渋谷川上流部の玉川上水処理水導入地点等を歩きました。ワークショップ会場は筒井国際特許事務所をお借りし、夜にはナイトウォークが行われ、NPO渋谷川ルネッサンスの協力で参加者8名でした。8月3日は渋谷リバー 스트リームルートを歩き、東急(株)の協力で参加者10名、ワークショップ会場も東急(株)の渋谷ストリーム会議室をお借りしました。8月4日は、いもり川ルートを青山学院大学の協力で歩き、参加者11名でした。ワークショップ会場は青山学院アスタジオを使用しました。8月5日は、古川ルートで東京都建設局河川部の協力を得て参加者は10名でした。ワークショップ会場は東京都の荏原調節池会議室をお借りし、施設の見学も実施しました。8月6日は、明治神宮ルートを歩き、シブヤ大学の協力を得て参加者10名でした。ワークショップ会場は渋谷区の協力によりケアコミュニティ原宿の丘を使用しました。まち歩きワークショップの参加者総数は延べ84名でした。



8月7日には路上イベント「渋谷川モニターを描いてみよう」を実施しました。開催場所は渋谷区の協力の下、渋谷区立宮下公園遊歩道でこの地点は渋谷川と宇田川が地下で合流している直上です。昼と夜の2回イベントを実施し、スタッフ6名で昼のイベントは路上にロール段ボールを敷き、その上に参加型で絵を描きました。欧州来日組は「渋谷川魂コンセプト図」の描き込みを行い、通行人参加者は「渋谷川モニターイメージ」の絵を描きました。また、大道芸イベントも行い、ここにも通行人の参加がありました。夜は同じ場所で、歌舞イベントを行い、出演者4組7名 観覧者約50名でした。内容は、ギター演奏と歌が2組、神楽ユニット1組、舞踊1組。この地点の地下に眠る渋谷川への想いを様々に表現しました。



8月10日には、まち歩きWSのまとめとして、成果物の展示、映像記録の映写及びマティアス教授による講演を行いました。会場は国連大学1階アネックステラスを借りて、スタッフ4名プラス参加者6名で実施されました。



### 今後に向けて

これらの一連のシンポジウムとイベントは、主催者の法政大学江戸東京研究センター及びエコ地域デザイン研究センターと青山学院大学総合文化政策学会により実施されましたが、共催としてドイツバイエルン州駐日代表部、DWIH TOKYO（ドイツハウスオブイノベーション）、ヴェルサイユ国立建築学校、emergent. lab（欧州からの来日若者のチーム）が加わり、後援として渋谷区、東京都、国土交通省、ドイツ連邦共和国大使館、イタリア大使館の支援をいただきました。また、協力団体として、国連大学、國學院大學、NPO 法人渋谷川ルネッサンス、NPO 法人雨水まちづくりサポート、シブヤ大学、東京都建設局河川部、渋谷区観光協会、東急（株）、筒井国際特許事務所が名を連ね、多くの方々のご協力を頂くことができました。一連のイベントについて多大のご支援を頂いたことに深く感謝いたします。本イベントはこれで終わることなく、得られた多くのつながりを生かして次年度以降も継続する予定です。



客員研究員\*1

# 潟プロジェクト

Research project about lagoons and ponds in Echigo plain

福井 恒明\*

Tsuneaki FUKUI

メンバー： 福井恒明、岩佐明彦\*<sup>1</sup>、齋藤浩志郎\*<sup>2</sup>

キーワード： 潟、環境、治水、生業、テリトリー

## 1. はじめに

2022年5月にスイスで開催されたラムサール条約第59回常設委員会において、新潟市は鹿児島県出水市と共に日本初の「ラムサール条約湿地自治体」の認証を受けた。

越後平野に位置する新潟市は市町村別の水田面積が全国一位であり、市域に対する湿地面積比率が約44%に上る。明治期に約120あった潟の多くは干拓によって農地化されたが、ラムサール条約登録湿地である佐潟をはじめ、鳥屋野潟、福島潟など16ヶ所の潟が残っている。これらに加え信濃川や阿賀野川といった大河川や西川、新川、新井郷川、栗ノ木川、新発田川などの中小河川が縦横無尽に位置し、越後平野の豊かな水循環や水環境を形成している。

こうした越後平野の水環境の保全や普及啓発のため、新潟市は潟環境研究所(2014年度～18年度、現在では環境部環境政策課に統合)を設置し、大熊孝・新潟大学名誉教授(河川工学)の指導のもとで活動を行ってきた。

潟に関連する活動は、地域住民による環境改善・維持管理活動、動植物の専門家の参画による野鳥観察や植物育成、歴史文化に関する普及啓発などさまざまなものが存在する。さらに新潟国際情報大学の研究者や学生も活動を展開している。

## 2. 潟プロジェクトの経過

2017年度には新潟市潟環境研究所が越後平野全域の潟環境のありかたの構想と表現に関する研究をNPO法人GSデザイン会議に委託した。法政大学(福井)、東京大学(中井祐教授)・早稲田大学

(佐々木葉教授)がそれぞれの研究室の学生と共に現地調査や構想にあたり、その成果を新潟市民に披露した(2018年3月14日)。その後、法政大学は佐潟(新潟市西区)周辺を、早稲田大学は福島潟(新潟市北区・新発田市)周辺を主なフィールドとして、2018年度以降も独自に潟研究を実施してきた。

佐潟については潟の利用・管理を古くから行ってきた赤塚集落を対象としてヒアリングや文献調査を実施した。時代ごとに変容する地域社会の中で、住民がどのように佐潟の風景を認識し、コミュニティの中でどのような風景が共有されてきたのかを把握する研究<sup>1)</sup>や、佐潟を含む越後平野西部を視野に、潟を取り巻く人びとの生業圏や水系に対する人為的介入の展開による文化・経済圏の展開を把握する研究<sup>2)</sup>などを行ってきた。

2020年度以降は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、現地での研究活動実施は制約を受けた。この間、佐潟に関する市民活動についてウェブサイトやSNS上での情報発信を収集し、市民活動の種類や担い手などについての基礎的情報を収集整理した。主な活動主体として、「佐潟と歩む赤塚の会」「赤塚商工会」「赤塚観光協会」「コミュニティ佐潟」「新潟砂丘遊々会」「里潟ネットワーク会議」などがある。中でも「佐潟と歩む赤塚の会」の活動が多様で、各種イベントに関わると共に、定期的な清掃により潟の状態を改善する「潟普請」の事務局を担っていることなどを把握した。

## 3. 佐潟における市民活動の把握

2022年度は地域の生業や教育と潟との関係を

より具体的に把握するために、佐潟に関連する21団体をリストアップし、その活動内容を活動誌・SNS・広報等の文献調査とヒアリング調査により調査した。その結果、1996～2022（平成8～令和4）年の間に合計1,758件の活動を確認した。これらの活動をⅠ：環境寄与・維持管理型、Ⅱ：体験学習型、Ⅲ：風景体験型、Ⅳ：産物享受型、Ⅴ：議論計画型の5類型に分類し、年ごとの活動数の推移を確認した（図1）。これらをもとに佐潟に関わる活動の変遷を概観する。

まず1996年～1999年頃は佐潟のラムサール条約湿地登録に伴い、新潟市が中心となって佐潟公園計画の見直しが行われた。この頃は新潟市とNPO法人新潟水辺の会の活動が見られるのみで、地域の主体的な活動は確認できず、活動数も低調である。2000年～2006年頃は「佐潟と歩む赤塚の会」などの市民団体や周辺の自治会、中学校などが佐潟クリーンアップ活動「潟普請」などの活動を開始する。また各種団体の協働により「佐潟まつり」が開始され、一般市民への佐潟のPRが始まる。2007～2013年頃には「佐潟周辺環境保全連絡協議会」が多くの主体の参加によって開始されることによってⅤ：議論計画型の活動が増えてくる。これと同時にⅡ：体験学習型、Ⅲ：風景体験型、Ⅳ：産物享受型のバリエーションが増える。潟舟体験やまちなみ散策などの活動により一般市民が佐潟に関心を持つ機会が増加した。2014年以降は活動総数は大きく変化しないものの、「佐潟探検隊」「水辺の生き物観察会」「水と土の芸術祭2018」など活動のバリエーションが大幅に増え、市民が佐潟に触れる機会がさらに増えていく。さらに「砂丘ウォーキング」など佐潟の水辺から離れた場所を対象とした活動も現れ、関心の幅の広がりが見られる。

佐潟周辺では、近世以来農業や漁業などの地域の生業との結びつきによって環境が維持されてきた。農業環境の改善と産業構造の変革、治水事業の進展により佐潟を取り巻く社会環境が変わる中で、地域の生業の範囲を超えた市民活動や市民の関心

の高まりによって佐潟をとりまく新たな社会システムが形成されようとしていることが読み取れる。

#### 4. 今後に向けて

今後はそれぞれの主体の活動の経緯や相互の関係性をヒアリング等によって明確にした上で、それらが佐潟を含む西蒲原地域の水系をベースにした現代のテリトリーとしてどのように持続し発展しうるのかを検討していく。

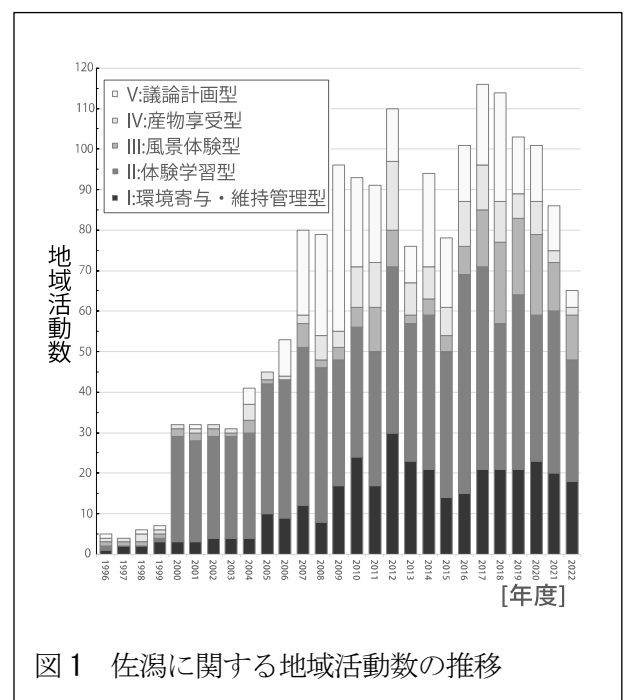


図1 佐潟に関する地域活動数の推移

#### 参考文献

- 1) 安達幸輝・福井恒明：住民の自伝的記憶から読み解く地域の風景—新潟市佐潟を対象に—, 景観・デザイン研究講演集, No.14, pp.54-61, 2018
- 2) 齋藤浩志郎・福井恒明：江戸・明治期の越後平野西部テリトリーに関する研究, 景観・デザイン研究講演集, No.17, pp.204-211, 2021

法政大学デザイン工学部教授\*1  
法政大学大学院デザイン工学研究科修士課程\*2

# 瀬戸内テリトリーオに関する研究 酒造業のテリトリーオと製塩業のテリトリーオ

A Study on the Setouchi Territory

A Case of The Territory of Sake brewing and the Territory of Salt manufacturing

樋渡彩\*1、陣内秀信\*2、田中碧衣\*3、小野愛実\*3

Aya HIWATASHI, Hidenobu JINNAI, Aoi TANAKA, Aimi ONO

メンバー：樋渡彩・陣内秀信・田中碧衣・小野愛実

キーワード：瀬戸内、テリトリーオ、酒造業、製塩業

## 1.はじめに

本研究は瀬戸内海を中心とした地域構造を考察するものである。本稿では広島酒造業で形成されたテリトリーオと、赤穂から技術が伝わった製塩業のテリトリーオに着目する。

## 2. 竹原、安芸津、西条における酒造業で形成されたテリトリーオ

各地域の酒造における酒米、水、販路について見ていく。

### 2-1. 竹原における酒造業のテリトリーオ

瀬戸内海する竹原は、製塩業が盛んだったことで知られる。酒造業もあり、1657年には16軒も酒造家があった。現在は3軒である。

江戸時代、製塩業を主とする竹原では、年貢米はほぼ大坂に流れてしまうため、日用飯米として他国米を購入する必要があった。米を輸送する北国・西国廻船が竹原に寄港しなくなると、塩の売却が難しくなることから、竹原では他国米の購入が許可された。竹原では、米が多量に流通していたことから、酒造業が盛んに行われたとされる。酒米は北前船の寄港地がある日本海沿岸部の地域に及ぶ。そして現在3軒の酒蔵では、一部で兵庫県産の酒米を使用しているが、ほとんどは広島県内のJAによって定められた酒米団地で栽培された酒米である。

竹原には、照蓮寺の入り口付近に酒造用井戸がある。かつては多くの酒蔵がこの井戸を使用して仕込み水を確保していたと推測される。この井戸は六角形の石組で、側面には「天和三十二月」と彫られ、1683年に作られたことがわかる。現在は各酒蔵が所有する井戸水や水道水を使っており、江戸時代から現代まで水の供給地は、変化がほとんどない。

販路に関しては、江戸時代は広島藩内が中心であった。県外に売られるようになったのは、三津が最初で幕府による制限が解けた後の1873年頃である。この頃は船で出荷されていた。本川に面して酒蔵を構える藤井酒造では、蔵の前に船着場があったという。呉線開通の1935年頃から、鉄道による陸路の輸送が主流となったと推測される。

### 2-2. 安芸津における酒造業のテリトリーオ

安芸津も瀬戸内海に面した港町である。酒造業では、明治時代に安芸津出身の三浦仙三郎により「軟水醸造法」が確立されたり、広島県酒造組合が創設されたりと、広島酒造業の基盤を作った重要な場所である。現在、酒蔵は2軒のみだが、明治から大正時代の最盛期には約26軒もの酒蔵があった。

安芸津の酒造業が最盛期を迎える明治時代、吟醸用には備前米を、そのほかの日本酒には三津町、日の出（岡山県）、相徳（愛媛県）を使用した。現在、広島県産に特化している。

安芸津の湧水は軟水であるため、発酵が進みにくいなど、酒造りには向かない。しかし、軟水醸造法により、軟水でも品質の良い日本酒を生産できるようになった。三浦酒造所の図面から、仕込水置場、川沿いの水車場、井戸のある洗場が読み取れ、「水」を中心に考えられた施設であることが確認できる。現在は敷地内の井戸や近隣の湧水を使用している。

運搬については、竹原同様に舟運から鉄道へと陸路へ移行されたと考えられる。

販路については、戦争に大きく影響を受けている。西南戦争の際には軍用酒として採用された。また、大正時代には日本国内のほか朝鮮、満州にまで販路が広がった。

技術の伝播にも触れておく。三浦仙三郎によって軟水醸造法が確立され、その手法を学ぶため、日本各地から杜氏が安芸津の酒造場に訪れた。その一方で、安芸津の杜氏は技術を伝えるために日本全国の酒蔵へ出向した。また、朝鮮、満州、台湾、ハワイに渡る杜氏もいた。安芸津の杜氏による醸造技術の伝播は国外も含めた広域のテリトリーオと言える。

### 2-3. 西条における酒造業のテリトリーオ

西条は西国街道の通る宿場町で、現在、酒蔵が7軒もある観光地である。

西条の酒造では、広島県産の酒米を使用し、水は、龍王山の伏流水を仕込み水として使用している。西条に降った雨は龍王山に蓄えられ、西条の町に湧く。水質も酒造りに適した中硬水であることから、酒造りができる環境が整っていると言える。

西条は内陸のため、陸路のみであった。明治時代になると、木村和平によって、賀茂鶴酒造を含め、酒蔵が密集する地域に合わせた駅舎の建設や線路の整備が行われた。つまり、酒造業に合わせて都市が整備されたのである。

酒造には桶や樽も欠かせない。樽や桶は奈良県の吉野杉が主に使われており、この杉が最上級品であるとされている。また、かつては町に樽・桶の製作所があった。

### 3. 製塩業のテリトリーオ

瀬戸内海で最も重要な産業である製塩業に注目する。塩は人類が生活していく上で必要不可欠であり、縄文時代には生産が始まっていた。8世紀ごろには塩浜塩田が作られるようになった。江戸時代初期までは揚浜式塩田が盛んであった。江戸時代初期には、潮の干満を利用した入浜式塩田が瀬戸内海で開発され、昭和30年代まで続いた。瀬戸内海沿岸は遠浅の海岸で、天日製塩に必要な太陽エネルギーを豊富に取り入れることができたため、製塩の最適な土地であった。1972年に、全国の塩田の廃止が決定された。

赤穂の入浜式塩田の歴史は古く、13世紀後半ごろから原始的な形態の入浜式塩田で製塩が行われていたと考えられている。江戸時代に入浜式塩田が確立されたことにより、その製塩技術が瀬戸内に伝えられた。

児島（岡山県）では1711年までに築造さ

れていた塩田と1830年ごろに築造された塩田の2種類に分けられる。児島に赤穂から技術が伝達したのは、赤穂城主の池田長政が下津井城主として赴任した1603年頃だと推測でき、その後、児島の南岸を中心として塩田を造成した。当時伝達された赤穂の技術は、1711年までに作られた塩田の位置や形からも、原始的な入浜式塩田であると言える。

平生（山口県）の塩田の特徴として、干潟を生かした湾内側の塩田と湾沖側に位置する2タイプの塩田がある。赤穂から平生への技術継承は1699年に三田尻に技術継承された後に行われたことから、三田尻を介してその後効率的な入浜式塩田の技術が伝えられたとされている。

そのほか、十州塩田について考察を進めた。

### 4. おわりに

酒造業では、時代によって材料の調達と販路が変わったことで、テリトリーオが大きく変化したことが明らかとなった（図1）。

赤穂の技術が十州塩田の発展に大きく貢献したことを確認した（図2）。塩田は時代ごとに地形が異なっており、赤穂から伝えられた塩田の方式の違いや塩田造成時の藩や国の関与とその後の管理、近代の電車の開通の有無、などによって塩田跡地の変遷にも違いが出るということが明らかになった。



図1 酒造業のテリトリーオの変遷（田中碧衣作製）

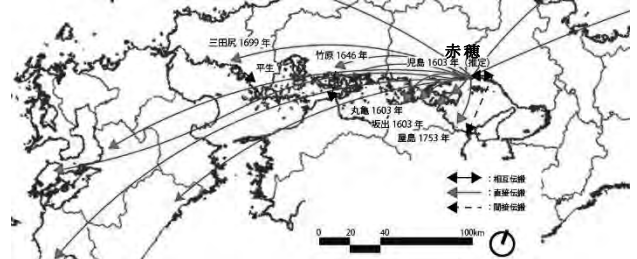


図2 製塩技術の伝播（小野愛実作製）

法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員\*1  
法政大学特任教授\*2  
近畿大学工学部建築学科4年\*3

## 佐原テリトリーオの変容と適応－佐原域学連携プロジェクト 2022

The transformation of “Sawara Territories” and adaptation  
Cooperation Project with the Sawara area in 2022

小島 聡\*

Satoshi Kojima

キーワード： 佐原テリトリーオ、空間政治学、環境変動への適応、持続的変容  
都市力、都市のレジリエンス、近世－近代の連続・不連続

### 1.2022 年度の取り組み

2022 年度はなお COVID-19 の影響により佐原域学連携プロジェクトを本格的に展開することは困難であったが、2021 年度の成果をふまえて近世自治都市佐原の先行条件について検討を進めた。2021 年度の第 2 回研究会では、大和朝廷による地方統治の成立期において海上交通の拠点であったエリアに「津」と「海夫」(漁民)の周辺集落が存在し、さらに香取神宮という宗教権力による「神戸」の組織化によって地域社会の原型が生まれたことを確認した。そこで引き続き近世および近世以前の佐原を取り上げた。

#### ① 第 3 回研究会

2022 年 3 月に行った第 3 回研究会は、福井研究室の三木歩嵩氏による報告(「近世以前の佐原テリトリーオに関する研究」)に基づいて、NPO 法人佐原アカデミアと議論した。三木氏は、近世以前から 17 世紀までの佐原テリトリーオについて、これまでの佐原の歴史に関する文献を利用しながら、地形・土地利用、水系管理、生業、交通というテリトリーオの構成要素の変遷とそれらの連関を空間図で表現し、近世以降を I 期(1590～1860)、II 期(1680～1868)に時期区分して推移を説明した。

三木氏によると、古代から中世にかけてすでに香取海の縮小と淡水化とともに、砂州(沖ノ島)が自然に形成され、近世初期には砂州群が拡大しながら新田開発と集落形成が進んでいったという。さらに 17 世紀前半の利根川東遷により砂州は拡大し、感潮河川である香取海の干満差を活かした集落と水田の土地利用の区分と、水災予防のための居村囲堤や江間(用排水路)による水管理システムが形成されていったという。しかし、18 世紀に入ると治水方式の変更と利根川流域全体での干

拓の進行によって水害が多発するようになり、普請組合の結成によって干満差を利用した治水システム(囲堤、水門、排水路)が構築された。さらに、18 世紀後半には佐原の地先に下利根川本流が移り、19 世紀以降も普請組合の拡大や幕府の「水行直し」政策が続いていく。以上の三木報告からも、近世以降の佐原テリトリーオの変遷史とは水害対策史であったといえる。三木報告を続けると、生業については、中世以前からの入会的利用を背景とした海・川・野場の共同利用が近世初期にもみられたが、17 世紀後半には運上金による落札という競争による権利取得へとコモنزが変質していく。古代から続いた漁業も、18 世紀後半の近世後期には流入する土砂により利根川下流各所で陸地化が進行して不漁が続き、他方、17 世紀から 18 世紀にかけて農村加工業である醸造業(酒と醤油)が発達する。つまりこの時期、佐原の生業構造が大きく転換したといえるのかもしれない。加えて 17 世紀末期には佐原河岸が年貢米津出し河岸として公認され、以後、船問屋による年貢米の運搬、陸路も活用した鮮魚輸送など、近世物流網の発達とともに佐原がその拠点地域として発展していく。

以上のように、佐原通史をテリトリーオの視角から空間図において復元し、かつテリトリーオの構成要素の関係性を構造図により視覚的に表現した三木氏の研究は、このプロジェクトにとって重要な意味をもつといえる。

三木報告の後の討論でも、自然の遷移による環境変動への適応と、利根川東遷という人為的な環境変動への適応という、古代から近世へと続く佐原テリトリーオの持続的変容が確認された。また霞ヶ浦との対比や、水域と砂州に形成された自然環境のコモンズとともに、近世における祭の発達

という都市コモンズへの視点、佐原テリトリーリオの多次元的な理解の必要性（近世中期以降の江戸・大坂などとの広域経済圏の形成）、環境—技術—共同体というトライアングルなどについて論点が提示された。

## ② 佐原視察

2021年度に実施できなかった佐原視察を8月中旬（8/16～17）に実施した。まず小野川から川の駅経由で利根川に船で入り、佐原と江戸の物流ルートを体感し、あらためて利根川東遷による佐原テリトリーリオの変容と江戸の都市建設によるテリトリーリオの変容の連動という、広域的かつ二元的な視野の必要性を理解した。次に、近世に始まった佐原の醸造文化が現代に継承されつつ発酵フレンチなど発酵食の文化創造が始まっていることを確認した。

さらに視察では香取神宮を訪れた。神戸集落の形成から荘園経営に至る宗教権力の支配と地域形成について推定は可能であるが、残念ながら佐原の中世については文書が乏しく、遺跡も集落の更新によって明確ではなく、なお空白の時代であることがわかった。しかし、香取神宮は、明らかに山城のごとく神戸集落と里山からなる里地空間とその先にある香取海を見渡す位置にあり、空間政治学的な観点からは、香取神宮が中世佐原の地域統治の中心に位置していたことは容易に想像できる。

また NPO 法人佐原アカデミアの小笠原理事によると、平安期には香取神宮がある台地の周辺に集落は主に存在していたが、その後、平地へと広がっていったという。これは第3回研究会の三木報告にあるように、香取海の縮小と砂州の形成、荘園経営と地域社会の拡大といった佐原テリトリーリオの変容の空間的な側面としてとらえられるのかもしれない。いずれにしても香取神宮の地域社会の実像が文書等からは不明であるならば、霞ヶ浦と鹿島神宮の関係性から類推しつつ、エコ研の特性を活かし、三木報告のように香取神宮とその周辺の空間像から、近世自治都市佐原の先行条件としての中世を推察するというアプローチが必要であろう。

佐原視察の最後に、NPO 法人佐原アカデミアと

ミーティングを行い、陣内特任教授は、最盛期に37軒の酒屋が存在したことからも佐原を交易都市だけではなく産業都市の側面からもとらえる必要性を指摘した。このことから佐原は、広域的な交易都市・近隣交易都市・産業都市という複数の都市像のレイヤーと、同時に複数の文化圏のレイヤーでとらえなければならないだろう。

また佐原の歴史的建造物は、明治25（1892）年の大火からの復興以降のものが多く、重工業都市ではなかったため第2次大戦下の空襲の影響も軽微で、重伝建地区へとつながる空間資源が残った。すなわち、近世佐原の都市力は近代に入っても維持され、都市のレジリエンスの局面もあり、他方、明治31年の鉄道の開通、さらに第2次大戦後の自動車交通への物流網の変化によってゆっくりと都市力が低下していったのであり、いわゆる都市の〈長期衰退〉としてとらえる必要がある。言い換えると、佐原テリトリーリオの歴史は近現代史まで含めざるをえないのである。

## 2. 2023年度の方向性

2023年度は古代・中世を経て成立した佐原河岸を、テリトリーリオという視角から読み解く作業とともに、佐原テリトリーリオの近代が検討課題になるだろう。おそらく近代では、テリトリーリオの下部構造である自然環境の変移よりも、上部構造である社会経済の近代化による影響と適応が中心的なテーマになると思われる。また、地域の近代化モデルのパターンとして佐原をとらえた場合、近世を克服した近代化という単純な構図ではなく、近世を継承した近代化を含む複眼的なとらえ方が必要であろう。近代以降も続いた町衆のエートスや自治の社会装置としての大祭などの持続性をふまえるならば、佐原テリトリーリオの近代を、近世—近代の連続・不連続としてとらえる視点が不可欠であり、それは近代以降の佐原の隣接地域に対する中心性の保持と、首都圏における周辺化の諸相をとらえることにもつながるだろう。

法政大学人間環境学部教授\*

# 江戸東京周辺プロジェクト

Research project on the territory around Edo-Tokyo

根崎 光男 馬場 憲一  
Mitsuo Nesaki, Kenichi Baba

メンバー：根崎光男、馬場憲一

キーワード：生業、環境、テリトリー

## 1. はじめに

2022年度に入って、歴史学、とりわけ日本近世史を専攻する2名で、「江戸東京周辺テリトリー」プロジェクトを立ち上げた。

このプロジェクトでは、近世から近代にかけての日本の中心都市であった江戸・東京とその周辺地域との関係を、一つの「テリトリー」として捉え、その特質を探っていきたいと考えている。

近世日本において、江戸が将軍の総城下町となったことで、その周辺地域は江戸の防衛や生活などを支える領域として展開してきた。そして、近代になり、江戸が東京と改められ、天皇が東京に移り、東京遷都となった。こうして、東京が名実ともに首都になると、東京周辺はその生鮮食料の主たる供給源となり、合わせてそのベッドタウンとして機能することになった。

そこで、本プロジェクトは、江戸・東京とその周辺地域を一体的に捉えた「テリトリー」として、政治・経済・文化・宗教・生業・流通などを総合的に検討し、両者間の結びつきやそれに伴う地域的偏差を究明し、その特質を究明していくことを目的としている。

## 2. 当面の研究課題

本プロジェクトは、当面の研究課題として、次の2点を考えている。

1点目は、江戸・東京の周辺地域で展開された生鮮品としての野菜・果物・魚介類、燃料としての薪・炭などの生産状況、また開国以降に展開される養豚・牧畜に伴う肉や牛乳の生産状況を調査し、その特産地を見きわめ、どのような流通体制を構築し

ていったのかを考えることである。その際、いずれの在郷町が物資の消費地であり、また中継基地として位置づいていたのかを考えることである。

2点目は、江戸・東京を消費都市という視点からだけでなく、生産都市としてその周辺地域とどのようなかかわりをもっていたのかを究明することである。たとえば、江戸・東京で排泄（生産）されたし尿・灰などが地方へ移出される際の流通体制の問題、そして江戸・東京で生産された再生紙・工芸品などの流通がその周辺地域とどのようにかかわっていたのかを考えることである。

## 3. 研究方法

江戸東京とその周辺地域との関係を知るにはさまざまな史料があるのだが、まず取り組もうとしているのが「村明細帳」の収集と分析である。

「村明細帳」は、「村鑑」とも称されるもので、村役人が領主へ提出した村落の概況を記した帳面である。その内容は、領主の交代や幕府役人の巡見などといった作成目的によっても異なるが、村高・田畑面積・農間余業・用水・普請・溜池・山林・入会地・戸数・人口・牛馬数・寺社などの村勢が記され、これらのことから村の生業や生産物などのほか、地域環境や村の諸役負担能力を知ることができる。

たとえば、寛政12年(1800)11月の下総国葛飾郡船橋九日市村(現千葉県船橋市)の「村鑑明細書上帳」(『船橋市史』史料編1)には、「当所は西瓜・さつまいもニ御座候、尤売捌之儀者江戸出し申候」とあり、畑では西瓜や薩摩芋を栽培し、江戸に出荷していた。一方、同村の寛政五年正月の「村方様子

明細帳」には、「田畑肥シ之義、春中当浦ニ而きさこをかき、藻草苺取、下肥之義は葛西領より買出申候得共、高直ニ而百姓方難義仕候」とあり、この村では田畑の肥料として江戸湾沿岸であるため貝の一種であるキサゴや藻草を用いるほか、下肥も利用していたが、これは江戸の下肥を葛西領農民が仲買したものを購入していたようである。

また近代に入ってから町の生業の把握には、「物産書上帳」などのような米穀・野菜・茶生産関連史料の収集が不可欠である。

#### 4. 多摩丘陵村落の農業と農間余業

江戸東京地域のテリトリーオの特質を明らかにするために多摩丘陵村落も対象に検討している。江戸東京が立地する武蔵野台地の南辺を流れる多摩川の西南に多摩丘陵が広がっている。そこは江戸東京から約20～30キロの距離に位置し、現在の行政区画では東京都の八王子・日野・稲城・町田、および神奈川県の川崎・横浜の各市域にあたる。

この多摩丘陵の中の東京都域に立地していた71ヶ村のうち42ヶ村に村明細帳が現存していることを確認した。もっとも古い村明細帳は多摩郡落合村(現多摩市)の元禄2年(1689)5月のもので、年次がもっとも新しいのは多摩郡梶田村(現八王子市)明治3年(1870)12月のものであった。それらの村明細帳を通して多摩丘陵村落の生業である農業と農間余業を分析した。

多摩丘陵一帯の村落は歴史的にみると古代より小高い丘と丘の挟まれた谷戸に小規模な水田を開発していたが、近世に至ると丘陵部に畑地を開墾し耕地を増加させてきていたので、大半の村が下畑、下々畑、切畑、林畑など生産力の低い耕地を抱えていた。このため農業を営むための肥料の投与が重要な意味をもっており、近世前期には「田畑こやし之儀ハ馬やこえ、つみこえには馬ふんニ而つみ候」(元禄2年5月、落合村)とあるように、馬屋肥と馬糞など自給肥料で賄われていた。しかし、時代が下った近世後期では「田畑肥は芝草馬屋肥

こぬか干鰯等入作り申候」(天保14年、小野路村=現町田市)と小糠、干鰯などの金肥が用いられるようになってきていた。

農作物は近世前期の多摩郡乞田村(現多摩市)の場合、水田で米、畑地では夏作に大麦や小麦、秋には粟・稗の雑穀や蕪・大根などの野菜類を栽培していた。享和4年(1804)2月多摩郡森野村(現町田市)の村明細帳には「五穀之外荏菜種少々作り申候、尤売出ス程ニは無御座候」とあり、近世後期になると荏・菜種など商品性の高い作物の栽培も認められるが、作付量は少なく商品化にはまだ至っていなかったようである。しかし明治元年(1868)～同3年にかけて作成された村明細帳の記述をみていくと、多くの村が畑地で大麦・小麦・大豆・小豆・粟・稗などの雑穀とともに菜種・蕎麦など商品化が可能な作物を栽培していたことがわかる。

一方、農間余業を村明細帳の記事から抽出すると、炭焼き・薪取り・養蚕・繭や木綿の糸繰り・縄ない・筵織り・箕や箆作り・木綿織りなどが行われており、これらが製品として生産されていた。このうち炭焼きは江戸で「黒川炭」と知られる産地に近く、広範な地域で行なわれていた。また在郷町として発展していた八王子町に近い多摩郡片倉村(現八王子市)の場合は、近世前期から白紬・木綿などの織物を作り、八王子町に出荷していた。

このように、江戸東京周辺テリトリーオの特質を把握するために村明細帳を通して多摩丘陵村落の生業を分析していくと、その地域に暮らす人々の様々な生活実態を明かにすることができる。

#### 5. 今後に向けて

江戸東京周辺テリトリーオには、地理的にも文化的にもさまざまな地域が存在する。たとえば、武蔵野台地地域、東京低地帯地域などがあり、地域性を考慮した分析が必要になることは論を待たない。そのため、今後も「村明細帳」を収集・分析し、地域の特質を追求していきたいと考えている。

(文責：根崎光男・馬場憲一)

## 外濠市民塾

Sotobori School for Citizen Project

福井 恒明\*

Tsuneaki FUKUI

メンバー：陣内秀信\*1, 福井恒明\*2, 郷田桃代\*3, 高道昌志\*4, 小松妙子\*5

キーワード：外濠、住民参画、企業市民、地域連携、ワークショップ、外濠再生憲章

### 1. はじめに

法政大学市ヶ谷キャンパスの目の前に広がる江戸城外濠は「史跡江戸城外濠跡」として国の史跡に指定されている。かつては水辺の公園として活用されていた貴重で雄大な水空間だが、戦後の高度経済成長期を経て、水辺を軽視する風潮や水質汚濁・悪臭の問題などからその存在感が薄れてしまった。都市における水辺の価値が見直されてきた現在においても、水辺の快適さや歴史的価値を伝える場所として十分な整備がなされていない。特に長年の課題である水質問題については2021年の東京オリンピックに向けて東京都が実施した浚渫によって多少の改善が見られたものの抜本的な解決には至っていない。水質に起因する生物多様性の確保についても課題がある。外濠の歴史や都心部の貴重な水空間としての位置づけを考えたとき、この現状は決して望ましい姿ではない。

### 2. 外濠市民塾のこれまでの活動

エコ地域デザイン研究センターでは、2012年の『外濠—江戸東京の水回廊—』<sup>1)</sup>出版以来、外濠について強い関心を持ってきた。同書は外濠のもつ多面的な価値を学術研究の成果として示すのみならず、外濠の将来像の提案も行っている。

公共が管理する空間を含む地域の環境改善を実現するには、地域住民の賛同や主体的な参画が不可欠である。しかし外濠が立地する都心という場所の特徴から、外濠に関わる人々の立場はきわめて多様である。近傍に暮らすいわゆる地元住民だけではなく、他の場所に住んで外濠近傍で商売をしていたり通勤・通学したりする人々も多い。地

元の商店会や企業は外濠周辺における重要なステークホルダーである。また大学や高校が多いのも都心ならではの特徴である。外濠の改善を実現するにはそうした広い意味での地域の方々の外濠への関心を高める必要がある。

出版や地元企業である大日本印刷（DNP）からの活動連携の提案を契機に2013年の春から外濠市民塾の活動を開始した。当初は主に『外濠』に掲載された内容に関するエコ研メンバーによる講演やこれに関連するまちあるきなどを行ってきたが、外濠のあるべき姿に関する議論を要望する機運が高まってきたことから参加者の外濠改善に関する意見やアイデアを募るワークショップも複数回実施した。

こうした活動の多くは運営者として参加してくれた大学生に負うところが大きい。外濠市民塾の運営主体は研究者だけでなく学生や企業市民が中心である。学生個人は数年で卒業してしまうが、研究室単位で参加が継続している。学生の所属は法政大学・東京理科大学・東京都立大学・日本大学・東京工業大学まで広がり、三輪田学園の高校生とも協働している。さらに大日本印刷・新宿区立四谷図書館・電通 tempo などの企業の方にもご協力いただいている。

こうした活動の成果は外濠再生懇談会名義で公表した「外濠再生憲章」や、学生が外濠の将来像をグラフィカルに描いた「外濠四季絵巻2036」に反映されている。前者は外濠の多面的な価値を①歴史的資産、②エコシステム、③生活・防災の場、④経済・にぎわいの場、⑤交流・教育の場と位置づけ、それぞれの観点からの活動方針を列挙

したものである。後者は外濠市民塾のワークショップでの意見を集約して「外濠をこのように使いたい」というアイデアを絵巻風に表現したものである。この2つは江戸城外濠開削400年となる2036年に向け、2019年3月にパンフレット『外濠 vision 2036』としてまとめた。

さらに外濠と日本橋川の水質改善のために必要不可欠な水源の確保を目指し、江戸時代と同様に玉川上水経由で多摩川の河川水を外濠に導水することについて、法政大学・東京理科大学・中央大学の総長・学長連名で小池百合子東京都知事に対して提言した。その理念は東京都の長期計画である「未来の東京」戦略（2021年3月）に反映され、2023年1月に策定された「未来の東京戦略 version up2023」では「戦略13 水と緑溢れる東京戦略」の中に「外濠の浄化」が項目としてあげられ2030年代の政策目標として「導水などによる水質改善の進展」が明記されている。

### 3. 2022年度の活動

コロナ禍以降は一般の方に対する対面イベントは控え、オンライン講演会やウェブサイト上での情報発信を活動の中心としてきた。2022年度には、学生運営メンバー自身が企画・実施する各種イベントを実施した。周辺のまちあるきを実施するチーム、外濠の水面利用を構想するチーム、前年度に作成した「おぼんカウンター」（外濠公園の柵に一時的に取り付け、飲食物などを置くことができる装置）を学生自身が使って外濠公園の利用をアピールするチームなどが活動を実施した。水面利用構想チームは2022年9月に実施された水上コンサート「奏」の活動を支援した（図1）。

また、読売新聞の取材を受け、市民塾の活動概要や学生が外濠公園で「おぼんカウンター」を使う様子（図2）が連載記事「水都ものがたり」に掲載された（読売新聞東京版2023年1月8日）。コロナ禍の活動が長期にわたり、外濠周辺を実

際に体験する機会が少ない学生が大半を占めるようになったことへの危機感は大きい。この面に配慮しながら、都市内の水辺やオープンスペースの価値が見直されている現在、江戸城外濠に対する関心を高め、使いこなし、あるべき姿について発信していく活動を続けていく。



図1 「奏」の運営メンバーと演奏者（2022年9月）



図2 読売新聞による取材状況（2022年12月）

#### 参考文献

- 1) 法政大学エコ地域デザイン研究所：外濠 江戸東京の水回廊，鹿島出版会，2012

法政大学特任教授\*1

法政大学デザイン工学部教授\*2

東京理科大学工学部教授\*3

東京都立大学都市環境学部助教\*4

法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員\*5

# 千代田学事業 -社会的包摂と場所愛着からみた千代田区内の着座空間評価-

Chiyodagaku Regional Study

Evaluation of Seating Space in Chiyoda Ward from the Perspective of Social Inclusion and Place Attachment

岩佐明彦

Akihiko IWASA

メンバー：岩佐明彦・福井恒明・今井龍一\*1・金子俊之\*2

キーワード：千代田区、公園、ニューノーマル、デザインワークショップ

## 1. 研究の背景・目的

近年、都市の外部空間の重要性が改めて注目されている。令和2年には「居心地が良く歩きたくなるまち」からはじまる都市再生」が国土交通省から提言され、まちなかを人中心のウォークアブルな都市として再生する機運が高まっている。また、covid-19の流行以降、ニューノーマルな生活様式を確立していくためにはより積極的な外部空間の活用が必要となっている。

本研究で着目するベンチや椅子などの着座空間は、外部空間の滞在性を高める上でも重要な要素であるが、それ以外にも都市における「社会的包摂」の実現や「場所愛着」の形成においても重要な役割を持つと考えられる。

(1) 社会的包摂：多様な住民や来訪者の利用が可能とし、多様な属性で構成される千代田区の構成員を見える化する。社会的包摂の一助となる「ショーケース」としての役割。

(2) 場所愛着：まちの中に誰でもアクセスできる視点場を提供することで、多様な界限で構成される千代田区の特徴を共有する。場所愛着につなげる「観覧席」としての役割。

千代田区は昼間流動人口が大きく、オフィスワーカーや観光来訪者などその属性も多様である。こうした多様な属性で社会的包摂を実現することや、多様な界限で構成される千代田区の魅力をプレゼンテーションし、その

場所への愛着を醸成することは重要である

## 2. 研究対象・研究方法概要

本研究では、千代田区の番町・麴町地域を南北に貫くプリンス通り内8箇所と日本テレビ通り内5箇所の計13箇所の着座空間(図1)を調査対象とした。調査対象となった着座空間は(外部空間に設置されているベンチや椅子、設えとして着座が可能となっている空間であり、店舗内(有料)と店舗外(無料)が含まれる。

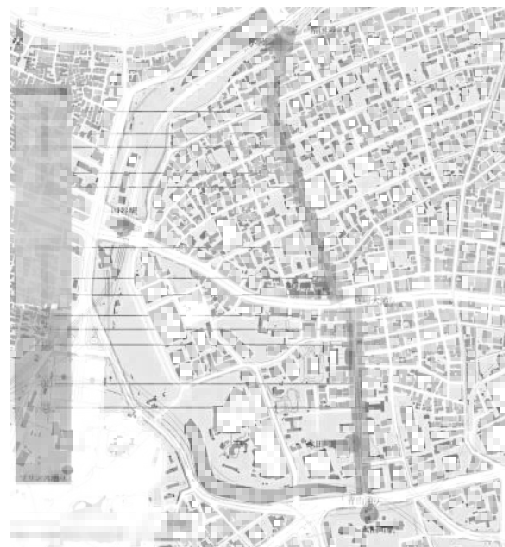


図1 調査対象

調査は予備調査(2022年10月17~19日)としてプリンス通りと日本テレビ通りの街路立面図の作成と、各調査地で一定時間滞在する調査を行った上で、以下の2観点での調査と評価を行った。

(1) 社会的包摂(「ショーケース」として

の着座空間): 観察調査により、着座空間の構成要素を抽出し、多様な属性の利用が可能であるかと、そこでの活動の見え方を評価。

(2) 場所愛着(「観覧席」としての着座空間): 予備調査に基づいて、快適に滞在が可能であることに加え、着座位置からの視点調査(可視範囲と要素配置)によりそこに居ることによって境界の特徴や認識することができるかどうかを評価。

### 3. 研究結果

まず、(1)にかかると観察調査では、対象の着座空間へのアクセスが有料(店舗内に存在する)か無料(店舗外に存在し、自由に利用できる)で大別した上で、屋根(屋根や庇、オーバル)、段差、四方(前後左右)の囲まれ感(オープン - セミオープン - セミプライベート - プライベート)で分類した。囲まれ感に加え、屋根や段差の存在が領域を明確にし、着座者の滞在性を高めている。領域性が高い着座空間は有料型に多いものの、有料型の着座空間は着座者の属性に偏りがあり、有料-無料でバリエーションが存在している。また、着座部分(着座施設)に着目すると、有料型では座席が固定的な「フォーマル型」が多数でテーブルなどの設えがあるのに対して、無料型では姿勢や着座者数が可変的な「インフォーマル型」の着座施設が存在し、選択の自由度が高いことが分かった。

次に(2)にかかると視点調査では、着座位置からの可視範囲を街路立面図にプロットした。着座空間から視認されている領域は重複しながらも偏っていることが分かった。また、各着座空間からの見え方を撮影・トレースする作業を通して、構成要素(「建物」、「道路」、「緑(街路樹、店の植栽など)」、「交通施設(信号など)」、「インフラ設備(電柱など)」)を抽出し、その視覚的な配置を「近景」「中景」「遠

景」で分類した(図2)。中景に樹木が存在し、地域の印象形成につながる可能性が指摘できた。また、道路がよく視認できる着座空間が多く、往来を観察しやすい環境であるといえた。ランドマークなど特徴的な景観を有しているわけではないが、安定的に周辺を観察できる環境を提供していることが場所愛着の形成に貢献している可能性が指摘できる。

| № | 名称                           | 着座空間(建物、道路、緑) | 緑の風景・中景・遠景 |                |
|---|------------------------------|---------------|------------|----------------|
| ① | TINC GANA                    |               |            | 遠景<br>中景<br>近景 |
| ② | Donotop<br>(日本アレスビルディング)     |               |            | 中景<br>近景       |
| ③ | 上島珈琲店                        |               |            | 遠景<br>中景<br>近景 |
| ④ | Donotop<br>(ビジネスビルディング)      |               |            | 中景             |
| ⑤ | day                          |               |            | 中景             |
| ⑥ | PIZZERIA D'ORO<br>(駅前中央通り方面) |               |            | 遠景<br>中景<br>近景 |
| ⑦ | PIZZERIA D'ORO<br>(本町方面)     |               |            | 遠景<br>中景<br>近景 |

図2 視点調査

### 4. まとめ

社会的包摂と場所愛着に着目して、着座空間について検討した。ウォークブルシティの号令下で今後も着座空間の整備が進んでいくと考えられるが、その配置や形状に関しては、周辺環境との関係性が重要であると考えられる。調査では有料型と無料型で大きく特徴が分かれたが、両者が混在(併存)しているところで、多様な着座形態と居方が実現していることが分かった。

本研究の詳細については千代田区ウェブサイトに掲載される千代田学事業報告書を参照いただきたい。

法政大学デザイン工学部教授\*1  
法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員\*2



## 2 関連研究

(2021 年度報告会 第1部)

### Related Research

**1. 平地林の変遷と都市空間における自走的活用手法について**

小野寺 一貴 (法政大学デザイン工学部 建築学科 網野禎昭研究室)

**2. 石見銀山街道と結びついたテリトリーオに関する研究**

野市 将太 (近畿大学工学部 建築学科 樋渡彩研究室)

**3. 遠賀川流域における石炭産業で形成された  
テリトリーオの変遷に関する研究**

太田 結貴 (近畿大学工学部 建築学科 樋渡彩研究室)

**4. 近世以前の佐原テリトリーオに関する研究**

三木 歩嵩 (法政大学デザイン工学部 都市環境デザイン工学科 福井恒明研究室)

**5. 都市との接続性に着目した河川空間のオープン化事業の分析**

原 聖剛 (法政大学デザイン工学部 建築学科 岩佐明彦研究室)

**6. 学校林とそれを取り巻く環境の調査および学校林更新の提案**

南 春香 (法政大学デザイン工学部 建築学科 網野禎昭研究室)

※所属は 2022 年 3 月当時

1. 序論

1.1 研究背景、研究趣旨

日本の造林地は伐採期を迎えているが伐採ができない状況に置かれている木が多く存在していることや、山間部に産業林があることで森林と生活が離れているのではないかと考える。これらの問題点から本研究では平地林業に注目し比較検討する。

日本の現在の林業と、昔の都市近郊で行われていた平地での林業について比較し、現在の林業の問題点と平地林の変遷を調べる。所沢市にヒアリング調査を行い、平地林の変遷とともに現代及び将来に向けての利用方法を導き出すことを本研究の目的とする。

2. 日本の林業と平地林の変遷

2.1 日本の林業の問題点

現在、日本の林業で考える問題点は2点ある。まず日本では若木が植林されていないため次世代の木が無く、大径木が伐採されていないため若木を植える場所が無い。さらに木材生産地と木材消費地の距離が離れていることによって伐採後の輸送コストが多くなることだ。

表1 木材生産地と木材消費地

| 木材生産量 | 県名   | 立米        | 人口の多い県 | 人口(人)      |
|-------|------|-----------|--------|------------|
| 1位    | 北海道  | 3,291,000 | 東京都    | 14,064,696 |
| 2位    | 宮崎県  | 1,787,000 | 神奈川県   | 9,240,411  |
| 3位    | 岩手県  | 1,524,000 | 大阪府    | 8,842,523  |
| 4位    | 秋田県  | 1,239,000 | 愛知県    | 7,546,192  |
| 5位    | 大分県  | 943,000   | 埼玉県    | 7,346,836  |
| 6位    | 熊本県  | 913,000   | 千葉県    | 6,287,034  |
| 7位    | 青森県  | 834,000   | 兵庫県    | 5,469,186  |
| 8位    | 福島県  | 740,000   | 北海道    | 5,228,885  |
| 9位    | 鹿児島県 | 616,000   | 福岡県    | 5,138,891  |
| 10位   | 宮城県  | 537,000   | 静岡県    | 3,635,220  |

2.2 平地林の変遷

平地林の出現は18世紀初頭で、当時の平地林は「農家+平地林」の関係であり、今の森林と私たちの生活とは異なった繋がりを持っていた。平地林からの林産物も現代の林業と異なり堆肥用の落ち葉が半分近くを占めるといった農家の結びついた森林だった。

表2 平地林からの採取物

| 三芳村における林産物 |               |       |        |
|------------|---------------|-------|--------|
| 林産物        | 数量            | 生産額   |        |
|            |               | 実数    | 割合     |
| 落ち葉        | 183,400貫      | 2934円 | 48.7%  |
| 材木         | 220尺 $\times$ | 1,540 | 25.6%  |
| 薪          | 100柵          | 600   | 10.0%  |
| 木炭         |               |       |        |
| その他        |               | 950   | 15.8%  |
| 合計         |               | 6,024 | 100.0% |

戦後のエネルギー革命によって薪や木炭などの燃料は灯油やプロパンガスが普及したこと、人口の増大と都市の拡大によって都市開発の候補地に挙げられたことによって生活に平地林が必要なくなったため衰退していった。

3. 四谷林業と現在の平地林

3.1 四谷林業について

平地林の中で産業林として有名であったのが四谷林業である。江戸時代の頃、多くの木材を生産しており収穫本数は40年伐期で1ヘクタールあたり4000~5000本であった。これは年平均80~100本程度の木材が生産されている計算になり、平地林には山林に引けを取らない木材生産力があるのではないかと考えた。

産業林として有名であった四谷林業も他の平地林と同じくエネルギー革命や都心化による地価の向上などによって持続が困難となり日の目を見なくなった。

3.2 所沢の平地林

所沢市は大小21の平地林を保護する活動をしており、産業林利用されていないが都市近郊の平地林のモデルとしてヒアリング調査を行った。

3.3 ヒアリング調査について

以下ヒアリング項目である。

- ①現在の平地林の役割について
- ②維持管理の方法について
- ③緑のパートナー団体について
- ④維持管理の問題点について
- ⑤地域住民との関わりについて

維持管理については有志のボランティアと委託業者がそれぞれ、下草刈りから伐採まで行っている。

伐採後の木材について、伐採した木材をチップ化し業者の委託費を引いた1tあたり100円が所沢市に入る形になっている。

維持管理費用は過去5年間平均でヘクタールあたり年間120万円かかっており木材チップ価格の収支では自走できないのではないかと考える。

表3 平地林維持管理費

| 年度  | 維持管理費(円)   | 若狭地藏市民の森(ha) | 若狭山の神市民の森(ha) | 総面積(ha) |
|-----|------------|--------------|---------------|---------|
| H29 | 1,836,000  | 0.94         | 1.2           | 2.1     |
| H30 | 3,996,000  | 0.94         | 1.2           | 2.1     |
| R1  | 2,035,000  | 0.94         | 1.2           | 2.1     |
| R2  | 2,827,000  | 0.94         | 1.2           | 2.1     |
| R3  | 2,365,000  | 0.94         | 1.2           | 2.1     |
| 計   | 13,059,000 |              |               |         |
| 平均  | 2,611,800  |              |               |         |

4章では所沢市の平地林維持管理費用を課題とし、平地林の自走的活用方法方法について四谷林業を参考にして考察する。

4. 現代の平地林利用

4.1 現代の平地林の選定場所

次世代の林地として「耕作放棄地」を考える。

関東の耕地面積は年間10000ヘクタール減っている。耕作放棄地に着目すると年間3000ヘクタール増えている状況で少子高齢化によって今後、状況は変化しないと考える。

4.2 平地林自走に向けての問題点

先ほども示したとおり、木材をチップ化してしまうと木材の価格が大きく低下してしまうため維持管理のコスト面を圧迫してしまうのではないかと考える。

所沢市のサプライチェーン図を図4に示す。

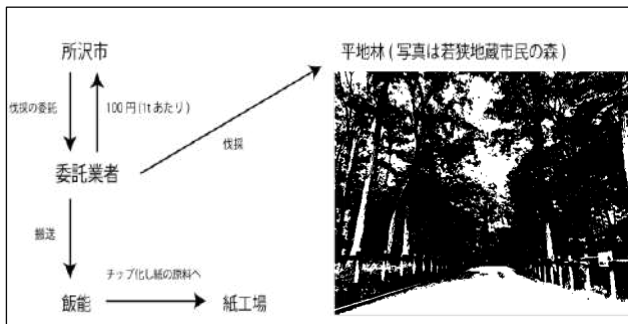


図1 所沢市サプライチェーン図

### 4.3 平地林の自走方法について

自走可能な平地林の維持管理費について四谷林業の産業林を参考にしたデータを表4に示す。

表4 維持管理費と木材価格

| 平地林(本/ha) | 林齢(年) | 胸高直径(cm) | 高さ(m) | 立木価格(円/m) | 合計金額(円) |
|-----------|-------|----------|-------|-----------|---------|
| 100       | 40    | 30       | 13    | 20000     | 1836900 |
| 90        | 40    | 30       | 13    | 20000     | 1653210 |
| 80        | 40    | 30       | 13    | 20000     | 1469520 |
| 70        | 40    | 30       | 13    | 20000     | 1285830 |
| 60        | 40    | 30       | 13    | 20000     | 1102140 |
| 50        | 40    | 30       | 13    | 20000     | 918450  |
| 40        | 40    | 30       | 13    | 20000     | 734760  |
| 30        | 40    | 30       | 13    | 20000     | 551070  |
| 20        | 40    | 30       | 13    | 20000     | 367380  |
| 10        | 40    | 30       | 13    | 20000     | 183690  |

表4より40~50本程度の伐採によって維持管理費用の半分以上を補うことができると考えられる。

平地林の自走方法について乾燥場所は小学校を提案する。小学校は少子高齢化によって廃校や他の小学校と合併するなどして減少している。そこで小学校に教育以外の複合した機能を持たせたほうが合理的ではないかと考える。

さらに木材の乾燥方法は天然乾燥の「輪掛け乾燥」を提案する。天然乾燥のメリットとしては「初期投資が少ない点」や「木材の匂いや色が落ちにくい」などのメリットが挙げられ地域木材としてのブランド化を目指すことができるのではないかと考える。さらに天然乾燥は木材の割れが表面に現れるため、木材の品質管理が行いやすいという点がある。天然乾燥は約1年間の乾燥期間を必要とするが、平地林は山林と異なり多くの木を伐採するわけではないため天然乾燥が最も適していると考えられる。



図2 輪掛け乾燥

これらのことから平地林、小学校、など生産者から消費者までの一連の流れが密接になり、自走できる平地林を目指すのではないかと考える。

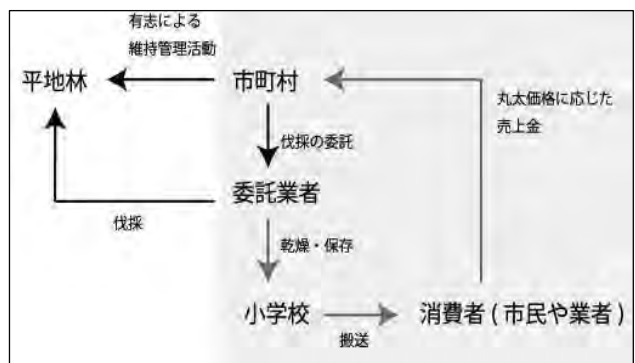


図3 提案するサプライチェーン図

### 5. 結論

現代の日本は平地林という言葉が知られていないように山が林業の場であり、平地は生活の場であり林業と切り離され考えられてきた。

昔の日本は農業と林業が結びついた生活環境があったが、人口の増加や生活圏の都市化によって平地林は減少していった。しかし、平地林は現在の山林のような消費者と生産者の距離が近いだけでなく、周囲の景観や森林教育の視点から見ても現代を生きる私たちの生活に必要なものではないかと考える。

本研究では、平地林の変遷から現代の平地林利用方法を考察することを目的とし、現存する所沢市の平地林を事例とし考察した。

本論文が新たな平地林の活用法として認知され、持続的な平地林がつくる森林景観や周辺環境が街や村の魅力として評価されることを望む。

### 参考文献

- 1) 犬井正：武蔵野大地北部における平地林の利用形態。地理学評論日本地理学会編 55(8), 1982. 08
- 2) 犬井正：関東平野の平地林の歴史と利用, 森林科学 森林科学編集委員会編(通号18), 1996. 10
- 3) 大崎六郎：平地林所持者の平地林に対する意識 林業技術(通号420), 1997. 03

## 石見銀山街道と結びついたテリトリーに関する研究

近畿大学工学部建築学科 野市将太111

石見銀山街道 地域構造 道標 神社 地蔵

1

### 1. はじめに

本研究は、島根県に位置する石見銀山から広島県の尾道の港に運ぶ道である「銀山街道」に着目し、街道を中心に発展していった地域を把握するものである（図1）。<sup>1</sup>

石見銀山については遺跡調査が行われ銀山そのものについては有名である。また、重要伝統的建造物群保存地区に指定されたとして島根県大田市の鉾山町については知られている。2007年に「石見銀山遺跡とその文化的景観」が世界遺産になったことで注目も集めている。しかし、島根から広島に抜け、瀬戸内海を通過して銀が輸送されていたルートに関する研究は乏しい。そこで本稿は、主に広島県側の銀山街道に着目し、街道沿いにどのような町が形成されていたのかを考察する。<sup>1</sup>

### 2. 銀山街道の歴史的概要

石見銀山は、1526年に本格的に開発が始められ、1600年に石見銀山は徳川幕府の支配下になり、開発が進められた。約400年間にわたって採掘された。戦国時代、石見銀山が毛利氏の支配下に入ると毛利元就は温泉津を拠点に銀山開発を行うようになった。1607～1608年ごろ以後、新たに石見銀山から広島県尾道市までの街道が整備された。大森から粕淵、九日市、酒谷、赤名をへて尾道への街道は江戸時代を通じて銀の輸送路となり銀山街道と呼ばれるようになったという<sup>注1</sup>。<sup>1</sup>

石見銀山で産出し、精錬された銀は約40kgが木箱に収められ、菰包みにしたものを2箱ずつ馬に負わせて尾道まで運ばれた。江戸時代には街道沿いに宿場が置かれた1銀を荷継するのに1つの宿場が用意した馬が250頭、人夫が400人という記録も残っている<sup>注2</sup>。<sup>1</sup>

瀬戸内海に抜けるルートは2つあり、1つは大田市大森町から尾道に通じるルートで灰吹銀の輸送で主に使われていた。その道程は約1301kmで、およそ3泊4日かけて人馬が往来した。尾道に到着した灰吹銀は、瀬戸内海を船で兵庫県室津まで運ばれ、大阪に輸送された<sup>1</sup>

もう1つのルートは、吉舎町から上下町を経由して、1笠岡（岡山県）まで運ぶルートである。年貢銀が往来していたと言われている（図1）。1街道の脇には、石造の道標もあり、またもともと松の木（図2）だったものがあり、今は建て替えられているものが多い。そこには、目的地までの距離<sup>1</sup>などが示されている。街道の分岐点や、曲がり角、所要道路との間道の接点や、街道から社寺や名所旧跡への分岐点などに設置された（図3）。<sup>1</sup>

1

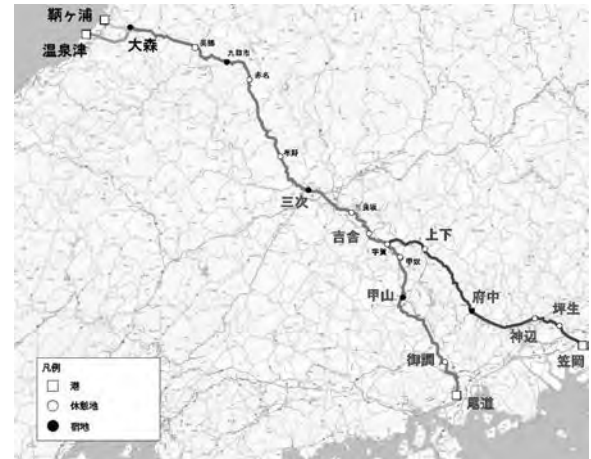


図1 銀山街道の位置<sup>11</sup>

日本海側：大森から温泉津、大森から鞆ヶ浦<sup>11</sup>

瀬戸内海側：大森から尾道、大森から笠岡<sup>11</sup>



図2 1松と思われる表記 1図3 1道標<sup>1</sup>

『芸藩通志』の一部<sup>1</sup>

1

### 3. 石州路（上下・神辺・笠岡ルート）

吉舎を抜けて、分岐点となる甲奴を東に抜け、上下から府中、坪生を通り、笠岡まで銀を運んでいたとされているが、資料が全く残っていない。<sup>1</sup>

上下は、独自の金融「上下銀」を扱っていたことで知られており、大森と同じ代官所を設け、収益低下を防止するため、商人に委託していた<sup>注3</sup>。この上下銀は、村の人々が使うだけでなく、藩自体もお世話になるほど大きい金融であり、そこを中心とした大宿場として発展していったことを把握した。<sup>1</sup>

次の府中は、備後国府ツツ地区があり、都と太宰府をつなぐ古代山陽道<sup>注4</sup>、江戸時代には、商品経済が発達し、石州街道を使って全国に運んでいたことから、外部との交流が強く、交通の接点であったことを把握した。<sup>1</sup>

府中から坪生間には、商家も多く並んでいるが、すでに姿を消しているものや、看板建築になっているものも多い。他にも交差点の付近には、道標やお地蔵が

確認でき、人が往来していたことが確かめられた。1

坪生の手前の町、神辺には、旧山陽道と石州路が交わる場所に御領があり、その周辺には狩りや農作に最適な環境だったことを思わせる町並みが確認できた。1

そして、坪生には、番所と御茶屋があったことで知られる。付近の良神社には、鳥居に「1762(宝暦 12)年 4 月吉日」、石灯笼に「1814(文化 11)年 4 月」の年号が刻まれ<sup>註5</sup>、当時人々が往来していたことがうかがえた。1

終着点の笠岡には、元々幕府直轄の地となり、代官所がおかれて、本格的な支配が行われた。代官所が置かれる<sup>註6</sup>と、備中西部の幕府領地をはじめ、一橋領から集められた年貢米を集積し、笠岡港から積み出されるようになった。そして、江戸時代には西国筋航路の寄港地として、玉島とともに備中の良港として知られていた<sup>註7</sup>。1

1

#### 4. 石見路（尾道ルート）

三次から吉舎、甲山、御調を通って尾道まで銀が運ばれた石見路は、徒歩で1日に往復できる距離(約20km)で設定された宿場町で、人間が歩いて1日で往復できる距離が目安となっている<sup>註8</sup>1

三次は江戸時代に新たに整備した城下町で、江戸の絵図や地籍図から街道沿いは町人地であったことを確かめた。街道沿いには、卯建のある建物の並ぶ景観が形成されていたことがわかった(図4)。これらの町の街道沿いでは、現在、空き家になっているだけでなく、駐車場や空き地として建物がない場所も多く存在する。もともとは商家の並ぶ特徴のある都市景観が各地に存在したことがわかった。そして、この特徴的な町と町を人や馬が活発に往来する広域の地域が形成されていたことが確認できた。1

吉舎は、元々三玉大古墳付近から銀の採掘で栄えており、銀を運ぶ道はその当時からあったものとする。その後採掘量が減少し閉山したが<sup>註9</sup>、銀山街道の宿場となったことから、むしろ発展したと推測される。1

甲山は、銀山街道として整備される前、「備後太田庄」があり、そこで収穫されたお米を年貢米として使うようになり、尾道の港から和歌山県の高野山に年貢を運ぶ道として使われていた<sup>註10</sup>。このことから甲山と尾道を結ぶ道がすでに平安時代から確立していたことがわかる。現在、旅館だった建物が立地しており、明治以降も街道が使われていたことがうかがえる(図5)。1

御調は、当時、街道沿いに店が立ち並んでいたことがわかる建築が多くあり、1階に店を構え、2階を物置としている建築タイプが多く見られた。さらに銀の輸送だけでなく、広島藩営の多くの製鉄所の鉄、米など物資を運ぶ主要道路、石見路と仏通寺越の交差する交通の要所として栄えたことで知られている<sup>註11</sup>。1

終着点の尾道は、最初、甲山から運ばれてくる年貢米を輸送する港として初めて開かれ、そこからさまざまな物資を運ぶ主要な港としてさらに発展していった。1



図4 卯建ある町並み



1図5 旅館1

#### 5. おわりに

銀山街道を軸に、石州路の、島根県から岡山県へ、石見路の広島県を結ぶ重要な街道をつないで見てきた。1

街道として以前から利用されていた地域が銀山街道として整備されたことで交通量が増え、発展していったことが確認できた。そこには陣屋、御銀蔵、籠屋、茶屋、番所など都市機能が設置されていたことが、地籍図や絵図から読み取れた。1

そして、この特徴的な町と町を人や馬が活発に往来する広域の地域が形成されていたことが確認できた。1

このように、現在の島根県と広島県、岡山県を結ぶ重要な街道であることが明らかとなった。街道を軸に地域を捉え直すことで、かつて育まれていたその場所本来の地域の枠組みを浮かび上がらせることができると考えられる。1

1

#### 注

注1) <https://www.iinan.jp/history/map/ginzan02.html> (2021年12月07日検索)。1

注2) 同前。1

注3) 井上厚史『大学生がつくる銀山街道ガイドブック』、山陰中央新報社、2011年、p.82。1

注4) <http://k-yagumo.sakura.ne.jp/web3/sekisyu.html> (2021年12月30日検索)。1

注5) <http://tsubou-kyodoshi.jp/aruki/navi/map043.html> (2021年12月8日検索)。1

注6) 笠岡市教育委員会『笠岡市歴史文化基本構想』笠岡市、2019年、p.31。1

注7) 同前書、p.89。1

注8) 杉原耕治『文学歴史紀行銀の道ものがたり—1 石見銀山から尾道へ』山陰中央新報社、2011年、p.198。1

注9) <http://kisajichi.com/gaiyou.html> (2021年11月29日検索)。1

注10) 井上厚史監修『大学生がつくる銀山街道ガイドブック』山陰中央新報社、2011年、p.64。1

注11) 同前書、p.1273。1

## 遠賀川流域における石炭産業で形成されたテリトリーの変遷に関する研究

石炭産業 遠賀川流域 舟運 芦屋 若松1

1

### 1. はじめに

石炭産業に関する研究は、「筑豊」地方の視点から鉄道敷設後の経済発展を扱うものが多い。しかし、鉄道敷設以前から川を利用して舟で石炭が運ばれていた。石炭産業と結びついた地域の全体像を把握するためには、舟運で形成された地域を描く必要がある。そこで本研究は、遠賀川と結びついて発展した石炭産業の地域像を描くことを目的とする。1

研究方法は、各地に分散している郷土史や考古学などの資料を遠賀川流域で捉え直す。広域を扱っている産業史や経済史の研究を用いながら、可能な限り地図に場所を示し、実態を把握する。そして、各地域のつながりの変化について、時代を区分しながら考察する。1

1

### 2. 石炭産業の歴史的概要

遠賀川流域の地質は、河川沿いに堆積岩の地層が広がっている。この辺りは石炭の採掘場として知られる<sup>註1</sup>。17世紀後半には、家庭用燃料として石炭が利用されていた<sup>註2</sup>。18世紀初頭から瀬戸内海地域で製塩の燃料として石炭を用いるようになったことで石炭産業が興った。石炭の登場により、塩の生産量は薪よりもはるかに増量し、瀬戸内海の経済も大きく発展した。小倉藩と福岡藩は域内の石炭採掘・輸送・販売を藩の管理下に置き、炭鉱の開発を進めた。当時の「福岡藩焚石会所」は遠賀川河口の芦屋にあり、内陸部から芦屋まで舟で石炭を運んでいた。1

1872(明治5)年の鉱山解放令により炭鉱開発が一気に進められた。1891年には筑豊鉱業鉄道が引かれ、次第に鉄道輸送が主体となり、若松までの石炭の輸送は舟運から鉄道に切り替わっていった。1901年に操業開始した八幡製鉄所の創業により、生産量が増大した。1

そして第二次世界大戦後、石油へとシフトし、石炭産業は衰退した。このように石炭産業は18世紀から20世紀半ばまでこの地域の発展を支えていたことがわかる。1

1

### 3. 原始から古代の遠賀川流域

遠賀川上流域では縄文時代の遺跡が発掘されている<sup>註3</sup>。これらの遺跡は石炭の採掘場と重なり、石炭産業が興る以前から、この辺りには人が住んでいたことがわかる。1

1

### 4. 中世から近世前半の舟運で形成された遠賀川地域

中世から近世は、遠賀川を利用した水運が主であった。12世紀半頃には山鹿庄から年貢米を運ぶため、瀬戸内の地乗り航路を航行し、数艘の船で輸送した。鎌倉時代の

年貢米の輸送経路は、遠賀川流域の各地から河口の芦屋まで川舟で運び、芦屋で大船に積み替え、門司港を経て瀬戸内海に輸送した。1699年、年貢米は、福岡城下に集められた。しかし、遠賀川流域の四郡には不便なため、1699年には芦屋に集められた。そして、大船が芦屋港に着岸できないことから、1722年、若松に大船の積出港が移転された。年貢米は、芦屋から江川を通過して若松に運ばれたのである。港の移転は、芦屋の衰退に向かう転換点だと考えられる。1

この時代、藩による街道の整備も行われた。若松と唐津を結ぶ唐津街道、小倉と長崎を結ぶ長崎街道、小倉と筑後の松崎を結ぶ秋月街道である。街道沿いの宿場町は、舟運とも結びついて発展した<sup>註5</sup>。1

このように、遠賀川を中心として内陸部と芦屋を結ぶつながりが強かった時代である。芦屋が海と陸を結ぶ中継地となっていたことから、この時代は芦屋が最も栄えていたと推測される。また、陸路も整備されたことで、面的な地域のつながりが展開していく兆しが見える。1

1

### 5. 堀川と結びついて形成された遠賀川流域

堀川の開削により、内陸部から芦屋を経由せずに若松まで運ばれる航路が誕生した。堀川の掘削の目的は、洪水対策、灌漑用、舟運の利便性の3点である。1804年、堀川運河が完成し、「遠賀川—中間—堀川—若松—瀬戸内海」の航路が誕生した。1826年に芦屋会所が設立され、遠賀・鞍手・嘉麻・穂波四郡の石炭は、芦屋会所で取り引きされた。若松へ行く石炭は塩田用に限り、芦屋会所で許可を与えて、堀川を通すことにした。1840年頃には、石炭が堀川を経由して、若松へと運ばれていた。堀川の掘削は、芦屋よりも若松に港の重要性が高まるのを促進したのである。堀川の川ひらたは、1880-1890年代は最盛期を迎え、8,000艘にのぼった<sup>註6</sup>。1885年の資料から炭鉱は遠賀川流域に集中していることがわかる。この炭鉱で採掘された石炭が、河川を利用して若松まで運ばれ、日本各地に輸送されたのである。1

1

### 6. 鉄道と結びついて形成された遠賀川流域1

1891(明治24)年、筑豊興業鉄道により、若松—直方間で鉄道が開通した。1926年には嘉徳郡、田川郡はすべて鉄道に移行し、下流部の川ひらたの数は91.7%である<sup>註8</sup>。水運から陸運への移行がうかがえる。1

#### 6-1. 若松

江戸時代初期、若松は漁村だった。堀川の開削後は、石

炭を積んだ舟も若松に寄港するようになる。明治に入り、石炭積出港の整備が計画された。筑豊興業鉄道が敷設工事を始めたのを機に、1890年に若松築港会社が設立された。1897年、八幡官営製鉄所が開業し、若松築港は洞海湾の施設を拡充、石炭港から大工業港へと発展した。1891年に鉄道が敷設されると、1901年には、筑豊炭田から若松への着炭と析出量は大幅に増大し、国内シェアの約50%を占めるまでになる<sup>注7</sup>。1917年には、大型汽船が入港できるようになり、日本最大の石炭積出港に発展した。1

このように、若松は石炭積出港として船と鉄道が結びつきながら発展した町であることが確認できた。1

## 6-2. 直方

遠賀川沿いに位置する直方は、長崎街道の宿場町で、明治時代に石炭産業で栄えた町のひとつとして知られる。1623-1720年、直方には黒田藩の支藩が置かれ、1626年に城下町が完成した<sup>注9</sup>。1885年、福岡県は「県令石炭坑業人組合準則」により、各郡にそれぞれ同業組合を設立する。直方は、五郡石炭業組合（旧筑前国の遠賀・鞍手・嘉麻・穂波と、旧豊前国の田川）に入っている。1893年、筑豊石炭鉱業組合に改称し、活動の本部を石炭積出港の若松に置いた。これが「筑豊」の名の由来である。組合の会議は、直方にある筑豊石炭鉱業組合直方会議所で行われた<sup>注10</sup>。直方に会議所があることから、石炭産業の中心地だったことがうかがえる。1891年には直方ー若松間で鉄道が引かれ、石炭産業はますます発展していった。1

1

## 7. おわりに1

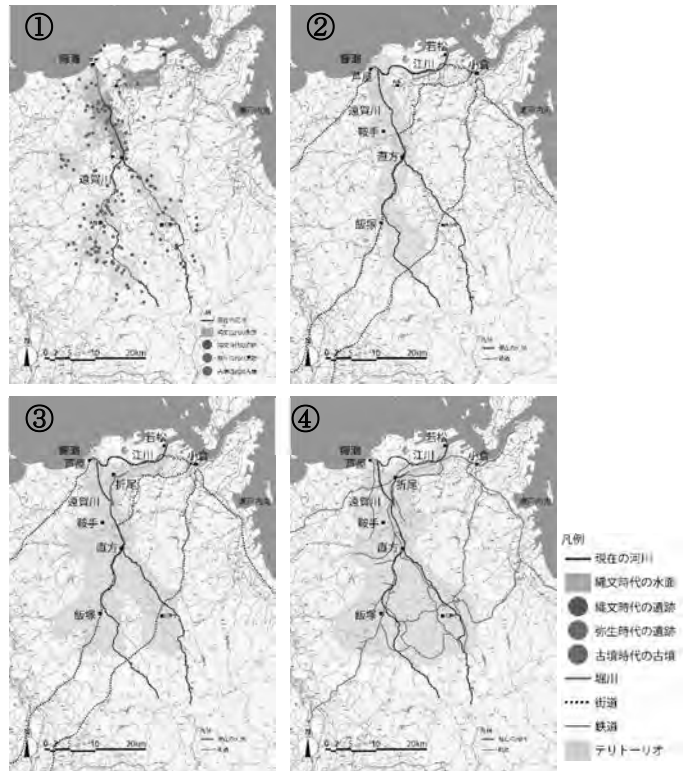
遠賀川流域では石炭産業が興る以前から居住地が存在し、初期は拠点が点在する分散型であった（図1）。1

1中世には遠賀川を軸とした舟運があり、内陸部と河口の芦屋を結ぶ線型の地域構造があったことが明らかとなった。この時、拠点は芦屋である。江戸時代になると街道も整備され、陸側にも線状の地域構造が形成された。1

18世紀に石炭産業が興り、19世紀後半には、石炭産業と河川交通による面的な広がりのある地域構造に変化したことを確認した。この時の拠点は若松である。大船の寄港地が芦屋から若松に移転したことで、若松が拠点になるきっかけとなり、堀川開削が新たな航路をもたらし、若松はますます重要な港町になった。1

そして1891年に鉄道開通後、鉄道がいくつも敷設され、石炭産業と鉄道が結びついた面的な地域構造に変化したことを述べた。1

遠賀川流域の地域構造は長い時間軸のなかで、点から線、そして産業と結びつくことで面的に広がっていったことが明らかとなった。そこにはインフラの変化による地域の変容も確認できた。このように産業から地域構造の変化を捉えていくことで、新たな地域の見方を示唆できると考えられる。1



①点・分散 ②線・舟運 ③面・舟運と結びついた地域  
④面・鉄道と結びついた地域1

図1 遠賀川流域の地域構造の変遷1

（作成：太田結貴、樋渡彩）

## 注

注1) 20万分の1日本シームレス地質図、国土地理院。1

注2) 一般財団法人石炭フロンティア機構 (<http://www.1jcoal.or.jp/worldheritage/03/05/> 2021年11月25日検索)。1

注3) 芦屋町歴史民俗資料館、展示資料。1

注4) NPO法人遠賀川流域住民の会『もっと知りたい遠賀川』文字の花書房、2006年、p.52。1

注5) 長崎街道の筑前六宿は黒崎・木屋瀬・飯塚・内野・山家・原田である。現地説明板「木屋瀬宿西構口跡」、北九州教育委員会。1

注6) 長弘雄次「遠賀川の水運交通に関する研究」『土木史研究』第13号、土木学会、1993年。111

注7) 現地説明板「若松-港100年史」。1

注8) 長弘雄次、前載論文。1

注9) 現地説明板「直方藩主館跡」、直方市教育委員会。1

注10) 直方市石炭記念館、展示資料「筑豊石炭鉱業組合と直方会議所の歴史」。1

## 主な参考文献

・NPO法人遠賀川流域住民の会『もっと知りたい遠賀川』文字の花書房、2006年1



#### 4.1. I期 (1590~1680年頃)

I期は中世由来の入会的生業範囲の縮小から生業の多様化までの時期である。佐原村では背後に野林を持たないことから、香取海に形成される野場は、本田の経営補完として重要な位置付けにあり、同様の自然条件を持つ周辺村落と共同で利用した。野場は、真菰や萱といった植物が生育する低湿地帯であり、こうした植物は開発した新田の肥料として利用された。また、新田開発の際には、堆積した砂州上に集落を立地させ、その周りに広がる水田区間では、海の干満差を利用した排水システムが構築された。

#### 4.2. II期 (1680~1870年頃)

II期は資源流通範囲の広範化の時期である。利根川各所で河道の付け替えや新田開発により、水害が増加した。これに伴い、集落と田畑を守るために佐原村を含む根郷村落や新嶋領で普請組合が結成され、囲堤が構築された。さらに数カ所に水門を設置し、用排水の流出入路とした。また、I期にみられた新田開発が完了したことで、野場の範囲が限られ、真菰や萱を通した肥料調達では田畑の維持ができなくなったことから、九十九里浜や房総地域から干鰯が調達されたと考えられる。さらに酒造や醤油醸造といった農産加工業が起り、酒の材料である米を年貢余剰米として年貢米回漕を行った村々から補った。以上のように、資源調達範囲を広域化させていくことで、佐原の産業が持続していた。

#### 5. 結論

佐原における資源利用・調達と共同体形成の地理的関係性を示しながら、佐原と、利根川流域と下総台地の一部をテリトリーとして捉える見方を示した。

#### 6. 今後の課題

本研究では触れることのできなかった、近世以降の佐原を特徴づける祭礼に着目することで、佐原とその周辺地域における地域社会と集落空間の関係性を現在まで追うことができると考える。

#### 参考文献

- 1) 樋渡彩: ヴェネツィアのリドにおける19世紀半ば以前の地域構造に関する考察, 日本建築学会計画系論文集, 82巻734号, pp.1091-1098, 2017.
- 2) 齋藤浩志郎, 福井恒明: 江戸・明治期の越後平野西部テリトリーに関する研究, 景観・デザイン研究講演集, 17, pp.204-211, 2021.

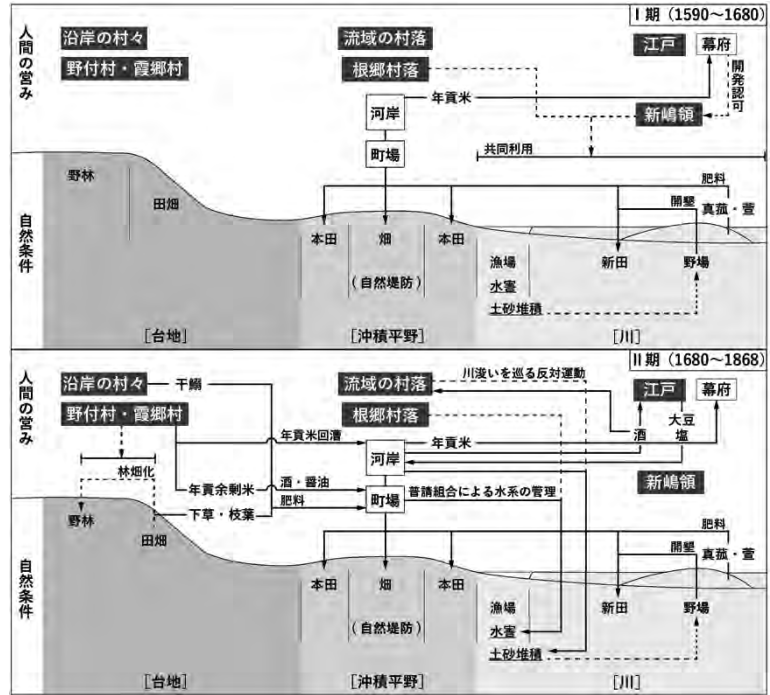


図-2 近世佐原と周辺地域における水系の管理と生業の関係

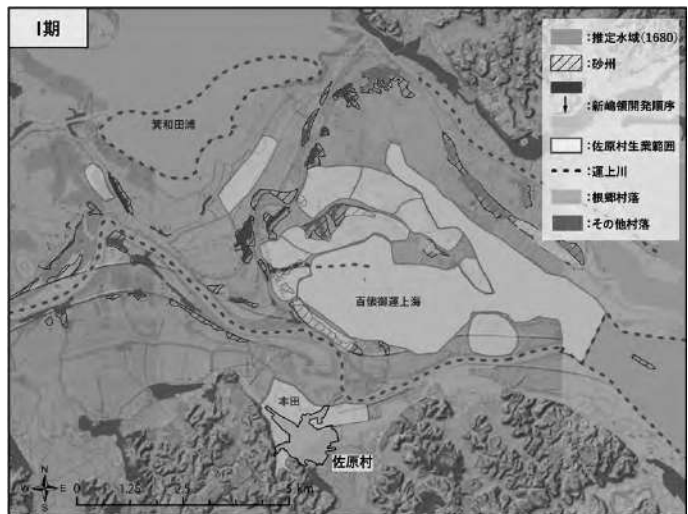


図-3 近世佐原における地形・土地利用と生業の関係

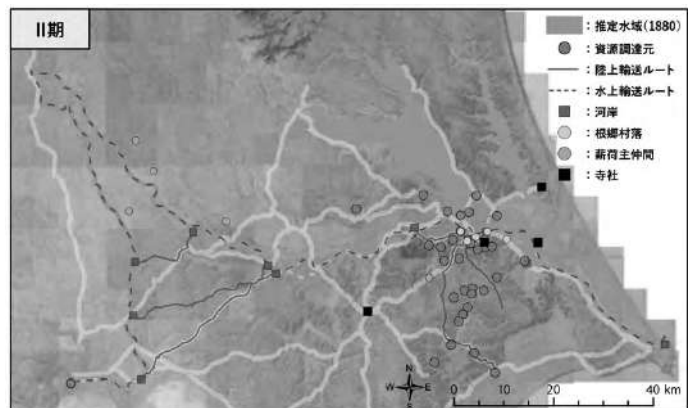


図-4 近世佐原における地形・土地利用, 生業, 交通の関係

## 1. はじめに

日常生活と河川は切っても切れない関係にある。生活用水や産業での利用など、水の供給としての役割を主に担っていることがよく分かる。一方で、河川空間自体の利用という点に着目したことがあるだろうか。古来より人々は稲作や舟運を通じて河川を積極的に利用していたのだ。しかし、近代化が進むにつれて利用されることがなくなり、近年では水質汚染や暗渠化などにより川が存在が危ぶまれている。そういった背景から、近年河川敷地の積極的利用を促す「河川空間のオープン化」事業が開始した。この事業の推進が、都市において裏側の存在になりつつある河川空間を再び賑わい溢れる空間にすることができるのではないだろうか。

### 1.2 研究目的

この研究では、ここ数年で注目されるようになった河川空間において、都市における河川空間のオープン化が周囲の環境とどのように結びつき、影響を与えているのかを探っていく。従来の河川空間は都市に対して閉鎖的になりがちであったものが、実際の事例が行われた場所ではどのように変化したのか、そして本当に当初の目的が為されているのかということに注目して調査をしていきたい。また、事例を比較していくことで設置方法や事業スキーム等のパターン化をしていき、改善点や理想の河川のオープン化と都市の関わり方とは何かという事を示していくことを目的とする。

## 2. 河川の概要

### 2.1. 歴史

河川利用の始まりは縄文時代に起きた温暖化に次ぐ寒冷化によって河川が生まれたことに遡る。平野部を中心に河川沿いでの農業が始まり、農業用水のために河川は利用された。その後江戸時代までは農業中心の社会であり、引き続き利用されることになる。一方で、戦国時代以降は城下町の発展により街に運河を張り巡らせ、舟運が開始されるようになった。運河沿いには荷物を下ろすための河岸や蔵が整備され、商人を中心に利用するようになる。しかし、一般の市民が利用する公道と河岸は蔵によって隔たれており、舟運に直接かかわる者以外には河川と距離があったと考えられる。その後、明治時代中期に入ると鉄道網の発展、昭和時代の戦後の発展期には高度経済成長や道路網の発達によって河川空間は汚染され、都市開発による埋め立てや暗渠化が行われるようになった。そういった背景から現代では、河川沿いの緑を保全する活動や、環境に配慮した法律などによって河川を守るための動きがなされている。

### 2.2 管理形態

河川は国民共有の資産であるため国が管理をしている。実際の管理は国の直轄他に都道府県や市町村区に任せることが多い。この管理形態の問題なのは、流域の基礎自治体(市町村区)には河川管理の部局がないことである。そのため、過去に国が管理する流域で、基礎自治体の意思を無視した開発が行われてしまったこともあった。一方で、河川管理の部局というのはかなり頑迷なものであり、占用許可に対してはかなり厳しく判断していた。そういった管理があったことで、現在の自然を残す河川があるのではないだろうか。

## 3. 研究対象

### 3.1 河川空間のオープン化事業の概要

河川空間のオープン化が行われる以前は、河川敷地占用許可準則に基づいた占用許可がなされていた。その際にはインフラ設備や公共施設など、一定の公共性や公益性を持つもののみが占用でき、民間事業者が占用するといったことはなかったようである。

その後営業活動を河川空間で行いたいという声が上がったことから平成16年3月から河川敷地での営業活動を社会実験として開始した。結果的に一定の効果が得られた他、国土交通省成長戦略の商業利用促進の観点から、平成23年度に河川敷地占用許可準則を改正したことで始まった。河川空間のオープン化は河川管理者や地方公共団体などで結成されたよる協議会を活用し、自治体の合意を図った上で河川管理者が指定した占用主体・区域において営業活動を行うことができる。この取り組みの今までとは異なる点として河川管理者と地域が協力していることである。これによって計画に対して正式な合意を得た上で、地域の発展に寄与するための施設やアクティビティを実現することができるようになった。

### 3.2 研究対象事例

都市部における河川空間のオープン化事例を調査するため、三大都市圏に含まれる東京都と大阪府の河川沿いにある15事例を調査することにする。なお、中京圏の事例はそれぞれ敷地が離れているものが多く、また他に比べて少なめであったため今回は省くことにした。

## 4. 調査・分析方法

### 4.1 調査方法

今回の研究では、対象の事例における空間構成だけでなく、事業スキームなどのソフト面での活用方法も注目していきたいので、現地調査の他にそれぞれの河川の運用情報も必要になる。そのため、現地調査の他に文献調査・インターネットでのホームページでの情報収集を行った。

### 4.2 分析方法

研究目的である事例の比較を行うために、共通の評価軸を定めることにした。まず大枠となる5つのテーマ分けを行い、その中に3つ基準となる項目を設定した。よって合計15項目によって調査を行う。また、事例の比較をしやすくするために、それぞれの項目に点数をつけることにした。0点、1点、2点の3段階とし、それぞれの項目ごとに点数のつけ方を設定する。項目設定を行うにあたり、都市を変える水辺アクション(学芸出版社)での水辺への働きかけ事例を参考にした。また、5つのテーマからなる評価軸をまとめるために、レーダーチャートを用いる。これによって、どのテーマが優れているか視認しやすくする。



図1 5つのテーマとレーダーチャート

## 5. 調査結果と分析

### 5.1 評価軸からの分析

日常的な利用に関する項目は全体的に評価が高くなっていることが分かった。一方で水上での利用の項目は全体的に低いことから、都市における水上利用の場や機会が少ないことが考えられる。その他の3項目は場所によって評価に差が見られたことから、現時点で敷地環境などが関連していることが考えられる。

### 5.2 空間構成に関する調査結果と分析

15事例の中で空間を構成する要素を分類すると4つ挙げることができる。これらの要素を組み合わせることで、都市における河川空間のオープン化が構成されていることが分かる。結果的に6つのパターンに分けることができた。

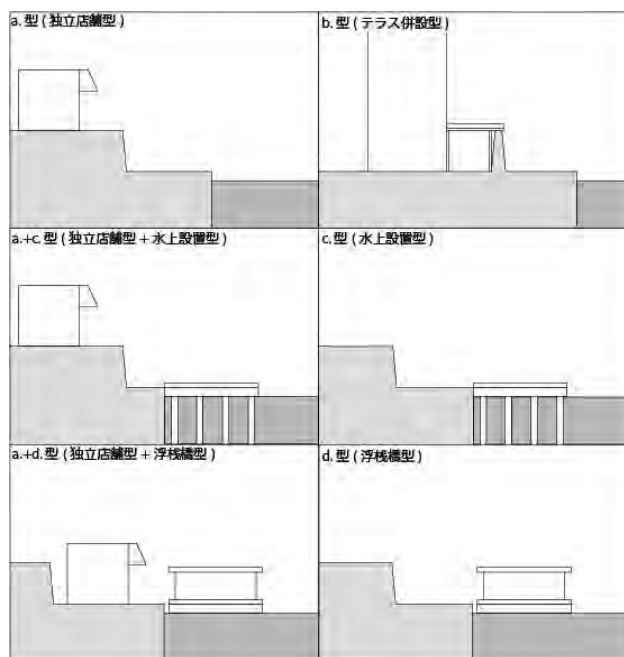


図2 空間構成のパターン

この調査結果から、敷地環境がオープン化事業の規模や範囲に大きく影響を与えることが分かった。b.型はコンクリート護岸が視認性やアクセス性に大きく影響を与えていることが分かった。一方で a.+c.型は広大な敷地を利用しリバーウォークの整備や店舗の設置などを行っていることが挙げられ、敷地の選定から重要であることが考えられる。

また、如何にして都市や河川沿いと接続性を図っているかという点も大きく関わっていると考えられた。その手法としてリバーウォークの整備や水上テラス・浮き桟橋の設置による水上利用設備の設置が挙げられる。それぞれ敷地環境に配慮しつつ工夫がなされていることが分かった。

### 5.3 事業スキームに関する調査結果と分析

河川空間のオープン化では、すべての事例において公民連携で事業が行われる。そのため、それぞれの組織の関わり合いが重要になるため、それを示す事業スキームが存在する。これらは直接占有型と間接占有型の2つに分けることができた。

直接占有型は事業者が占有主体となり、河川管理者に直接占有許可を取るパターンである。15事例の中では、事業者による飲食店などのサービスが少数のみある場合が多く、基本的に申請と許可をする2者のみで成り立つため、非常に分かりやすいスキームになっている。第三者として、協議会が地域の合意の提出や占有者の選出をおこなっている。

間接占有型は自治体や協議会が占有主体となることで、実際に利用する事業者と管理者との仲介役となるパターンである。複数の事業者を募集している場合や、広場をイベント利用する際のように一時的に利用する場合に多く見られた。事業規模が大きい場合や複雑なものは、それらを一括で管理するために必要になると考える。



図3 事業スキームのパターン

### 5.4 調査結果のまとめ

今回は都市の中でも東京と大阪の15事例のみの調査であったが、評価軸による分析結果と空間構成の要素・事業スキームとの関連性が分かった。河川空間のオープン化をおこなう敷地によって空間構成が異なり、事業規模が変化していく。そして、規模の大きさによって参加する事業者の数や種類が変わり、これらを総合的に見た結果が評価に表れていると感じた。

本研究における空間構成パターンの中で一番事例が多く、かつ優れていると考えられるのは a.+c.型である。都市からの接続を店舗から、また河川からの接続を水上に設置したテラスやリバーウォークでそれぞれ図ることで都市と一体化したオープン化空間が構成されていると考えた。

一方で、全体的に親水設備など水上の利用ができる箇所の検討が必要であると感じた。興味深い事例として、竹芝地区の干潟事業があげられる。シーズンになると定期的に入ることができ、都心で親水体験をすることができる貴重な事例であり、非常に参考になるだろう。

## 6. 結論

本論文では、都市に埋もれつつある河川空間を再び賑わいを取り戻すための手段として、河川空間のオープン化事業は新たな可能性を生むものではないだろうかという仮定から、大都市圏である東京と大阪の事例を分析することで現在の状態と事例の比較をおこなった。

本研究時点でも全国に80事例存在する上、河川空間のオープン化事例は今後も増え続けると考えられるが、より河川上の繋がりを意識した計画をする必要があると考えた。例を挙げると、大阪の中之島近辺の事例のように、かわまちづくり支援制度に基づいた計画をすることで、敷地の選定から水上利用のための整備などを、繋がりを意識しておこなうことができる。東京の事例は一点でみると優れたものが多いが、それぞれの事例の繋がりがあまり意識されていないと感じた。

今後の河川空間のオープン化は、自治体を越えた区域で協議し計画を行うことで、より線的に繋がりを意識したものになり、都市を巻き込み盛り上げる存在になるだろう。

### 参考文献

- 1) 吉川勝英著：河川の管理と空間利用 河川はだれのものか、どうつき合うか、鹿島出版会、2009
- 2) 泉英明・嘉名光市・武田重明著：都市を変える水辺アクション実践ガイド、学芸出版社、2015

## 1. 序論

### 1.1 研究背景・目的

日本では近年、国産材活用が課題となっているが、国民の認識、問題意識が甘いと感じていた。そしてその改善のためには小中学校での環境教育の見直しが必要であると思ったが、「環境への問題意識は教育では変えることができない」「周りの環境こそが環境への問題意識を育てる」という考えに変わっていった。そこで身近に自然と触れ合うことのできる学校林を現在まで保有・活用している静岡県井之頭中学校の調査を行い、これからの学校林の検討、提案を本研究の目的とする。

### 1.2 研究方法

ヒアリング・実地調査の分析結果を踏まえ、今後の学校林更新の提案を行う。

## 2. 研究対象

### 2.1 学校林とは

小学校、中学校、高等学校等において、学校の基本財産形成や児童・生徒への環境に関する教育、体験活動を目的に、学校が保有している森林である。（\*参考文献(1)引用）

### 2.2 静岡県富士宮市立井之頭中学校分析

#### 2.2.1 学校林の変遷

植林当初は校舎建て替えが目的だったため、ほとんどが針葉樹であった。その後、生物多様性の面から広葉樹に変えられた。当初から現在まで手入れが定期的に行われており、美しい森林を保っている。

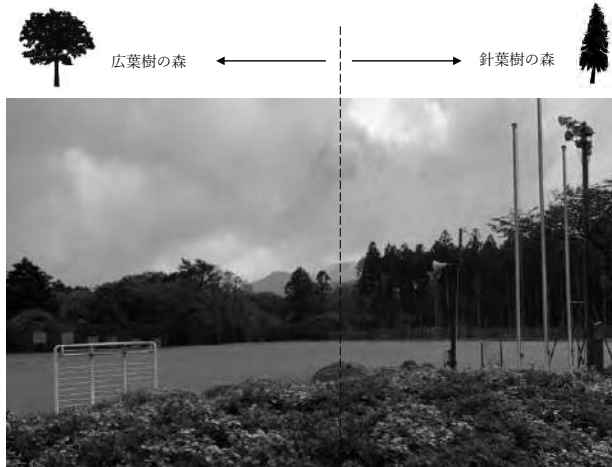


図1 校舎から見た学校林

#### 2.2.2 学校林が現在の体制を維持できている理由

井之頭中学校は他の学校と比べ地域住民の「自分たちの学校」という意識が強い。地域唯一の中学校ということもあり住民の多くが井之頭中学校の卒業生であるため、地域活動に協力的である。また外部との連携教育を行っており、それによって下りた補助金を整備に回すことができている。

## 3. 提案

### 3.1 天然更新をするための諸要因

「鳥獣被害の有無」と「日光の当たり方」が天然更新が可能かどうかを決める。井之頭中学校の学校林は実地調査の結果、鳥獣被害の影響が少なかった。また以前からの手入れの甲斐もあり日光がまんべんなく入っており、天然更新のポテンシャルがあることがわかった。



図2 日光のよく入る学校林



図3 順調に育つ針葉樹の芽

### 3.2 ゾーニング案

今回は広葉樹林に比べ日光が入らず、学校からの距離も遠い針葉樹林の改善のため、以下の提案を行う。

学校と生徒の距離を近づけるために針葉樹林の中に広場を作り、そこに木材を活用した建物を建てる。グレーのエリアでは林業教育の観点から、全学生が在学中に必ず伐採を体験できるように3年に1度、学校行事で伐採を行う。この60年を1周期としたローテーションを繰り返すことで持続可能な森林になると考える。伐採エリアと順番はモザイク状に配置する。モザイク状に伐採していくことによってギャップと呼ばれる樹冠内の隙間が順番に生まれ、長期的にみると森林に日光がまんべんなく行き渡る。白のエリアでは広葉樹への転換を目指すため、最初の1周期は針葉樹の伐採と広葉樹の植林を行い、その後は必要に応じて伐採を行う。斜線のエリアは学校の歴史を伝えるため、現存する木を東海自然歩道沿いに残す。

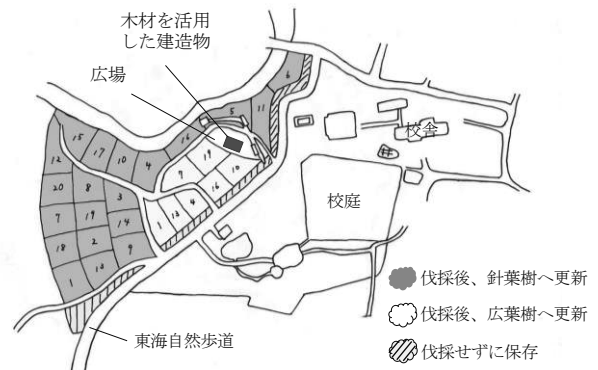


図4 ゾーニング図

## 4. まとめ

本研究は現在の学校林計画の課題、学校林を持続させるために必要な要素を抽出し、それらを踏まえたギャップ作成や学校教育を絡めた提案を行った。

### 参考文献

- 1) 林野庁. “学校林活動”. 林野庁ホームページ. (オンライン), <[https://www.rinya.maff.go.jp/j/ryokka/school\\_forest/](https://www.rinya.maff.go.jp/j/ryokka/school_forest/)>, (参照 2021-8-20).
- 2) 富士宮市立井之頭中学校: 富士宮市立井之頭中学校学校林 希望の森マップ, pp. 2, 2015





# 3 テリトリーオの日本的展開

(2021 年度報告会 第2部)

## 1. イントロダクション～新たな地域主義の展開

陣内 秀信 (法政大学特任教授)

## 2. 秋田におけるテリトリーオ

小杉 栄次郎 (秋田公立美術大学教授)

## 3. ディスカッション

パネラー：陣内 秀信

小杉 栄次郎

樋渡 彩 (近畿大学工学部建築学科講師)

木村 純子 (法政大学経営学部教授)

小島 聡 (法政大学人間環境学部教授)

司会進行：岩佐 明彦 (法政大学デザイン工学部教授)

## 第2部「テリトリーオの日本的展開」

2022年2月24日（木）15時～

- (1) イントロダクション：陣内 秀信（法政大学特任教授）（10分）
- (2) 秋田におけるテリトリーオ 小杉 栄次郎（秋田公立美術大学教授）（40分）
- (3) ディスカッション（40分）

パネラー：陣内 秀信、小杉 栄次郎、  
樋渡 彩（近畿大学工学部建築学科講師）、  
木村 純子（法政大学経営学部教授）、  
小島 聡（法政大学人間環境学部教授）、  
司会進行：岩佐 明彦（法政大学デザイン工学部教授）

### （1）イントロダクション～新たな地域主義の展開（陣内秀信）

#### 豊かな過去を見直す「都市再生」

拡大成長の時代がとっくに終わっているのに、なかなか日本はその発想から抜け出せません。バランスの取れた国土、生活環境を実現していくためには、歴史や自然やコミュニティをもう一度見直す必要があって、そのために歴史的都市の再評価だけではなく、都市の周辺の田園や農村、山林、そしてテリトリーオまで広げて、そのバランスをもう一回作り上げていくことが求められます。まさにそれが都市の再生、テリトリーオの再生ということですが、実は僕は1978年に本を2冊（※）出して、そこで「都市再生」という言葉を使っています。日本ではかなり早い段階で使ったと自負しているんですけど（笑）、日本ではこの「都市再生」という言葉が全然違う文脈で後の時代に使われるようになりました。僕は、近代の都市計画の発想から脱して、自然と対話する、人間がつくった環境や文化、そういう豊かな過去を見直していくという方向で「都市再生」を考えていました。「都市を読む」という発想から「都市再生」というのは出てくるわけです。それはイタリア留学時代に学んできたことです。

※「都市のルネサンス」中公新書

「イタリア都市再生の理論」SD選書

#### 掘り起こした70年代、花開いた80年代

イタリアでも、最初から田園や農村といったテリトリーオが評価されたわけではありません。やはり段階を追ってきたんですよね。イタリアの場合は、もともと「都市の国」と言われるくらいに都市に魅力がある。ところが近代化で、産業開発で、どんどんその魅力が失われていくという危機があって、これはまずい、アイデンティティを守るためにも、ということで、70年代に保存・再生が言われるようになりました。それを文字通り牽引したのがボローニャです。歴史的な街区、チェントロ・ストリコと言いますが、その建物一棟一棟を調べて、カテゴリーに分けて、どれをどう保存再生していくか、というガイドラインをつくる。そして、一番傷んでいてスラム化しかかっているようなところを公共事業で一気に再生していきました。これが大変評価されたのです。この70年代が、ヨーロッパ、アメリカ、そして日本でもターニングポイントです。

ローマクラブの「成長の限界」というレポートが出たり、シューマッハが Small Is beautiful という、非常に魅力的なキャッチコピーのコンセプトを言ったり、オイルショックの後、地域主義というのは日本でも一世を風靡しました。玉野井芳郎さん、後に法政の総長になられた清成先生らがこの時期に活躍されて、地域主義ということを提唱され、全国の地域それぞれが頑張って地方の時代と言われました。代表的な例としては横浜がそういうスピリットを体現して、田村明さんがリーダーシップを取って、アーバンデザインで頑張って、歴史や文化を大切にしました。公害闘争から少しずつ前進して、環境の質やまちづくりへということが進められたわけです。現在言っている、水や緑、歴史的景観、アメニティなどは、すべてこの時期に耕されて出てきたんですね。そういうチャレンジの時期、掘り起こしの時期が 70 年代でした。低成長時代だからできたとも言えます。そして 80 年代にそれが開花するんですね。

僕がずっと取り組んでいるイタリアと日本を比較してみたいんですけど、ちょうど 80 年代というのは両方、都市の文化が開きました。イタリアは中小都市が元気になり、小さな企業、家族経営のところが非常にクリエイティブな経済活動をやって、ファッション、デザインもがんばって、イタリアらしさが、クリエイティブなものが出てきた。そして都市を回復していくんですね。チェントロ・ストリコが歩行者空間化され、ファッション都市だったコモなんかは古い建物をカッコよく利用して 80 年代のイタリアの都市は輝いたんです。東京でも 80 年代前半の都市は、非常に輝いていました。パルコが登場したり、機能主義や開発開発でやっていた 60 年代から完全に抜け出して、もっと人間の心をつかむことが考えられ、都市空間をカッコよくみんなが使いたい、仕掛ける、そういう時代だったんです。澁漨と輝いたのが 80 年代前半です。その時期に東京のなかでも谷根千が出てきたり、ウォーターフロント・ブームがおきたりして歴史的景観を見直す動きも出てきました。そういう集積の上に、80 年代中ごろに江戸東京ブームになるんですけど、ここからがイタリアと日本の歩みがずれてしまいます。

## 日本は一極集中へ、イタリア・ヨーロッパは田園へ

イタリアはこの時期に田園にも向かった。東京は、日本は東京一極集中に戻ってしまう。そしてバブルの時代になって経済がまた上向きになり、せっかくのロフト文化の倉庫が壊されてオフィスビルになる。住宅はもう作られず、オフィスビルばかり構想される。さらには副都心を海上に作ろうという計画なども出てきます。この計画は結局頓挫するわけですが、そういった流れのなかで、「都市再生」という言葉は日本流に解釈されて、開発をさらに大きいスケールで実現するための法整備、制度整備が行われて、現実には大きな開発が今も続いている状況があるわけです。

一方、イタリアでは 80 年代後半、田園とのつながり、文化的景観、景観法、こういうものが非常に重要視されるようになります。これはヨーロッパ全体の流れで、フランスやイタリアがユネスコを中心に文化的景観というものを大切にするようになっていく。一見なんでもないような田園が評価されて文化的景観として世界遺産になる。70 年代中盤くらいにチェントロ・ストリコの保存再生で成果を上げて、中小都市や地方の都市が輝きを取り戻して経済活動も戻ってくる、クリエイティブに作られる、それが 80 年代にはテリトリーオへ、田園へと広がっていった。さらに

田園、海浜、山間部など自然を主に扱った景観法が 1985 年に制定されます。アグリトゥリズムも同じ年で、スローフードは 1986 年に、ということで、どんどん次のステップへ進んでいくわけです。

エコ研としてもそういうのを横目に見ながら、日野の研究調査、そして実践を地元の人たちとやってきました。市民と一緒にマップを作るといった地道な動きも底辺ではあるんです。底辺では東京中に、日本中にあるんですけど、やはり財界とか政界とか日本を引っ張ろうとする原理は従来型にとどまっている。ですから、そうじゃない方向へどんどん行ってほしいと思います。

### 失われた地域のつながりを取り戻す試み

今日、樋渡研の方たちが瀬戸内海のテリトリーオに関することに触れてくれました。他の方々も瀬戸内のテリトリーオのポテンシャルをもう一回評価し、再生していくという話をしてくださいました。しばしばその中心は舟運でしたが、街道を通じて、内陸部でもそういうネットワークがあったということが今日も報告されていましたよね。

私が例として用意したこの大洲周辺もその一環ですね。ここは瀬戸内海なんですけど、かつて江戸時代には川を中心として一つのテリトリーオとして意味があった。内子は蠟燭とか和紙とか、産業の都市として発展し、大洲は殿様の政治的都市、行政の都市、同時に産業も発達した。できたものは舟で川を下って、長浜という港町から舟運を使って関西へ、そして世界へと。和紙も世界へと輸出されていたんですね。その経済の蓄積で、すばらしい町並みができた。こういうものが、鉄道の時代になり、舟運が意味を失い、都市間どうしの連携もなくなってみんなばらばらになっちゃった。これをもう一回、かつて成り立っていたものを見直してみたい。そういうセットが日本中にある。

内子は重要伝統的建造物群を使って、80 年代から頑張っています。いまは周辺のテリトリーオ、村並みまでがんばろうとしています。それで、この人たちは全部結び付けてやっていきたい、と。サイクリングで、自転車で結びつける方法もあります。すごくいい城下町で、城に宿泊もできるんです。町の中もアルベルゴ・ディフーズ、分散型のホテルが広がっています。NIPPONIA という一つの会社が展開しているんですけど、この活動で空き家がずいぶん再生されてきて元気になっています。まさにルネサンスがいま始まっている。

近代に、なかなか意識されずに分断されてしまったこういったつながりを、もう一回見えるようにして、そして意識をつなぎ、制度的にも全体でなにかやっていけるようなことを考えていきたい。もちろん観光は大いに可能性がある。そういう、地域を新しく見直す「新たな地域主義」というものが必要なのではないのでしょうか。

以上です。ありがとうございました。



## (2) 秋田におけるテリトリー (小杉栄次郎)

### 「新しいけど懐かしい」チーム・ティンバライズの活動

秋田公立美術大学の小杉です。今日は秋田をベースに携わってきたプロジェクトをいくつか紹介させていただいて、シンポジウムの議論のきっかけになればと思っております。

私は、2013年に縁あって秋田に赴任しました。秋田に来た理由はいろいろあるのですが、その理由の一つに、興味をもちずっと関わっていた都市木造の研究があります。研究の一環として、チーム・ティンバライズ (team Timberize) という NPO を立ち上げて東京で活動していたのですが、まずそれがどういう団体かを少しお話させていただきます。

日本には、古くから続く木造建築の歴史・文化があるのですが、日本が近代化する中で木造建築は取り残されました。木造建築だけが近代化されずに置いていかれてしまったということです。ところが、国策として伐採期を迎えた国産材を活用していかざるを得ないという状況のなかで、2000年に建築基準法が改正されて、制度的、法律的にはどんな用途の建築でも木で作ってもいいという話になり、比較的都市のなかでも木が使いやすくなります。そうした背景があって、大学時代の同級生を中心に新しい木造建築の可能性を研究し始めました。ただ、研究ばかりしていてもなかなか実現していかないので、一般市民の方々に向けてそういった方向性や技術的な可能性を広めていくことを目指して立ち上げたのが、この NPO 法人のチーム・ティンバライズでした。ティンバライズは造語ですけれども、古くからある伝統文化をリスペクトしながら、近代化のなかで取り残された木材という材料を新素材として捉え、もっと新しい可能性を見出せないか、というようなところから始めました。それでさまざまな展覧会などをして、都市の中で、これから実現されるであろう用途の建築を「都市木造」という名前をつけて提案しています。2010年に青山のスパイラルギャラリーで行った展覧会で、原宿、表参道の街並みを都市木造でモンタージュして示したのものには、コピーライターの糸井重里さんが「新しいけど懐かしい風景」とキャッチコピーを付けてくれました。近代建築が時代との遮断で新しいものに作り替えていくという思想だったとすると、僕らがやろうとしているのは時間をつなげていくというか、懐かしさを感じるような新しさ、そういったものをやりたいのかなと自分たちで意識しながら活動をしています。展覧会などのほかにも、都市木造の実践として建築家として設計に関わって、おそらく当時(2013年)としては初めて、東京の下馬に5階建ての集合住宅を作りました。

こうした活動をするなかで秋田での教員のお話をいただいたわけです。秋田は林業県で、秋田杉というブランドは皆さん聞いたことがあると思いますけれども、都市木造を目指すという自分の立ち位置と、林業県の秋田が重なりました。



### 駅周辺の街づくりビジョンを勝手に作る

2013年に私が秋田に赴任した頃は、まだ大学も開学したばかりで学生もそれほど多くなかったこともあり、秋田でさまざまな町に出歩いて、調査というかフィールドワークをしていました。そのなかで思ったのは、中心市街地をまず手始めに、秋田の街をしっかりと考えたいということで

す。

ちょうど私が赴任したときに秋田駅西口のバスターミナルが木造化されて、さすが秋田、これから町がいろいろ変っていくのかな、と思ったんですが、このバス停の木造化が広がりを見せることはなく、単発のプロジェクトで終わるようでした。そのバスターミナル周辺の風景はというと、駅前の一等地にもかかわらず、客待ちのタクシーがたくさん並んでいる。さらにその反対側を眺めると、これまた駐車場。車がたくさんあるわけだから、たぶん人は周辺にはいるはずなんですけど、ほとんど町の中に人の姿が見えない。雪国の寒冷地なので、冬の気候を一番に考える習慣になっていて、屋外で人が滞留できるような空間づくりをしていない、というのが主な原因だろうと思います。

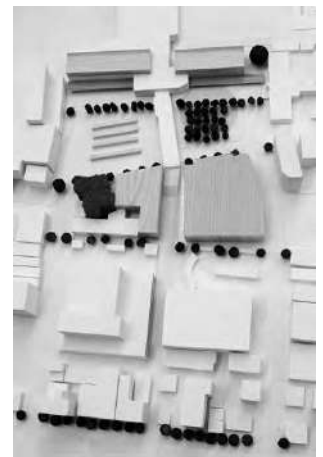


また、秋田駅は橋上化されていて立派な東西自由通路があります。橋上化したときの通路というのは、国の補助金で作られることが多いので、大概は通行量に合わせて幅が決められて、天井高は基本的に3m、3.5mくらいのものでほとんどですが、秋田は25年前に秋田新幹線が入って来たときに、秋田市が費用を自腹で追加し、かなり余裕のある自由通路を作っていました。幅も広いし天井も高いので、空間的にはすごく豊かな場所なんですけれども、自由通路として、基本的には人が滞留するというよりは歩行する空間になっていました。

こうした駅周辺の状況を見て、この駅周辺の町づくりのビジョンみたいなものを作れないか、と考えました。美術大学ですので、工学的な視点というより、美術系の文化人類学の先生とか美術史の先生とかランドスケープデザインの先生らと一緒に、秋田の中心市街地、駅前がどんな街になったら楽しいかとか、どんなふうにすれば人が集まってくるか、といったことを話し合っていました。

### 「冬」ではなく「春夏秋」に街を合わせる

地方都市はどこもそうですが、歴史的にはそれまで舟運などその土地土地の独自の交通体系があったはずなのに、自動車の台頭によって、自家用車依存の町にすべてが置き換えられていて、秋田も他聞に漏れずそういうかたちになっていました。人の空間というよりも車のための空間になりすぎている。それを、なにか変えていけないかというところで、僕が興味を持って研究・実践していた都市木造と木質化によって、人が滞留できるような街、人の居場所のある街にできないかというようなことを考えて、ブレストの成果をまとめて絵をつくりました。デザインするのではなくて、ただキーワードを並べているだけのものですが、たとえば駅前の交通広場をしっかりと空間化するためにスカイラインを合わせるような増改築をしようとか、駐車場を5階建てにして空間をちゃんと顕在化させると同時に平置き駐車スペースを人のための芝生の広場にしたらどうかとか。「秋田プルータル



シティプロジェクト」と名前を付け、1、2か月でさっとまとめました。

こういうことを言い出すと、往々にして雪国の方からは「冬、使えない」という話をされます。しかし私が秋田に来て感じたのは、確かに冬は厳しいのですが、春夏秋は素晴らしい気候だということです。夏はそれほど暑くないし、春はそれこそ一斉に花が芽吹いて、本当に気持ちいい。年間の3/4が素晴らしい気候なのに、1/4の厳しい気候のためだけに街を合わせるとするのはもったいない。そういう気持ちがあったので、その3/4を楽しむための広場でいいじゃないか、と。冬は雪捨て場にしたらいいし、雪が集まれば美大の学生たちと一緒に雪像作ってもいいし、みたいなことを冗談交じりに言っていました。

公立大学の教員ということもあって、その頃のJR秋田の支社長さんとか都市計画部の部長さんとか、さまざまな地方都市のキーマンに直接会ったりする機会も増えて、この絵を巡っていろいろ話をすると、けっこう皆さんおもしろがって話を聞いてくれました。

秋田というのは、おそらくバブル期までは都市計画を熱心にされていた町で、1980年代くらいまではけっこう盛り上がっていた賑わいのある町だったんです。ただ、バブル崩壊後、地価がすごく下がり、人口流出、少子高齢化の問題もあって、最近は少しさびしくなっていた。だから、実は民間も行政もなにかしなくちゃいけないというのはわかっていたんだけど、言ったほうが負けとか、言ったんだからやれ、となるのが怖くて、にらみ合いみたいな状況になっていた。でも僕は大学の教員として、ある意味では無責任に、研究と称していろいろ提案ができる。その提案が議論のきっかけになればいいなと思っていたところ、皆さん、興味はあったので、新参者の僕がこういうのを持っていくとおもしろがってくれて、あーだこーだ言ってくれた。そういう意味で、最初のころの動きはすごく意味があったなと思っています。

### 木質化の可能性を一般の人たちに伝える

そうこうしていたところ、その次の年から秋田県の研究助成を受けることになりました。林業県の秋田で、地域木材の需要を高めていきたいという産業的な意味合いの強い助成金で、それなりにまとまった、3000万円ほどのけっこう大きな額があるという話でした。僕がチーム・ティンバライズで活動していたということもご存知で、秋田県産材の需要を高めるようなプログラムを何か作れないかということ相談されたのです。今までどんなことをしていたかを県の方にお聞きしたところ、基本的には建築の設計者や工務店、工事会社に向けて、東京や県内で展示会みたいなことをして、秋田県の木材を紹介するイベントを開催してきた、と。でも私がチーム・ティンバライズの展覧会を通して確信していたのは、今まで木材が使われていない場所で木の需要を増やしていくのであれば、技術者、建築家や工務店だけではなくて一般の方々にまずそういうことが可能になっていることを知ってもらわなければいけない、ということです。建築の場合、クライアントになるのは必ずしも技術者や建築家ではない。一般の方々にこそ、そういう時代であること、そういうことが可能だということを知ってもらうべきだ。そういう説明をして、秋田でも今後住宅需要以外の需要を増やしたいのであれば、一般の方々にアピールしようという内容の計画書を作り、2014年から2015年に「市街地木質化実証モデル事業」というプロジェクトを行うことになりました。

プロジェクトでは、まず市街地を調査して、現状の法規内で、その気になればすぐにでも木を使える場所を調べて、それをモンタージュやCGで一般の方々にわかりやすく伝えるようなことをしました。たとえば自由通路の下のピロティ部分などは、スチールに塗装をした状態でしたが、こういったところは雨がかりにもならないので、木材を使いやすい。専門家はもちろん知ってるようなことですが、一般の方々にどれだけ届けられるかを主に考えました。駅前に古くからある緑屋という秋田で一番古いデパートだった建築なども、木質のリノベーションができるし、ダブルスキンにすることによって温熱環境的にも安定するし、さらに木材の老朽化や傷みに対してメンテナンスもしやすい、というようなことをセットで説明しました。また、ティンバライズですとやってきた展覧会を秋田でもやろうということで、安藤忠雄さんが設計した県立美術館で、「秋田をティンバライズする」というコンセプトで展覧会をして、一般の方々にも、今はこんな時代になってますよということを訴えていきました。



## 大きな家具を置いたら人々のいる風景が変わった

こうしてさまざまなかたちで可能性を示したんですが、ただ「できますよ、できますよ」というだけではなく、木を使った空間は居心地がよくて機能的にも優れているということを実際に知ってもらうことも重要です。そこで、一般の方々が自由にその空間を感じられる実証モデルをつくらうということになり、いろいろ場所を検討した結果、先ほど話をした秋田駅の自由通路部分でやることになりました。そして改札回りを木質化することと併せて、自由通路に木製の家具、ジャイアントファニチャーと呼んでいますが、テーブルのようなハイカウンターとあづま屋のようなベンチを置いてみたらどうか、ということを考えてみました。駅は私もよく利用していましたが、テーブル類が一切なくて、時間がちょっとあるときにパソコンを開いたりできる場所があるといいなと自分が思っていたこともあったので、そうした使い方ができるようなハイカウンターを提案しました。それと、人とおしゃべりしたり、そこに滞留することを目的としたベンチ、フォーリー・ベンチを置くとどういうふうになるかというのをやってみました。

まず、自由通路の木質化についてお話すると、壁面などにただ木を貼るだけではなくて、なるべく木の表面積を増やすために、ルーバー状のしつらえにしています。改札の周辺だけでも木を使うと、そのあたりに木のにおいが充満するようになって、秋田駅に降り立った JR の利用者から「改札に来ると木の香りがした」と、けっこうな反響があったそうです。ビジュアルだけでなく、五感で木を感じてもらえて、評判はまずまずだったと思います。

ハイカウンターは、実際置いてみると、今までなかった風景がこの場所に生まれました。それ

まで若い子たちは通路にあまりいなかったんですが、座って飲み食いしながらおしゃべりする風景や、学生たちが電車を待つ間にちょっと腰掛けて話していたりする、そういった風景が見られるようになりました。フォーリー・ベンチでも、グループで来た方々はけっこう楽しそうにおしゃべりしたりしています。



実は、これらを設置するとき、この自由通路を管理する秋田市の管理事務室からは、ここは条例で通路として決められている場所なので人に滞留してもらっては困る、とかなり難色を示されました。ところが市民が生き生きとその場所を使っているところを見てだんだん変わってきて、最初は毎月使用許可申請を出せと強く言われていたものが、1年ごとになり、さらにその後は、もうずっと置いていいよというように変化していきました。

町の中に人が滞留して、人がいるということが感じられる場所が増えていくと、ちょっと寂しくなっていた中心市街地の町の風景が変わるんじゃないかなと思ったわけですが、このプロジェクトの評判がよかったことが、後の展開につながっていくことになります。

### 利用者目線で待合室を「アキタリビング」に

JR秋田駅は、こまち開業20年を機に大幅にリニューアルするという計画がありました。このリニューアルについて、県の実証モデル事業が評判よかったということで、私がご一緒するという話になったわけです。

そのときのプロジェクトの一番のキモは、待合スペースでした。もともと駅には待合スペースがあって、空調がしっかり効いていて、ロッカーもあってと機能的には十分だったのですが、お世辞にも居心地がいいところではなかった。テレビ見るか寝るかしかないというような場所だったので、まずここをメインに変えていこうという話になりました。

秋田駅の中ではあるのですが、JRだけでなくさまざまな会社に関わるプロジェクトなので、皆で共通のコンセプトが持てるように、新しい待合空間は「アキタリビング」だというコンセプトにして取り組みました。

このとき一番重要だったのは、いろいろな店舗の配置です。実は観光案内所も物販も飲食もビュープラザもみどりの窓口も全部運営会社が別なんです。ビュープラザはJR系の旅行代理店ですけれども、会社は別です。管理が別々なので部屋が小分けになっている。確かに分かれていると管理はしやすいんですが、利用者にとって本当に利便性が高いかというとは実はそうじゃない。待合室を使う人にとっては、観光案内所もお土産物屋さんも近くにあったほうが本当はいいよね、と。営業時間もそれぞれ違うので、最初のうちは皆さん懐疑的だったのですが、ユーザー目線で

空間を作らないと意味がないということを JR の担当者と根気よく話をし、配置を変えていくことになりました。

待合室を待合ラウンジという名前に変え、観光案内所と物販店を一室に併設し、その両側に飲食店とコンビニを配置するというかたちです。待合ラウンジのデザインも、それまでは窓がない暗い部屋だったのを、窓があるスペースとして、新幹線こまちの出入りが見える「トレインビューカウンター」を設けました。さらに建築のしつらえだけじゃなくて家具もさまざまデザインと選定をさせてもらっています。「アキタリビング」というコンセプトだったので、秋田の木材産業に関わる方々や漆の産地の職人さんたちも巻き込んでデザインしました。たとえば曲げ合板を使ったイスも今回デザインさせてもらったのですが、これはなかなかの技術で、たぶん世界でもここまで曲げられる技術はなかなかない。秋田ってやっぱり木材産業に関して、すごく技術の高い工場がいっぱいあるわけです。曲げ木の技術も、ヨーロッパのトーネットという会社の技術を日本に持ちこんで、たぶんいま日本で唯一の曲げ木で家具を作る秋田木工という会社もあります。そうしたところの、オーセンティックな定番の家具のカラーリングとファブリックをこちらで選定しなおして持ちこんでいきました。リビングなので、ロッキングチェアがあったらいいんじゃないかって、半分冗談で提案したところ、JR がそれはいい、と喜んでくれて採用になりました。駅の待合室に置き家具でしかもロッキングチェアが置いてあるのはたぶん秋田だけだと思います（笑）。



## ルール化しなくても、みんなが木を使い始めた

実際にオープンしてみると、利用者数が明らかに変わりました。若い子たちが増えたとし、明らかに電車を使わない人も使っている。お土産物屋さんも、実際に売り上げが数倍に上がって、いまもそこそこ順調だと聞いています。観光案内所は、以前は小さい部屋で自動ドアで入らなければいけなかったのが、待合ラウンジに併設されているので利用者も3倍以上に増えたという話でした。最初は余計な仕事が増えるから嫌だ、と言っていた職員の方々も、実際に仕事が増えて需要が増えると仕事のやりがいが出てくるのか、いますごく生き生きと仕事をされています。

このリニューアルは、100%民間出資でやりましたが、秋田県と秋田市と秋田公立美術大学とJRと、産官学の連携協定に近いかたちになっているので、このプロジェクトだけではなく、今後も継続的に町づくりについて一体となってやっていきたいと思いますという話になっています。

また、このプロジェクトを振り返って、よかったと思うことがあります。Topicoという駅ビルが、我々の動きに併せて、木を使った空間づくりを目指しましょうということで一緒に木質化改

修に動いてくれました。2017年にこのプロジェクトはいったん完成したのですが、実はこれで終わりとならずに、たとえば秋田市が管理する天井部分の耐震化がその後始まるのですが、ここも木質化しようということになり4年をかけて、現在も木質化耐震天井の工事が進んでいます。秋田駅の周辺でも、青木茂さんがリファインしたオーパという商業ビルの1階部分でけっこうな木質化をしていたり、その向かいにできた秋田放送の本社ビルも1階部分のガラス越しに木質内装が街から見えるようになっていて、つまり、ルール化をしなくても、木を使って公共的なスペースを作っていくということが、共通言語となって広がっているということです。

### 駅前の芝生広場で心地よく時間を過ごす

こうした動きに続いて進んだのが駅前の平面駐車場を広場に変えていくプロジェクトでした。実はこれは秋田の木とは直接は関係ないんですが、近代の都市計画のなかで、機能を優先するがゆえに、余白の部分というか都市の隙間みたいなものがどんどん失われてしまっているといったことが、秋田の町づくりにちょっとずつ関わるなかですごく気になって、地元紙に寄稿したりもしていました。なにか「目的を持たない場所」のようなものを駅前に作れたらいいんじゃない



か、と。それで、これはどういう経緯かわからないんですが（笑）、僕の方でデザイン監修みたいなかたちで携わって、もともと駐車場だったところを芝生の広場にしていく計画が、通常では考えられないくらいのスピードで進むことになりました。

広場とともに、ベンチなどのストリートファニチャーもデザインさせてもらっていて、ここでも高耐久の処理をした秋田の杉を使っています。ベンチとテーブルというよりも、高さをいろいろなかたちにして、利用者が自分の好きなように使えるようにしたらいいかなと思ってデザインをしています。

オープンしてみると、皆さん芝生に座ってゴロゴロしたりしています。ストリートファニチャーでちょっとハイカウンター風に作ったところは若い人たちに人気で、みんなここに座って町を眺めているということです。芝生部分は、ちょっとグリッド状のパターンを作ったこともあって、コロナ禍ではソーシャル・ディスタンスが取りやすいみたいで（笑）、けっこう皆さん均等に芝生に寝転がっていますね。

つまり車の風景しかなかった町の一部が、人の場所が変わっていくというようなことがいま起きつつあるということです。事業者の人たちは商いをうまくしたいということがあって、毎年たくさんさんの商業イベントをしますよね。それももちろん大事なんですけど、我々ものを作る側の人間としては、イベントだけではなくて、その場所で人がどう憩い、集い、心地よく時間を過ごせるかというところを考えていかないといけないし、人が集まってきて初めて商売が成り立つんじゃないかと思っています。

いまこの広場はちょっとした飲食イベントなどでも使っていて、いろいろな使い方を試しているというところですね。

## 「秋田」を見直す状況が少しずつ動き始めた

最後に、秋田におけるテリトリーという話です。秋田というと木材で、木材を使うことは皆さん、今までも実はけっこうやってきていたんです。でも、木材をいかに多く使うか、とりあえず使えるところには使うみたいなやり方をされていて、あまり使い方の部分に重きを置いていなかったような気がしました。ここ数年関わって、何が大事だったのかと考えてみると、木を使うことを優先するのではなく、一度「木」から離れて、町の未来をどう描くかや、ユーザー視点で空間をどう作るか、をまず考えたのがよかったと思います。そうしたビジョンが共有できると、具体的なデザインの話になった時には、地域資源である秋田杉を使おうという自然な流れができることがよくわかってきました。

いまおもしろい動きとして注目していることの一つに、秋田市文化創造館という施設の活動があります。去年の3月にオープンしたのですが、もともと秋田県立美術館です。県立美術館は新たに安藤忠雄さんが設計された新しい施設に移ったので、建築を取り壊す話もありましたが残して、秋田の市民が創造性を育むためのプロジェクトを展開する施設として生まれ変わりました。そのオープニングで開催されたのが「200年をたがやす」というタイトルの展覧会で、秋田の文化を200年単位で見直して、自分たちの文化をもう一度捉え直そうというものでした。これはテリトリーという話ともつながると思いますが、美術、演劇、工芸、食、生活、といった5つの分野を200年にわたって再確認して、それぞれの分野を担当する表現者たちが展示するという展覧会でした。建築というハードだけではなくて、ソフトの部分や人間の営みみたいなものを併せて、いまようやく秋田はどういう街を目指していくのか、過去はどうだったのか、少しずつ見直すような状況になりつつあるのかなと思っています。

### (3) ディスカッション ～テリトリーオの日本的展開～

#### オープンアクセスの財が成功のポイント

**岩佐** ここから3人の方々に加わっていただいてディスカッションしていきたいと思います。まずそれぞれ自己紹介も兼ねて一言ずつお願いできますか。今日の話の感想でもいいし、現在の興味の対象などでも結構です。まず樋渡先生、お願いします。

**樋渡** 近畿大学の樋渡です。今回はうちの学生が二人も発表させていただいてありがとうございました。銀山街道と石炭産業の事例を2つ紹介したんですが、産業とテリトリーオという視点で考えるときに、地域主義というのもあるんですが、もう一つ、政府の政策も大きく関わっているんだなと最近痛感しています。特に石炭産業のほうですね、如実に表れる。ですから従来通りの官僚の視点も入れたほうがいいということに改めて気づきました。来年度は、塩田のことをやろうと思っていますが、塩を瀬戸内海で作るのを止めるという判断を政府がして、それで廃れていく。そういう大きい世の中の動き、日本の政治的枠組みなども改めて勉強しながら一緒に見ていく必要があるといま感じているところです。

**岩佐** ありがとうございます。続きまして木村先生、お願いします。

**木村** 法政大学経営学部の木村です。今日は興味深いお話を、たくさんの事例とともにお聞かせいただきましてありがとうございました。私は自分の論文のなかで「コモンズの精神」と言って、自分だけが囲い込むのではなく、共有財としてオープンアクセスの財が、うまくいっている事例の共通のキーワードであり、重要なポイントだということが皆様の話をお聞きしてよくわかりました。それは地域のコモンズかもしれませんが、もしかするとともに個人が私有、所有していた財をオープンにしたものかもしれませんが、そこに人が集って、コミュニケーションが発生して、ネットワークができて、そこでの活動によって飲みや、あるいは地域愛が醸成されていくということを、今日のお話をお聞きして強く感じました。私はヨーロッパの原産地呼称保護と地理的表示保護、PDO、PGIの制度を研究しておりますが、ヨーロッパでは政策として強く地域、テリトリーオに根差した農業活動や農村振興を積極的に推し進めています。日本でも、GI大阪というワインがあって、メインとなって活動しているカタシモワイナリーの高井社長は、ブドウ畑を大阪府や市の制度も活用してオープンにしています。いろいろな企業が福利厚生、いわゆる援農ボランティアとしてぶどうを栽培し、飲食店は自分のオリジナルのワインを作ります。テリトリーオは、物理的なテリトリーオだけではなく、そこに人が集い、それぞれが活動し、活気や魅力を生み、あるいは財を再発見し、さらには価値を作っていく、そういうプロセス自体がすごく大切だと今日のお話から再確認できました。ありがとうございました。

#### 前を向く言葉としての「新たな地域主義」

**岩佐** 続きまして小島先生、お願いします。

**小島** 陣内先生のお話から始めたいのですが、日本はバブルが発生する1980年代からイタリアとは違う道をひたすら歩み続けたということですね。1987年に国連でブルントラント委員会が「持続可能な発展」という言葉を世界に発信したのですが、日本はバブルですから、そんなものを受け入れる社会環境にはなかった。1998年に地球温暖化対策推進法が成立しますが、まだその

頃もピンとこない。ようやく受け入れられるようになったのが 2014 年の増田レポート、つまり「消滅可能性都市」という言葉が出てきたころです。しかし日本では、持続可能な発展という考え方は、まったく外来のものであって、21 世紀の前半まで受け入れる素地がなかったのかというと実はそうではないのですね。1970 年代に文化人類学者の鶴見和子さんらが提唱した「内発的発展」という言葉の意味は、「持続可能な発展」とほとんど同じなのです。つまり、陣内先生がおっしゃっていた「地域主義」は、実は国際社会においても登場した「内発的発展」と同様の国内思想であったと考えられるわけです。とすると、実は日本には持続可能な発展についてしっかりと考える機会が 1970 年代半ばにあったということです。ところが 1980 年代半ば以降、変な方向に行ってしまった。

地域主義というのは経済学や経営学、人類学でも取り上げましたが、行政学で言えば「地方の時代」ということになります。これは地域づくりの主体は国ではなくて自治体そして地域のさまざまな主体であるという考え方の提唱で、1990 年代の地方分権につながりますが、すでにこの頃から、地域主義の政策を本格的に展開する可能性はあったのです。故田村明先生たちは「行政の文化化」ということを 1980 年代に盛んに言っていました。「ハコモノ行政」を越えた「行政の文化化」により、つまり地域づくりの質を高めないといけない、と。田村先生が生きておられて今日の小杉先生のお話を聞いていれば、おそらく「これこそ行政の文化化だよ、質の高い都市を作るとい文化行政だよ」とおっしゃったはずですよ。

これからの縮小の時代、あるいは人口減少の時代においてどういうまちを創っていくかというときに、やっぱり前を向く言葉が必要ですよ。縮小都市というのは、現象の把握としてはいいけれども、何かをやっている前を向く言葉にはなり切れない。そのときに前を向く言葉として、「新たな地域主義」というものが必要になるわけです。

つまり持続可能な発展とか持続可能都市というものを考える土壌はすでに 1970 年代にあったことをふまえて、「新たな地域主義」という言葉をいま使うことにはすごく意味があり、そのときに軸になるのがテリトリーオです。当時の内発的発展も地域主義も、地域の自治により、生態系を基盤とした社会経済、文化の構築をめざす思想でした。それはまさにテリトリーオと同じ発想です。ですからテリトリーオが「新たな地域主義」の構想と実践において、地域を読む分析視座になり、あるいは価値原則になる可能性があります。

最後に、これは木村先生がお詳しいと思いますが、テリトリーオと似たような言葉としてテロワールがあります。ただしテロワールは、どちらかというと言食中心の言葉ですね。テリトリーオという言葉の良さは、さまざまな要素を包摂できる点にあると思います。食でも文化でも木でも、地域の地形や気象、自然生態系の上に成立するさまざまなものを包括的に捉えられる。その意味ではテロワールよりテリトリーオのほうが、概念としての包括性があるので、いろいろな現場で使えるのではないのでしょうか。

### 人から愛されるコモنزの実現は画期的

岩佐 ここから自由な形でディスカッションしていきたいと思いますが、切り出しとしてまずは陣内先生、いかがでしょうか。

**陣内** まず小杉先生、ありがとうございます。僕も秋田にはよく行っていますが駅の自由通路のところ、本当にみんなあそこに集まってくるんですよね。楽し気に会話したりしている。あそこの話を聞いて、僕は新宿西口の広場だったのが通路に変えられて集会ができなくなったというのを思い出しましたよ（笑）。秋田では逆に、通路だったところ、行政としては滞留してもらっては困るところだったのが、実際、市民の方々が愛して使いこなしちゃったから、実質的には広場になっていった。新宿の西口広場が1970年前後ですからね。50年たって、ようやく日本に広場のような通路が生まれたって、感銘を受けました。

数年前に槇文彦先生が、「アナザー・ユートピア」という論文のなかでオープンスペースの重要性、公園なども含めた広場の重要性を訴えています。新自由主義的な、どんどん民間が競争して開発をすることばかりが続いてきたなかで、自由通路に付加価値を小杉さんが付け加えられて、居心地のいい、お金を使わないでずっといられるという、コモンズですよ、本当のコモンズが室内空間だけど生まれたというのは画期的だと思います。そして実際にできると行政の方たちもJRの人たちも、それがいいって気が付いて、だんだん営利を追求する、効率を追求するというのではないベクトルが確実に生まれた、と。

実は、日本も国産の木材を使うというので、とにかく中央から全国に使う量を増やせという指令が出ていて、みんな量をこなすことに汲々としていて、質を問わなくなっちゃっている、という話を先ほど網野先生からうかがったばかりでした。ところが秋田では、楽しい、快適な質の高い、そういう空間を木質のものでつくりあげて、市民に大変好評で、秋田らしさが生まれてって、そういうふうに転換した。先ほど小島先生が「行政の文化化」だとおっしゃいましたが、本当に質のいい、人々から愛される空間、コモンズがどうやったらできるか、を今日は提示していただいたと思いました。

それともう一つ、芝生広場も素晴らしいですね。僕は国交省の景観大賞の審査委員を長くつとめていて、各地のいろいろな駅前広場を見る機会があるんですが、これは特筆すべき、素敵な、そして市民に親しまれている空間ですよ。要は目的なんかなくてもいられる、お金も使わなくて居心地がよくてずっといられる空間、本当にコモンズが、しかも美しい場として実現したというのは偉大なことですね。

一つうかがいたかったのは、いろいろな人たち、木工の会社や家具の職人さんたちも巻き込んで一緒にプロジェクトを進めたというお話でしたが、実際、木材の生産・供給・流通に携わっている人とか森林組合とか、それこそテリトリーオのなかで木に関係している人たちの間での何かインパクトというか、化学反応みたいなものは起きているのかどうか、ということです。

実は金沢が木造都市宣言をしているんですよ。金沢も、もちろん背後に森林があるし、木造の文化があって漆もあって、ということなんだけど、いまは金沢の背景に木材の供給地があって見えるかたちで流通しているって、なかなかピンと来ない（笑）。それに対して秋田では、秋田杉は誰でも知っているし、木造文化圏もしっかりあって、いまも森林がかなりある。そういう意味で、木造文化都市として、金沢を吹っ飛ばすくらいの成果を秋田は期待できるんじゃないか思うんですけど、広がり具合はどうなっていますか。

## 一気にやらない、ゆるい枠組みの都市計画

**小杉** 金沢の動きはティンバライズにも来ていて、話を聞いてはいます。金沢は都市としても大きいし、伝統文化もしっかり根付いている町で、おそらくお金も集まってくるし、大きく動いてくるんだろうなと思っています。ただ、駅前に木造のモニュメントみたいなものがあるんですけど、あんまり空間的なイメージがないんですよね。ビジュアルな、インスタ映えみたいな空間ばかりで、本当に市民が使いやすいものなのか、今のところはそうはなっていないな、と。それがどう変わっていくかということでは注目しています。

秋田の話をする、秋田市は人口 30 万人くらいで、東北ではたぶん 3 番目くらいの規模の中核都市なんですね。東京から見ているとあまりイメージが湧かないかもしれないし、秋田の方たちも「うちは田舎だから」みたいなことをおっしゃるんだけど、実際には都市計画もすごく進んでいるし、かなり先進的なことをやってきたのが秋田なんです。

近現代に街づくりに積極的に取り組んできた土地で私は関わっているのですが、そんな土地柄でも今の時代はお金を一気にかけられないことはわかっていたので、秋田で最初につくったプルーラルシティ構想をお見せするときも「一気にやらなくていいんじゃないか」という話を皆さんにしていました。なんとなくこんなふうになったらいいなというくらいのゆるい枠組みのなかで、共感してやれる人がいたらやるというような都市計画の進め方ができるといいでしょうね、みたいなことを、半分本気半分冗談みたいに話していたんです。今はそれがよかったかなと思っています。ただ、やるときに考えなければいけないことは、かたちを作ることではなくて、そこでどういう人がどう楽しむのかということだと思います。秋田は本当においしいお酒もいっぱいあるし食べ物もおいしいし、そういうところまで含めて街の未来を考えていくというか。建築は建築だけじゃなくて、食は食だけじゃなくて、いろいろな広がりを考えることが必要だなと思っています。

## 見た目だけきれいなものを作っても意味がない

**小杉** 広がりということ言うと、「木都」と呼ばれたのは実は秋田市ではなくて、もっと北にある能代市という、天然秋田杉の中心地域なんです。秋田市にももちろん森林資源はあるんですが、実はそんなに木材産業に力を入れてきた都市ではない。技術がある木材生産者が多くいるのは、もっと北の方なんです。そこでは「木都再生！」という話をよくしているのですが、みなさんがこんなに熱心に木材再興について取り組んでいるのに、何故あまり盛り上がらないのかが、はたから見ていると不思議でした。いろいろ調べてみたところ、実は歴史的な背景があって、地域が分断されてしまっているところがあるようなのです。近代化とともに林業、木材産業が発達していくなかで、木材関係者はものすごく儲かっていたのですが、地域をあまり顧みないところがあったようなのです。それで、木材産業が落ち込んだときに、ほかの人たちが支えるという構造になってないところがあるようです。だから木材を使うことばかりを優先しようとする、そこに反発する人たちがいる。そうならないように、いろんな人が参加できるようにまずは街づくりの話、どんな街にしたいのかという話をする。どんな街にするか、なにを作るかが決まり、材料を何にするかとなれば、それは自然と木を使いましょうという話になるのです。いまは国の後

押しもあり、補助金も出る。木材は秋田にとって素晴らしい財産なので、そこを使っていくのはいいと思いますが、戦略的には、あんまり木材利用ばかりをいいすぎない方がいいなと思っていますところでは。

ただ、小島先生もおっしゃっていたように、いま 80 歳 90 歳の都市計画に携わっていた人たちに、当時なにを目指したかといった話をお聞きする機会があるのですが、彼らは彼らなりに持続可能というか、発展していく街の未来を考えて、すごく丁寧に設計されていたということもよくわかっています。おそらく、見込み違いで人口も減っていったときに、方向をどれだけ変更できるかってところが勝負だと思います。一般の方々にいきなり縮小都市というものすごくネガティブな話になってしまうので、今はサステナブルとか持続可能という言葉を使いながら、なにか前向きに、人口が少なくなるのは目に見えているけど、でも楽しく生きる方法はあるでしょってところをみんなで話し合うようなスタンスでいくのがいいのかなと思っていました。

芝生に関して言うと、僕が強く言っていたのは、あそこでは寝転がれないとだめだということです。日本の市街地の街区公園には芝生もけっこうありますが、その多くで和芝が張られています。和芝は、対候性が高くて一年中緑で、管理が楽なのですが、ごわごわして裸足で歩くとけっこう痛いんです。管理は大変だけど、ここは絶対洋芝にして、人が直接座ったり、ゴロゴロしたり、子供が走って転んでもケガをしない場所にしよう、と。やはり計画段階の最初は市の人から、メンテナンスのことを考えると和芝にしたらどうかという話だったのですが、そこはちょっと丁寧に話をしました。見た目だけきれいなものを作っても意味はないよ、と。秋田駅の待合ラウンジで、空間を居心地よく作ることでどれくらい効果があるか、みなさん多少わかってきていたこともあって、どうにか JR さんがメンテナンス費用は出しますという話になって、肌触りのいい洋芝を張っていくということになりました。人間ってやっぱり、そうなると感覚的にほんとにみんなごろごろする（笑）。

また、やはり駐車場を潰すということにもすごく反発がありました。商業者や一般の方々からは、そんな不便なことをしてどうするの？ みたいな話だったのですが、これからの都市、特に都心部は公共交通を整備していかなきゃいけないときに、いつまでも自家用車依存していたらダメだ、という風に考えていて、粘り強く説得しました。完成後、実際に人々が芝生でごろごろ憩っていたり、今まであの辺にいなかった中高生が部活帰りにジャージ姿でたむろしていたりするのを見ると、反対していた人も、ああ先生が言っていたのはこういうことかなって納得してくれています。我々は空間を理解するためのトレーニングを積んでいるからイメージできますが、一般の方々には実際に見るまではその状況が理解できないので、そういう実際の風景を少しずつ見せていくことで、認識が変わっていくといいなと思っています。

もう一点、樋渡さんがおっしゃっていた、国策の話。国策というのはやはりすごく影響が大きくて、いま木材がすごく盛り上がっているのは、国策として国産木材利用を押ししていることがすごく大きいんです。近代に建築で木が使われなくなったのは、建築基準法で木材使用が制限されたからですが、その背景としては、森林伐採によって国土の 70% 以上を占める森林という国土が保全できなくなったから、国策として木を使わないという政府の方針があり、木造建築は小さいものに限定されたのです。もちろん、都市の不燃化という命題もありましたけど。国の政策が産業

の興亡とその地域、風土みたいなものと合わさって、それぞれ独自の風景、都市景観が生まれてくる。だから国の政策というのはすごく影響していると思います。小島先生が言うように地域に任せてくればいいけど、日本はなかなか地域に任せないんですよね。陣内先生がおっしゃっていたみたいに木材も、もっと地域ごとに任せてお金だけちゃんと渡して、それぞれで考えられればいいんですけど、国はどうしても最後のところを握って離さないの、地方はみんな国の方を見ちゃうことになる。それでなかなか本当の地域的な動きになりづらいというのが問題かなと思っています。

### テリトリー戦略と共感される木造都市

**岩佐** 先ほど小島先生からテロワールとテリトリーの話が出ましたが、木村先生、テロワールについてちょっとご説明いただけませんか。

**木村** テロワールは耳障りがいいだけに日本で広がっています。フランスとイタリアのワインをご覧いただいたらわかりやすいかと思います。食の展示会 FOODEX のイベントを見ても、フランスは多数のブースを出展し、ワインのマーケティングが上手です。フランスもすべてがいい品質なわけではないのですが、テロワールという一つのキーワード、概念をうまく使って製品とその土地との特性が結びつくストーリーを展開させていきました。それに対して、イタリアのテリトリーというものは、これまではあまり使われていなかったと感じます。フランスは中央集権型の施策をしますが、イタリアは地方分権型なので、まとまって国策としてテロワールでワインを売っていきこうというフランスに対して、国としてのまとまりはイタリアにありませんでした。それが今まではテリトリーの魅力を伝えていく足かせになっていたのかもしれませんが、でも、いまは逆にテリトリーが村ごと、あるいはテリトリーごとにそれを発信していく力と知恵と経験を蓄積してきていて、上手に魅力を出してきたと思います。

**岩佐** ありがとうございます。小島さん、いかがですか。

**小島** どうしてもテロワールというとワインとか食の話になるのですが、テリトリーは、鉱山の話であったり舟運の話であったりと、捉える対象の幅が広がります。政策論として考えたときに、先ほど小杉先生が木を使えばいいということではないという話をされましたが、まさにそうですね。テリトリー戦略を描くときに、まずテリトリーを分析視座にして地域を読みましよう、それから政策を組み上げていくときにテリトリーを価値基準として考えましよう、そしてデザインコードをテリトリーから考えましよう、とすれば、おのずと木に対する歴史的な経緯からの反発を回避しながら、多くの人たちが共感できる木造都市ができるのではないのでしょうか。

2010年に公共建築物への国産材の使用を促進する法律ができて、さらに昨年、脱炭素社会へのシフトという理念を加えて名称も含め法律が改正されました。その結果、国産材利用の促進も公共建築から一般建築物へと政策対象が拡大しました。外材を使うとウッド・マイレージが伸びるので国産材利用で短くし、また温室効果ガスの吸収源を維持するという政策ロジックによって、ある種ブームが起きている。しかし結局のところ、何のために都市を木造化するのかということの説明するための文脈が重要です。一言でいえば、それは人間を大切に作る都市をつくるという

ことでしょう。たとえば木造都市にすることによって蓄熱が抑制され、ヒートアイランドが緩和されてアメニティが上がるとか、香り・質感・色合いが人間の心理を安定させるとか。私の学部のOBで、奥多摩産材を東京の保育園のフローリング材として卸している人物がいるのですが、杉材は柔らかいので子供が転んでもケガしにくいそうです。このように、都市の安全性を高めるといった視点もあります。森林を守り、都市を再自然化しながら、人間も大切に作る質の高い文化を都市にもたらすというメッセージを正しく送ることができれば、繰り返しますが、感情的な反発を避けながら、都市の木造化の社会的受容も進む可能性があるのではないかと思います。

### 多層的、多元的に捉えられるのがテリトリーの魅力

**樋渡** テリトリーの場合、なににのテリトリーの「なにに」で枠組みがどんどん変わっていきますよね。一つのテリトリーを取っても、いろんなテリトリーと複合しているから、それをどう読み解くかという難しさとおもしろさがある。いま瀬戸内でやっているのはいろんな地域を掘り起こして、それを全体としてどう捉えられるかということなので一言ではなかなか難しい。

**小島** それが大事だと思います。テリトリーというパラダイムには、多次元的なスケールで考えることができる利点があります。秋田のなかの小さな生活圏もあるかもしれないし、瀬戸内海という広域圏もあるかもしれない。もっと言うと日本全体とか、とにかく多層的に考えられるところでしょう。それから「プルーラルシティ」という言葉がありましたが、テリトリーはそもそもプルーラルなものでしょう。だから、あるテリトリーと別のテリトリーが交差し複合化するということもあり得る。テリトリーという概念やパラダイムの特性は、その多層性や多層性に着目して考えられるところにあるでしょう。また、その汎用性や応用可能性などによって、想像力を喚起してくれる柔らかさに、この概念やパラダイムのおもしろさがあるのだと思います。

**樋渡** まさにそうです（笑）

**岩佐** 福井先生、いかがですか。多層的、多元的という話、いかにいろんな地域で展開していくかみたいなことの議論ですが。

**福井** まさにその通りだと思っています。地域の何に着目するかは、地元の人しかわかってないこともあります。我々外部の人間が研究することによって別の価値を持ちこんで、地域で持っている知見との化学反応が起こることをけっこう経験します。研究者がこうやっていろいろな価値を提示していくのはとても大事なことだと思っています。

**陣内** いまの関連で、最近経験したことを伝えたいんですけど、富岡製糸場が世界遺産になりましたよね。それに関し先日、国際シンポジウムがオンラインであり、僕も招かれて参加しました。富岡製糸場には本当に素晴らしい遺産が継承されていて、その一番重要なところの修復再生が終わったんですね。国宝にもなっているらしいんですけど。でもね、その建物しか見てないんですよ、みんな。桐生のときにも同じことを感じました。桐生の町では、絹織物をつくるのに水路を引っ張って撚糸工程を水力でやっていたんですけど、そういう産業と都市構造、経済、町並み、全部セットで考えるといいのに、あそこも重伝建で建物しか見てなかったんですよ。富岡製糸場は製糸場の建物しか見てない。立派なものを生かしているのでもいいんですけど、それを僕は、今

までやってきたボローニャの町が水路を引っ張りながら絹織物を育てて、それをヴェネツィアまで船で運んで、インフラをつくって、そういう技術がイギリスに渡り、アメリカに渡り、その技術がまた桐生にも入ってきた。そういうまさにテリトリーオのいろんなスケール、産業史、経済史、建築、文化遺産をトータルに見ていかないといけないということをこのシンポジウムで提案したら、富岡の人たちもなるほどっていうことで、盛り上がったんですね。こういういろんなところにそういったコンセプトという手法が使える。今日の石炭の話でも、直方とか飯塚とかで、ボタ山ばかり見ていたけれど、どうしてそういう産業が興ったのか、どうやって若松まで持って行って全国に広がったか、瀬戸内の近代の塩田をエネルギーで支えたわけですね。全部連鎖している。ところが我々近代の発想は、みんな分断して考えてきた。学問分野もそうですよね。農業の人は農業しか見ない。都市計画の人は都市しか見ない。だけどテリトリーオという一つの考え方を導入することによってみんなつながっていく。そこにはワインを生み出す自然の条件と結びつくテロワールもちゃんと入っているんですね。テリトリーオの定義はやや曖昧で雑駁な面もあるけれど、非常に有効に使い、地域の自然、歴史、文化のさまざまな要素を発見し、つなげていくうえでの手がかりやヒントを大いに与えてくれると思います。

#### エコ研の方向性の一つに「活動としてのテリトリーオ」を

**岩佐** イタリア帰りが二人いらっしゃるの、せっかくですからお二人からお願いできますか。

**高道** エコ研の研究員の高道です。今日はありがとうございます。イタリア帰りをご紹介いただきましたけど、昨年10月から今年1月まで、イタリアのナポリに行っていました。そこでお世話になった先生の、すごく印象に残ったフレーズがありましたので、そのお話をさせていただきます。ナポリ中心地の西の方にカンピフレグレイという火山地帯があるのですが、そこのある美しい町の海岸に連れてってもらいました。火山活動が作った地形とそれに対応した集落、そしてその土壌を活かした農地が本当に美しい景観をつくっているのですが、私が夢中になって写真を撮っていると、その先生が君はまず靴を脱いでズボンをたくしあげて海に入るべきだよっておっしゃんたんです(笑)。なんでかなと思ながらも、カメラを置いて海に入ったら、その先生が「これこそテリトリーオだよ」と。それを聞いたときに、あー、テリトリーオというのは本当に概念の幅が広いんだな、と感じたんです。テリトリーオの大事な価値基準として、手で触れられるとか、それを味わえるとか、そういう自分の身体感覚で体験することを大切にする。どんどん物事がデジタル化していくなかで、肌感覚を伴ったモノを介して環境や歴史、文化につながっていく、このようなテリトリーオの大切な価値基準を教えてもらったように思います。ようするに、テリトリーオというのは、物的環境と人とのつながりにおける価値基準のイノベーション、転換という側面があるのだと思います。現代の私たちは、その価値基準になかなか気づけていない。そして、それをどういうふうに呼び起こすかというときに、先ほどの秋田の事例でも出ていたような、駅前の芝生でごろごろしてみるなど、目に見えるかたち、あるいは身体感覚で味わえるレベルで「いいな」と思える成功体験を、まずは地道に作っていくということが大切なのではないかなと思いました。さらにそこから考えていくと、たとえば今日の報告で、樋渡さんがいろんな瀬戸内の町に、学生を引き連れて調査されている様子が紹介されていましたが、あの

ようにテリトリーを掘り起こしていこうという、体験を伴った我々の活動それ自体が実はテリトリー的なのではないかなと思えてきたのです。たとえば、湘南はサーフィンが有名ですが、サーフィンそれ自体よりも、サーフボードを持って街中を歩いている人やそういう風景を見ることで、「あー、ここはサーファーの人にとって大切な町なんだ」と実感することがあると思います。それと似たような感覚で、テリトリーという概念を掲げながら、その旗を持ちながら日本の各地を練り歩いてみる。それによって、点と点をつなぐように、そういう人たちが蠢いている状態を、戦略的に、意識的に作っていくことも大切ではないかと思いました。エコ研の目指すべき方向性の一つとして、このような「活動としてのテリトリー」ということを、一つの可能性として感じた次第です。

**岩佐** 続いて栗生さん、お願いします。

**栗生** あまり付け加えることはなくて(笑)。高道先生と似たような話になりますけど、同じ先生がイタリア料理を食べているときに、イタリア料理は素材が分かるというのが重要だとおっしゃっていて、そういうところからもテリトリーにつながるんだろうな、と。フランス料理が、いろんな加工を加えて、素材がなにかわかりづらい状況になっているのに対して、イタリア料理がこうあることがとても素晴らしい、っておっしゃっていて、なんかそういうところにテリトリーの根底の思想があるんだなあと感じました(笑)。

**岩佐** ありがとうございます。身体的に感じることは大事ですよ。

### ブリコラージュとテリトリー

**岩佐** 石神先生、なにかあればぜひお願いします。

**石神** 今日は勉強させていただきました。ありがとうございます。テリトリーを、「新地域主義」として、たとえば、地域で考える、あるいは地域を使う、というような形で理解し考えますと、「ブリコラージュ」という言葉と関連があるかも知れません。さっき小島先生がちょっとおっしゃっていた内発的発展や清成先生の地域主義という言葉などとほぼ同じか少し前の時期の1960~70年代に出てきたフランスの言葉です。ブリコラージュというのは器用仕事ともいわれますが、いわば、ありあわせ、といった意味で、地域としてとらえれば、グローバルとローカルの時代の中で、地域で考える、地域のものを使う、ともいえます。この考え方のベースは、「野生の思考」と「栽培の思考」と二つに分けると、前者の、野生の思考だとレヴィ・ストロースは説いているわけです。野生の思考とは、さっき高道さんがおっしゃった手で触れるとか味わうとか、そういうところから感覚的、あるいは人間的、また全人格的に対応するもので、どちらかという知識ではなくて知恵に該当するようなものです。一方の、栽培の思考というのはどちらかというデジタル的な知識をもとにしたものです。人間そのもの、いわゆる野生の思考からもう一度ものごとを考えるというのがブリコラージュのエッセンスだと思うのですが、そういうやり方はこれからの地域研究でけっこう大事なのかな、とつくづく今日の話聞いていて感じました。まさに、分断の知識の時代から、総合の知恵の時代へ、ですよ。これはいわば、如何に生きるかということと関連するかとも思いますけど。そういう意味で今日はあらためて勉強させていただきました

**岩佐** ありがとうございます。最後になりますが、来年から高見先生にセンター長を引き継ぐようにお願いしています。高見先生一言コメントをお願いできますか。

**高見** ひょんなことから私がセンター長を引き受けることになりました。今日は勉強しておりました。私自身、ずっと専門は都市計画ですけれども、「東京とそれ以外」とか言ってですね、「それ以外」のほうをずっと重視している立場でもありますので、そういうことも含めながら皆様の熱い気持ちも踏まえて、来年、まあセンター長というのは司会役みたいなもんだと思っておりますので、よろしく願いいたします。

**岩佐** ありがとうございます。時間を大幅にオーバーしてしまいました。この1年間コロナもあって動きにくいところもあったんですが、活動とかもしくはその次の可能性も大きく見えてきたんじゃないかと思います。前半の発表してくださった方、後半でお話いただいた先生方、ありがとうございます。今日の報告会はこれでおしまいになりますが、引き続きエコ研の活動にご協力いただければと思います。本日はどうもありがとうございました。





## 4 研究業績

Research Achievements

## 研究業績

2022年1月以降

### 刊行書籍



[EToS 叢書 3] 水都としての東京とヴェネツィア

法政大学江戸東京研究センター編

監修：ローザ・カーロリ，小林ふみ子，栗生はるか，陣内秀信，高村雅彦

法政大学出版局

2022年1月

#### 【序】

二つの水都を比較する意味（陣内秀信）

#### 【イントロダクション】

江戸における水辺の文化（田中優子）

ヴェネツィアと海——コスモポリタンな商業都市（ドナテッラ・カラビ）

#### 【第一部 場所の記憶、水の記憶】

地誌と絵本挿絵のなかの江戸（小林ふみ子）

都市の娯楽と記憶——『むだ砂子』考（マスキオ・パオラ）

水辺の記憶——神田川周辺の失われた水流空間の痕跡（ローザ・カーロリ）

視覚的記憶と水面——ヴェネツィアを見つめた写真家のまなざし（アンジェロ・マッジ）

#### 【第二部 地図学と地理学における水都】

現代に継承された江戸東京の庭園——水系と地形の多様性が生み出すユニークさ（畠山望美）

絵地図における首都東京の風景表象——江戸から明治へ（米家志乃布）

#### 【第三部 建築遺産と未来】

効果をあげないヴェネツィア保全のツール——その理由は？（ジョルジョ・ジヤニギアン）

“地域の生態系”の維持や継承——東京の「銭湯」の例（栗生はるか）

ヴェネツィアと東京の比較研究の意義——歴史の継承と保存問題（マテオ・ダリオ・パオルッチ）

#### 【第四部 水都をとりまく環境】

ヴェネツィア——水のテリトリー（フランコ・マンクーゾ）

水に映しみる墨東の変貌（ポール・ウェイリー）

江戸東京の聖地から浮かび上がる都市と環境の領域（高村雅彦）

ラグーナのブドウ・オリーブ栽培——伝統とリキッド・モダニティ（フェデリカ・レティツィア・カヴァッロ／ダヴィデ・マストロヴィト）

#### 【第五部 グローバル都市の住民——経済・文化・ガバナンス】

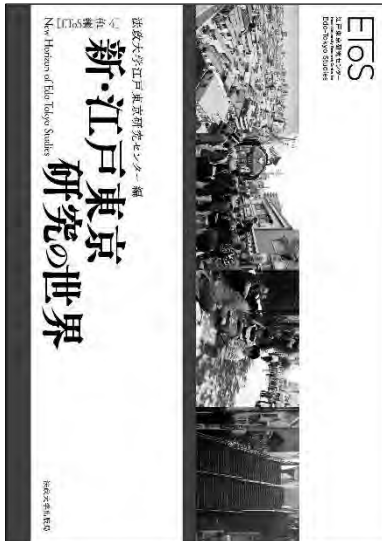
水都東京の再生プロセスと今後への展望（陣内秀信）

「大都市圏ヴェネツィア」に関する議論における水とウォーターフロント、もしくは欠けている論点（ステファノ・ソリアーニ／アレッサンドロ・カルザヴァーラ）

団地とタワーマンション：周縁と中心、内陸とウォーターフロント——東京圏の集住の起源と現況を概観する（渡辺真理／木下庸子）

#### 【結び】

水都の再発見、回復、レジリエンス（ローザ・カーロリ）



[EToS 叢書 4] 新・江戸東京研究の世界

法政大学江戸東京研究センター編

法政大学出版局

2023年1月

はじめに (横山泰子)

第一部 江戸東京研究の可能性をさぐる

記憶から創造へ (田中優子)

過去を知り、近未来への道筋を示す (陣内秀信)

第二部 都市をつくるのは誰か——定住者と流入者・来訪者、それぞれの役割とまなざし

江戸文芸のなかの外来者——方言と視点と (小林ふみ子)

「ビジターの都市」江戸、「ビジターの街」両国 (川添 裕)

自然主義作家たちの東京——花袋・藤村・秋聲 (中丸宣明)

近代日本の幕開けを担った建築家たち——外来者がつくる明治東京の都市と建築 (高村雅彦・金谷匡高)

都市をつくるのは誰か——定住者と流入者、来街者、それぞれの役割とまなざし (稲葉佳子)

江戸の都市性と「公衆トイレ」 (根崎光男)

第三部 都市の表象文化 「名所」から「聖地」へ

映画・アニメからみる東京表象 (岡村民夫)

コンテンツツーリズムと東京・再考 (増淵敏之)

鳥瞰図に見る江戸・東京の表象 (森田 喬)

名所と視覚的経験——「江戸東京」の風景 (米家志乃布)

[コメント] 東京をめぐる観光行動 (山本真鳥)

第四部 コモンズを再生する東京 2021

都市でコモンズを作れるか——下北沢 BONUS TRACK をケーススタディとして (山道拓人)

コモンズを再生する東京 (北山 恒)

点在するリソースを繋ぐ——@カマタによる地域実験 (連 勇太郎)

既にあるコモンズに寄り添う (栗生はるか)

[コメント] 縮小都市の時代におけるまちの世代間継承とコモンズ (小島 聡)

[コメント] コモンズを再生する (石神 隆)

おわりに——次の新たなステージへ (高村雅彦)



[EToS 報告書]

書名：『東京発掘プロジェクト 水辺編III』

標題：東京発掘プロジェクトとは？

著者名：皆川典久 監修

発行：法政大学 江戸東京研究センター

発行年月：2021年3月



[EToS 報告書]

書名：『東京発掘プロジェクト 水辺編IV』

標題：東京発掘プロジェクトとは？

著者名：皆川典久 監修

発行：法政大学 江戸東京研究センター

発行年月：2022年3月

著書



書名：『中央線がなかったら 見えてくる東京の古層』

著者名：陣内秀信（共著者）

発行：筑摩書房（ちくま新書）

発行年月：2022年1月



書名：『13歳からの大学講義 Beyond SDGs』

著者名：吉永明弘（著）、平野井ちえ子（著）、高橋五月（著）、竹本研史（著）、梶裕史（著）、松本倫明（著）、杉戸信彦（著）、宮川路子（著）、佐伯英子（著）、藤倉良（著）、長谷川直哉（著）、武貞稔彦（著）、小島聡（著）、岡松暁子（著）、湯澤規子（著）、法政大学人間環境学部（編集）

発行：公人の友社

発行年月：2022年2月24日



書名：『持続可能な酪農:SDGs への貢献』

著者名：木村純子・中村丁次編著

発行：中央法規

発行年月：2022年3月



書名：『イタリアのテリトリー戦略ー甦る都市と農村の交流』

著者名：木村純子・陣内秀信編著

発行：白桃書房

発行年月：2022年3月



書名：『中神・熊野神社本殿及び拝殿調査報告書』

著者名：高村雅彦 監修

発行：昭島市教育委員会

発行年月：2022年3月



書名：『南イタリア都市の空間史—プーリア州のテリトリー—』

著者名：稲益祐太

発行：法政大学出版局

発行年月：2022年3月



書名：『韓屋と伝統集落』

著者名：朴賛弼

標題：韓国の暮らしの原風景

発行：法政大学出版局

発行年月：2022年3月10日



書名：『東京空間人類学—踏査現代東京形成的脈絡』

著者名：陣内秀信

発行：遠足文化（中国語訳）

発行年月：2022年6月

書名：『東京都新島村における伝統的な耐火石建造物群の台風15号・19号による被害調査(調査報告書)』

著者名：金谷匡高、邵帥、余鵬正他（新島耐火石町並み研究会）

発行：公益信託 大成建設自然・歴史環境基金

発行年月：2022年7月



書名：『入門テキスト建築環境・設備』

著者名：：朴賛弼

発行：：学芸出版社

発行年月：2022年7月15日



書名：『トスカーナ・オルチャ渓谷のテリトリーオ』

標題：都市と田園の風景を読む

著者名：陣内秀信／植田暁／マッテオ・ダリオ・パオルッチ／樋渡彩 編著

発行：古小鳥舎

発行年月：2022年9月30日



書名：『東京水辺散歩』

標題：水の都の地形と時の堆積をめぐる

著者名：陣内秀信，松田法子，齋藤彰英 著

発行：技術評論社

発行年月：2022年10月27日

## 論文 (査読付き)

論文標題：Analysis of Flows through and over A Rubble Mound Weir and Classification of Flow Regime

著者名：K. Michioku

雑誌名：Journal of JSCE, Vol.10,

[https://doi.org/10.2208/journalofjsce.10.1\\_328](https://doi.org/10.2208/journalofjsce.10.1_328), pp.328-347

発行年月：2022年4月

論文標題：持続可能なフードシステムとSDGs

著者名：木村純子

雑誌名：中村丁次編著『臨床栄養』140(6), 2022年5月号, 医歯薬出版, 840-845

発行年月：2022年5月

論文標題：山梨県小菅村集落における農村舞台の建築的特徴について

著者名：金谷匡高、鈴木清

雑誌名：民俗建築

発行年月：2022年5月

論文標題：The Potential of Geographical Indications (GI) to Enhance Sustainable Development Goals (SDGs) in Japan: Overviews and insights from Mishima Potato GI Case Study

著者名：Kimura, Junko. & Rigolot, Cyrille

雑誌名：Proceedings Worldwide Perspective on Geographical Indications, An International

Conference for Researches, Policy Makers and Practitioners, held in Montpellier, France, 218-219.

発行年月：2022年7月5~8日

論文標題：貯水池堆砂量推定モデルの構築と気候変動に伴う堆砂速度増大率の推定－熊本県緑川ダム貯水池を対象として－

著者名：高橋大地・石川忠晴・道奥康治

雑誌名：ダム工学, Vol.32, No.2, pp.141-152

発行年月：2022年9月

## 論文

論文標題：文化財政策におけるエコミュージアム的な取り組みとその課題－ウェルビーイング社会の文化享受の視点から－

著者名：馬場憲一

雑誌名：現代福祉研究 第22号

発行年月：2022年3月

論文標題：日本におけるエコミュージアム的な取り組みについて考察－東京都墨田区「小さな博物館」事業の場合－

著者名：馬場憲一

雑誌名：日本エコミュージアム研究 No.27

発行年月：2022年3月

論文標題：テリトリーオが実現する持続可能な地域づくり

著者名：木村純子編著

雑誌名：『『イタリアのテリトリーオ戦略-甦る都市と農村の交流-』 発刊記念』講演録』法政大学イノベーション・マネジメント研究センター・ワーキングペーパー, No244

発行年月：2022年3月31日

論文標題：Preservation and Continuation of "Local Ecosystem": The case of Tokyo's Public Baths

著者名：Haruka Kuryu

雑誌名：STORIA URBANA

発行年月：2022年4月

論文標題：SDGs(持続可能な開発目標)

著者名：木村純子

雑誌名：『小学校理科授業実践ハンドブック』32-33, 教育出版

発行年月：2022年4月21日

論文標題：サーモグラフィーからみる夏における温熱環境の研究-伝統民家及び現代風建物の測定-

著者名：朴賛弼

雑誌名：『民俗建築』第161号

発行年月：2022 年 5 月

論文標題：新島抗火石の町並み－台風被害調査と島内外における抗火石建造物の保存活用に向けた取り組みについて－

著者名：金谷匡高

雑誌名：『民俗建築』

発行年月：2022 年 5 月

論文標題：地域社会の持続可能性と酪農乳業の役割・機能

著者名：木村純子

雑誌名：ラウンドテーブル・シンポジウム講演録

『持続可能な社会の実現に向けて酪農乳業はどのように貢献できるのか』一般社団法人Jミルク, 3-5.

発行年月：2022 年 6 月 21 日

論文標題：パンデミックを乗り越えた水都・東京

著者名：陣内秀信

雑誌名：三田評論 No.1269

発行年月：2022 年 8 月～9 月

論文標題：OD データの活用に向けたコロナ禍における人口動態分析

著者名：荒木祐哉, 今井龍一, 松島敏和

雑誌名：令和 4 年度土木学会全国大会第 77 回年次学術講演会

発行年月：2022 年 9 月

論文標題：Wi-Fi パケットセンサを用いたデータ取得の指向性に関する一考察

著者名：李馨蕊, 今井龍一, 塚田義典, 後藤大河

雑誌名：令和 4 年度土木学会全国大会第 77 回年次学術講演会

発行年月：2022 年 9 月

論文標題：Wi-Fi パケットセンサを用いた静岡市中心市街地の交通流動調査

著者名：矢野有希子, 今井龍一, 河口知弘, 堀井一

嗣, 亀谷浩司

雑誌名：令和 4 年度土木学会全国大会第 77 回年次学術講演会

発行年月：2022 年 9 月

論文標題：プローブクエストの受信方向を考慮した Wi-Fi パケットセンサの調査手法に関する一考察

著者名：後藤大河, 今井龍一, 中村健二, 塚田義典, 李馨蕊

雑誌名：令和 4 年度土木学会全国大会第 77 回年次学術講演会

発行年月：2022 年 9 月

論文標題：ポリゴンメッシュを用いたプローブデータの進行方向判別手法の考案

著者名：金井翔哉, 今井龍一, 山本雄平

雑誌名：第 47 回土木情報学シンポジウム講演集

発行年月：2022 年 9 月

論文標題：水の都ヴェネツィア——誕生から水上テラスの出現まで

著者名：樋渡彩

雑誌名：『建築と社会』一般社団法人日本建築協会

発行年月：2022 年 10 月

論文標題：交通ビッグデータの OD を活用したコロナ禍における東京都 23 区の人口動態把握

著者名：今井龍一, 松島敏和, 荒木祐哉

雑誌名：第 66 回土木計画学研究発表会・講演集

発行年月：2022 年 11 月

論文標題：IoT デバイスを用いた静岡市中心市街地の交通流動調査

著者名：今井龍一, 山本雄平, 神谷大介, 河口知弘, 堀井一嗣, 亀谷浩司, 矢野有希子

雑誌名：第 66 回土木計画学研究発表会・講演集

発行年月：2022 年 11 月

論文標題：コロナ禍における東京 23 区の流動人口

の実態分析

著者名：今井龍一，松島敏和，荒木祐哉  
雑誌名：CSIS DAYS 2022 全国共同利用研究発表大会研究アブストラクト集  
発行年月：2022 年 11 月

論文標題：人流データを用いた交通手段別 OD 量推計の試行

著者名：今井龍一，松島敏和，野崎琉加  
雑誌名：CSIS DAYS 2022 全国共同利用研究発表大会研究アブストラクト集  
発行年月：2022 年 11 月

論文標題：Wi-Fi パケットセンサによる静岡市中心市街地の交通流動調査

著者名：今井龍一，河口知弘，堀井一嗣，亀谷浩司，矢野有希子  
雑誌名：CSIS DAYS 2022 全国共同利用研究発表大会研究アブストラクト集  
発行年月：2022 年 11 月

論文標題：「テリトリー」概念を踏まえた地域発展のモデル構築に向けて：鹿屋市の事例から

著者名：木村純子・二階堂行宣・佐野嘉秀  
雑誌名：『法政大学イノベーション・マネジメント研究センター・ワーキングペーパー』No249, 1-13  
発行年月：2022 年 11 月 18 日

論文表題：テリトリーの営みが生んだ景観—その再評価と継承の方法—

著者名：陣内秀信  
雑誌名：飯田市歴史研究所年報 20号  
発行年月：2022 年 12 月 29 日

## **学会発表（招待講演・国際学会）**

発表標題：新島抗火石の町並み—台風被害と地域内外の活動について—

発表者名：金谷匡高  
学会等名：日本民俗建築学会

発表場所：zoom

発表年月：2022 年 1 月

発表標題：Tokyo as a water city from the perspective of spatial anthropology

発表者名：Hidenobu Jinnai  
学会等名：Beyond Museums (UNESCO Chair/Water Heritage and Sustainable Development)

発表場所：online  
発表年月：2022 年 1 月 21 日

発表標題：歴史的視点からの地域構造の可視化とその再評価—中国地方を事例として

発表者名：樋渡彩・歴史意匠委員会  
学会等名：日本建築学会中国支部  
発表場所：オンライン  
発表年月：2022 年 5 月

発表標題：ティポロジアとテリトリー

発表者名：陣内秀信  
学会等名：『世界建築史 15 講』連続セミナー13  
発表場所：日本大学「世界建築史 15 講」編集委員会  
発表年月：2022 年 6 月 17 日

発表標題：「日本西部地方地域再生事例-重要伝統的建築物群保存地区を中心に」日韓共同セミナー

発表者名：朴賛弼  
学会等名：大韓建築学会、韓国忠南国立大学、長崎県立大学  
発表場所：リモート開催  
発表年月：2022 年 6 月 22 日

発表標題：ウォーターフロント活用の可能性とその意義

発表者名：陣内秀信  
学会等名：大阪府建築士会  
発表場所：大阪工業大学梅田キャンパス

発表年月：2022年7月1日

発表標題：南関東における湿地の現状と特性

発表者名：市川菜菜子・高田雅之

学会等名：日本湿地学会

発表場所：北海道釧路市

発表年月：2022年9月

発表標題：銭湯から考える「まちの継ぎ方」

発表者名：栗生はるか、守本陽一、大久保勝仁、三文字昌也他

学会等名：全国まちづくり会議 2022

発表場所：墨田区電気湯

発表年月：2022年10月

発表標題：イタリアの都市空間とその描き方ーヴェネツィアを中心にー

発表者名：陣内秀信

学会等名：鹿島美術財団東京美術講演会

発表場所：鹿島建設 KI ビル

発表年月：2022年10月13日

発表標題：「床暖房の蓄熱による雪下ろしの研究」

大韓建築学会秋大会研究発表

発表者名：朴賛弼

学会等名：大韓建築学会

発表場所：済州島西帰浦市

発表年月：2022年10月26日

発表標題：武家屋敷の荒廃と牛乳搾取業の展開～明治維新による東京都市空間の変容～

発表者名：金谷匡高

学会等名：ミルク一万年の会

発表場所：大妻女子大学

発表年月：2022年11月

発表標題：銭湯からまちを考える

発表者名：栗生はるか、牧野徹

学会等名：北区文化財講演会

発表場所：北区飛鳥山博物館

発表年月：2022年11月

発表標題：渋谷、虎ノ門の都市再開発

発表者名：朴賛弼

学会等名：KODA ARP 韓国不動産開発協会、創造都市不動産融合最高位課程

発表場所：渋谷、虎ノ門

発表年月：2022年11月18日

発表標題：水都東京の空間構造ー隅田川と日本橋川を中心として

発表者名：陣内秀信

学会等名：国際シンポジウム<水辺の都市の空間構造と歴史文化の変遷>、上海社会科学院歴史研究所

発表場所：オンライン

発表年月：2022年11月27日

発表標題：スマートシティと地域相性発展

発表者名：朴賛弼

学会等名：大韓建築学会、韓国忠南国立大学、長崎県立大学、名古屋市立大学、2022年韓日共同セミナー、総評

発表場所：リモート開催

発表年月：2022年12月14日

## 学会発表

発表標題：銀山街道「石見路」で形成された地域構造について

発表者名：野市将太、樋渡彩、陣内秀信

学会等名：日本建築学会関東支部

発表場所：オンライン

発表年月：2022年3月

発表標題：遠賀川流域の石炭産業で形成された地域構造の変遷について

発表者名：太田結貴、樋渡彩、陣内秀信

学会等名：日本建築学会関東支部

発表場所：オンライン

発表年月：2022年3月

発表標題：パドヴァにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察——サン・ニコロ地区とゲッター地区を対象として

発表者名：古庄裕喜、樋渡彩

学会等名：日本建築学会関東支部

発表場所：オンライン

発表年月：2022年3月

発表標題：島々に位置する集落構造の類型的考察について

発表者名：河村剛志、樋渡彩

学会等名：日本建築学会中国支部

発表場所：オンライン

発表年月：2022年3月

発表標題：忠海における産業から見た地域構造について

発表者名：田中碧衣、樋渡彩

学会等名：日本建築学会中国支部

発表場所：オンライン

発表年月：2022年3月

発表標題：太田川流域における木材産業を支えた地域構造に関する考察

発表者名：中澤頼明、樋渡彩

学会等名：日本建築学会中国支部

発表場所：オンライン

発表年月：2022年3月

発表標題：香川における塩田の比較について

発表者名：小野愛実、樋渡彩

学会等名：日本建築学会中国支部

発表場所：オンライン

発表年月：2022年3月

発表標題：大崎上島の神社について

発表者名：出口葉月、樋渡彩、吉田真子

学会等名：日本建築学会中国支部

発表場所：オンライン

発表年月：2022年3月

発表標題：ポルトガルアーロにおけるアーチの形状比較に関する研究

発表者名：久安佑歩、樋渡彩

学会等名：日本建築学会中国支部

発表場所：オンライン

発表年月：2022年3月

発表標題：銀山街道「石州路」で形成された地域構造について

発表者名：樋渡彩、吉田真子

学会等名：日本建築学会北海道支部

発表場所：オンライン

発表年月：2022年6月

発表標題：古代ローマ時代の街道および都市に関する考察——ラヴェンナからアクイレイアを対象として

発表者名：中村友也、樋渡彩

学会等名：日本建築学会北海道支部

発表場所：オンライン

発表年月：2022年6月

発表標題：パドヴァにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察——ヴェスコヴァド地区とカステッロ地区を対象として

発表者名：中澤流星、吉田真子、樋渡彩

学会等名：日本建築学会北海道支部

発表場所：オンライン

発表年月：2022年6月

発表標題：パドヴァにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察——ピアッツェ地区を対象として

発表者名：吉田真子、樋渡彩

学会等名：日本建築学会北海道支部

発表場所：オンライン

- 発表年月：2022年6月  
 発表タイトル：朝鮮時代における教育施設の比較研究  
 発表者名：朴賛弼  
 学会等名：日本民俗建築学会  
 発表場所：京都産業大学、リモート併用  
 発表年月：2022年6月4日
- 発表年月：2022年6月  
 学会等名：日本建築学会大会（北海道）  
 発表場所：オンライン  
 発表年月：2022年9月
- 発表タイトル：博物館法改正とエコミュージアム運営の方向性  
 発表者名：馬場憲一  
 学会等名：日本エコミュージアム研究会  
 発表場所：オンライン  
 発表年月：2022年7月
- 発表タイトル：16-18世紀における小都市エステの空間構造に関する研究  
 発表者名：吉田真子、樋渡彩  
 学会等名：日本建築学会大会（北海道）  
 発表場所：オンライン  
 発表年月：2022年9月
- 発表タイトル：蘇州における歴史的な住宅の種類について  
 発表者名：章単婕、樋渡彩  
 学会等名：日本建築学会大会（北海道）  
 発表場所：オンライン  
 発表年月：2022年9月
- 発表タイトル：兵庫県赤穂と香川県中讃の塩田に関する比較考察  
 発表者名：小野愛実、樋渡彩  
 学会等名：特定非営利活動法人 瀬戸内海研究会議  
 発表場所：和歌山・瀬戸内海研究フォーラム  
 発表年月：2022年8月
- 発表タイトル：19世紀末の生口島の空間構造について  
 発表者名：栗田修史、樋渡彩  
 学会等名：日本建築学会大会（北海道）  
 発表場所：オンライン  
 発表年月：2022年9月
- 発表タイトル：関前諸島岡村島の空間構成に関するフィールド研究  
 発表者名：吉田真子、樋渡彩  
 学会等名：特定非営利活動法人 瀬戸内海研究会議  
 発表場所：和歌山・瀬戸内海研究フォーラム  
 発表年月：2022年8月
- 発表タイトル：産業から見た江波の変遷に関する考察  
 発表者名：米村侑真、樋渡彩  
 学会等名：日本建築学会大会（北海道）  
 発表場所：オンライン  
 発表年月：2022年9月
- 発表タイトル：瀬戸内における歴史的な地域構造に関する研究  
 発表者名：樋渡彩、吉田真子、小野愛実、田中碧衣  
 学会等名：特定非営利活動法人 瀬戸内海研究会議  
 発表場所：和歌山・瀬戸内海研究フォーラム  
 発表年月：2022年8月
- 発表タイトル：島に生きる、島に宿る  
 発表者名：吉田真子、樋渡彩  
 学会等名：日本建築学会大会（北海道）・デザイン  
 発表場所：オンライン  
 発表年月：2022年9月
- 発表タイトル：ラグーナ・ヴェネタの歴史的変遷に関する研究  
 発表者名：樋渡彩
- 発表タイトル：夏における伝統民家及び現代風建物の温熱環境の研究  
 発表者名：朴賛弼

学会等名：日本建築学会  
発表場所：リモート開催、  
表年月：2022年9月

発表標題：リプライ  
発表者：稲益祐太  
学会等名：都市史学会主催 書評会「稲益祐太著  
『南イタリア都市の空間史—プーリア州のテリトリー  
リオ』」  
発表場所：オンライン  
発表年月：2022年12月

### 著作について書かれた書評

評者名：倉石美都  
媒体名：一般社団法人日本民俗学会  
書評掲載年月：2022年8月  
対象著書（著者）：『韓屋と伝統集落 韓国の暮らし  
の原風景』（朴賛弼）

評者名：渡邊喜代美  
媒体名：UIFA JAPAN news letter 国際女性建築家会  
議 日本支部  
書評掲載年月：2022年8月25日  
対象著書（著者）：『韓屋と伝統集落 韓国の暮らし  
の原風景』（朴賛弼）

評者名：大平茂男  
媒体名：日本民俗建築学会  
書評掲載年月：2022年11月  
対象著書（著者）：『韓屋と伝統集落 韓国の暮らし  
の原風景』（朴賛弼）

評者名：山辺規子  
媒体名：週刊読書人  
書評掲載年月：2022年11月4日  
対象著書（著者）：『トスカーナ・オルチャ溪谷のテ  
リトリーオ—都市と田園の風景を読む』（陣内秀  
信、植田暁、マッテオ・ダリオ・パオルッチ、樋渡  
彩）

### 作品

作品名：銭湯山車  
著者名：文京建築会ユース+銭湯山車巡行部（栗生  
はるか、三文字昌也、内海皓平、村田勇氣）  
賞・媒体名：第13回建築コンクール「さまよう建  
築」最優秀賞  
発表日：2022年2月

作品名：梅光学院大学「The Leaning Station  
CROSSLIGHT」  
著者名：小堀哲夫  
賞・媒体名：第13回 JIA 中国建築大賞 2021 一般  
建築部門 優秀賞・公益社団法人 日本建築家協会  
中国支部  
発表日：2022年2月

作品名：NICCA イノベーションセンター  
著者名：小堀哲夫  
賞・媒体名：2022年日本建築学会作品選奨・一般  
社団法人 日本建築学会  
発表日：2022年4月

作品名：大和ハウスグループ みらい価値共創セン  
ター「コトクリエ」  
著者名：小堀哲夫  
賞・媒体名：第35回 日経ニューオフィス賞 ニュ  
ーオフィス推進賞 近畿ニューオフィス推進賞<近畿  
経済産業局長賞>・一般社団法人 ニューオフィス推  
進協議会  
発表日：2022年8月

### その他

標題：奥信濃 SDGs メッセの構想  
著者名：小島聡  
雑誌名：北信濃新聞（特別寄稿）  
掲載年月日：2022年1月1日

標題：2021年度 都市歴史研究室報告書

著者名：樋渡彩  
発行所：近畿大学工学部建築学科都市歴史研究室  
発行年月：2022年2月（ISBN 978-4-9911971-6-1）

標題：近世初期八王子町建設時の洪水対策―「武蔵名勝図会稿本」より―  
著者名：馬場憲一  
雑誌名：多摩のあゆみ 第185号  
発行年月：2022年2月

標題：江戸城外濠周辺における歴史環境資源を軸とした都心型まちづくり  
著者名：高道昌志  
雑誌名：日本建築学会・地域包摂型まちづくり特別研究委員会報告書  
発行年月：2022年3月

標題：三鷹まるごと博物館の沿革と今後の課題  
著者名：馬場憲一  
雑誌名：三鷹市文化財年報・研究紀要  
発行年月：2022年3月

標題：イタリアのテリトリー戦略：甦る都市と農村の交流  
講演者名：木村純子  
発表場所：法政大学江戸東京研究センター2021年度末報告会  
発表年月：2022年3月15日

標題：日本民俗建築学会紹介  
著者名：朴賛弼  
雑誌名：『建築歴史研究』韓国建築歴史学会、第141号  
発行年月：2022年4月

標題：アートプロジェクトで、消えゆく場所に光をあてる  
著者名：栗生はるか（インタビュー）

雑誌名：東京ビエンナーレ 2020/2021 見慣れぬ景色へ ―純粹×切実×逸脱―  
発行年月：2022年4月

標題：イタリアのテリトリー戦略：農業による地域活性化  
講演者名：木村純子  
発表場所：イタリア研究会第494回例会  
発行年月：2022年4月18日

標題：Brand Management of Rice in Japan  
講演者名：Kimura, Junko  
学会等名：ISEAS Workshop on Rice in Italy and Japan  
発行年月：2022年5月27日

標題：銭湯と地域をつなぐ場に 北区・滝野川「稲荷湯」隣の長屋 6月末開業目指す  
著者名：栗生はるか（インタビュー）  
雑誌名：東京新聞  
発行年月：2022年6月

標題：「現代の長屋」に見る持続可能な「緩やかにつながる暮らし」とは？  
著者名：栗生はるか（インタビュー）  
雑誌名：WORK MILL with Forbes  
発行年月：2022年6月

標題：稲荷湯の修復・再生プロジェクト  
著者名：栗生はるか他（インタビュー）  
TV番組名：NHK「首都圏ニュース」「おはよう日本」  
発行年月：2022年6月

標題：銭湯がつなぐ人とまちづくり 公衆浴場SDGs  
著者名：栗生はるか（インタビュー）  
TV番組名：BSテレビ東京「日経ニュースプラス9」

発行年月：2022年8月

発表標題：地域の自然資源としての湿地

発表者名：高田雅之

学会等名：中池見湿地ラムサール条約登録10周年  
記念シンポジウム

発表場所：福井県敦賀市

発表年月：2022年8月

標題：鷹場内農民の生活規制と負担－高橋家文書  
「諸御用向控帳」より－

著者名：馬場憲一

雑誌名：多摩のあゆみ 第187号

発行年月：2022年8月

標題：“Agricultural Innovation in Italy” Paesaggio  
Agrario, Risorse Agricole e d’Eccellenza : Verso  
Nuovi Target Promozionali e Strategie Territoriali in  
Area Amalfitana

講演者名：Kimura, Junko

学会等名：Seminario Tavola Rotonda nell’Ambiro  
della Ricerca Scientifica Congiunta Italo-Nipponia

開催場所：Cultural and History Center of Amalfi

発行年月：2022年9月5日

標題：Italia e Giappone: Approcci Territoriali alla  
Gestione delle Risorse Agricole

講演者名：Kimura, Junko

学会等名：Seminario Internazionale Paesaggi

Culturali: Questioni di Conservazione

開催場所：University of Salerno

発行年月：2022年9月8日

標題：Lo Sviluppo Endogeno Chiave per la  
Sostenibilita

講演者名：Kimura, Junko

学会等名：Olio Seggiano DOP e Castagna del  
Monte Amiata IGP Casi di Studio per il Giappone  
(seminario)

開催場所：Seggiano, Tuscany

発行年月：2022年9月9日

発表標題：野鳥と緑を通してみるちよだ

発表者名：高田雅之

学会等名：ちよだ生涯学習カレッジ

発表場所：東京都千代田区

発表年月：2022年10月

標題：南イタリア都市の空間史～プーリア州のテリ  
トリーオ～

著者：稲益祐太

雑誌名：『福岡日伊協会会報』No.7

発行年月：2022年10月

標題：「テリトリーオ」とはなにか？——南イタリ  
アを領域的に考える

発表者：稲益祐太

出演メディア：合同会社シラス「建築系勝手メデイ  
ア ver.3.0」(インターネット)

放送日：2022年10月4日

標題：農業とテリトリーオ

講演者名：木村純子

学会等名：イタリアのテリトリーオ戦略セミナー第  
5回

開催場所：日伊協会

発行年月：2022年10月4日

標題：映画「テルマエ・ロマエ」ロケ地の銭湯に隣  
接する長屋を再生…湯上り客らが交流

著者名：栗生はるか(インタビュー)

雑誌名：読売新聞

発行年月：2022年11月

標題：塩野適齋と八王子隕石－極楽寺所蔵「桑都日  
記」稿本より－

著者名：馬場憲一

雑誌名：多摩のあゆみ 第188号

発行年月：2022年11月

標題：ブラミルク東京

著者名：金谷匡高、矢澤好幸他

雑誌名：ミルク一万年の会

発行年月：2022年11月

著者名：朴賛弼

雑誌名：『民俗建築』日本民俗建築学会、第161号

発行年月：2022年5月

発表標題：都市の湿地

発表者名：高田雅之

学会等名：三番瀬市民調査報告会

発表場所：千葉県船橋市

発表年月：2022年12月

標題：水びたしがもたらす都市と建築の潤い

著者名：高道昌志

雑誌名：建築雑誌 Vol.137 No1769

発行年月：2022年12月

標題：古民家再生: 古民家のある「街」

著者名：栗生はるか（インタビュー）

TV番組名：NHKワールド「DESIGN TALKS Plus」

発行年月：2022年12月

標題：GIとテリトリーオ

講演者名：木村純子

学会等名：『地理的表示(GI)と持続可能な社会』法政大学イノベーション・マネジメント研究センターシンポジウム

発行年月：2022年12月3日

標題：Christmas in Japan

講演者名：Kimura, Junko

学会等名：Getting to Know Japan webinar

開催機関：Yokosuka Council on Asia-Pacific Studies

発行年月：2022年12月20日

## 書評

---

標題：小川格著日本の近代建築ベスト50



## 5 活動報告

### Activity Report

## 活動報告

(2022年1月～2022年12月までの活動)

### ○国際シンポジウム「テリトリーオが実現する持続可能な地域づくり —『イタリアのテリトリーオ戦略— 甦る都市と農村の交流—』発刊記念—」

【日時】2022年1月30日

【会場】オンライン配信

【主催】法政大学イノベーション・マネジメント研究センター、エコ地域デザイン研究センター

【プログラム】

「チェントロ・ストリコからテリトリーオへ」陣内秀信特任教授

「テリトリーオの内発的発展」木村純子（法政大学経営学部教授、エコ地域デザイン研究センター研究員）ほか

法政大学イノベーション・マネジメント研究センター 主催 法政大学エコ地域デザイン研究センター 協力

### テリトリーオが実現する持続可能な地域づくり

『イタリアのテリトリーオ戦略— 甦る都市と農村の交流—』発刊記念 国際シンポジウム

イタリアの農村は、田舎の息を吐いたスローライフの文化であり、地産地消、エノカストロミアの分野が、イタリアらしき特徴として大きく展開しています。テリトリーオの働きがよい方法でもよいでしょう。いずれも近代の工業化時代の弊害克服の途程の次にくる段階にもとづくものであり、イタリアが本来もつクリエイティブな資質がそこにおいて活かされています。僻地に自然の恵みと美しい風景、伝統をもつ日本も、それと対峙できる豊かな資源をもつ国であり、今後の地域再生に向けて、多くの共通性をもったイタリアの多彩な経験から学ぶことが、とくに大きな意義をもち、切り目なし。

この度、テリトリーオの視角から、イタリアの魅力を包括的に考察した『イタリアのテリトリーオ戦略— 甦る都市と農村の交流—』（白楊閣刊）を発刊することになりました（2022年3月発行予定）。本書では、異なる視点分野を再問とする日本人研究者に加え、イタリア人研究者および海外から、それぞれの専門知識・イタリアの豊富な事例を用いてテリトリーオの発展途出による地域活性化の新しい議論も示しを提示しています。シンポジウムでは執筆者にスピーカーとしてテリトリーオ戦略を語っていただきます。日本での地域活性化プロジェクトに関心のある皆様にご参加いただき、持続可能な地域づくりについて学んでいただければ幸いです。

|             |                                     |               |
|-------------|-------------------------------------|---------------|
| 13:00～13:05 | 【開会挨拶】                              | 木村 純子         |
| 13:05～13:30 | チェントロ・ストリコからテリトリーオへ                 | 陣内 秀信         |
| 13:30～13:35 | テリトリーオの内発的発展                        | 木村 純子         |
| 13:35～14:20 | テロワールを継承を促したルール・シェアリング・アクション        | 渡辺 文昭         |
| 14:20～14:30 | 休 憩                                 |               |
| 14:30～14:35 | 農村ツーリズムとテリトリーオ発展の継承向上               | シヨヴァニス・パレツティ  |
| 14:35～15:30 | 農の復興・地産地消、新しいライフスタイル、エノカストロミア、ツーリズム | アンドレア・マシコフツァイ |
| 15:30～15:45 | デジタル時代時代のテリトリーオとスマート・ツーリズム          | パルメラ・スターツァ    |
| 15:45～16:30 | イタリア文化の発展                           | アルマンド・モンターノ   |
| 16:30～16:35 | イタリアファインの多様性とテリトリーオ                 | 長本 和子         |
| 16:35～16:45 | 休 憩                                 |               |
| 16:45～17:30 | トークセッション                            | 田上 真一郎        |
| 17:30～17:35 | 【閉会挨拶】                              | スピーカー         |

法政大学イノベーション・マネジメント研究センター 〒102-8100 東京都千代田区鷹取2-17-1 TEL: 03-3284-9420 / E-mail: cdm@adm.hosei.ac.jp / URL: https://www.hosei.ac.jp

### ○日欧ミーティング「渋谷川魂」

【1】シンポジウム「川のエコヒストリーとスピリチュリティ～江戸東京の都市構造と精神性～」  
(2022年8月11日)

【2】まち歩き＋ワークショップ「渋谷川モンスターを探る」(2022年8月1日～8月10日)

【3】展示会＋イベント「渋谷川モンスター展」  
(2022年8月7日～8月10日)

【主催】法政大学（江戸東京研究センター、エコ地域デザイン研究センター）、青山学院大学総合文化政策学会

【共催】ドイツバイエルン州駐日代表部、DWIH TOKYO(ドイツハウスオブイノベーション)、ヴェルサイユ国立建築学校、emergent lab、国連大学

【協力】國學院大学、NPO 法人渋谷川ルネッサンス、NPO 法人雨水まちづくりサポート、シブヤ大学、東急株式会社、東京都建設局河川部、渋谷区観光協会、筒井国際特許事務所

【後援】渋谷区、国土交通省、イタリア大使館、ドイツ大使館、東京都、フランス大使館(後援申請中)

### 日欧ミーティング 渋谷川魂

モンスターと暮る渋谷川  
ドイツの暮らちとどう見えた  
渋谷川はどこへ行ったのか？（都市の復讐はどうか）と問う  
東京に住む私たちがどう渋谷川と向き合うか

### シンポジウム「川のエコヒストリーとスピリチュリティ」

～江戸東京の都市構造と精神性～

シンポジウム開催  
川は生態系として存在する自然であり、渋谷川は江戸東京の発展を形成する重要な川である。江戸市中の西部の境界を劃した川であり、上中流部は豊かな田舎で、東京湾に注ぐ高尾川は、舟入りがあり、江戸湾の一部として河川網が形成。産業革命も多岐にわたった。

本企画については、これまで多くの分野で学問的関心が高まってきた。文学・アート、アニメの題材としても取り上げられてきた。これをあらためて国際都市東京の地球環境時代における課題として受け止め、渋谷川の歴史、文化、環境を語り、未来に向けた都市の生態学的再生の取組を語り合いたい。

日時：2022年8月11日（木）10:00～11:00  
会場：青山学院大学14号館12階大会場  
形式：オンライン開催  
参加費：無料（参加費は別途必要です）

シンポジウム会場  
青山学院大学14号館(総合研究棟14F17F)

### ワークショップ・展示会「渋谷川モンスターを探る」

日時：2022年8月1日（月）～8月10日（水）  
会場：渋谷川・古川流域

ワークショップ開催  
渋谷川とその支流を多く、流水中多量な有機物と栄養を蓄え、河床を乾干、地下に潜った小川を思いを寄せ、渋谷川下の渋谷川中流で生じた渋谷ストリームを歩き、高尾川下の古川となって東京湾に注ぐ風景を体験しよう。ドイツの暮らちにモンスターと暮る渋谷川、渋谷川の魂を探る。

主催：法政大学（江戸東京研究センター）、エコ地域デザイン研究センター、青山学院大学総合文化政策学会  
共催：ドイツバイエルン州駐日代表部、DWIH TOKYO(ドイツハウスオブイノベーション)、ヴェルサイユ国立建築学校、emergent lab  
後援：渋谷区、東京都、国土交通省、ドイツ大使館、イタリア大使館、国連大学、国学院大学、NPO法人渋谷川ルネッサンス、NPO法人雨水まちづくりサポート、シブヤ大学、東京建設局河川部、渋谷区観光協会、筒井(株)、筒井国際特許事務所

○第 47 回法政大学大学院まちづくり都市政策セミナー  
「新たな地域主義の構想に向けて」

【日時】2022 年 12 月 17 日

【会場】法政大学市ヶ谷キャンパス

【主催】法政大学大学院

【共催】エコ地域デザイン研究センター、現代総有  
研究所

【プログラム】

基調講演：

田中優子（法政大学名誉教授）

「石牟礼道子の世界と地域の未来～生命たちの賑わいを感じ取れるか？～」(共催：法政大学エコ地域デザイン研究センター)

ポスターセッション：

学生による研究・実践発表

[コーディネーター] 杉崎和久（公共政策研究科教授）

分科会 1：

「共同性の再構築～現代総有の提唱と実践」(共催：現代総有研究所)

[コーディネーター] 野口和雄（公共政策研究科兼任講師、都市プランナー）[コメンテーター] 五十嵐敬喜（法政大学名誉教授）

[パネリスト]

日置雅晴（弁護士、上智大学法科大学院非常勤講師）「門前町城端（富山県南砺市城端）における現代総有の試みと課題」

宮崎一徳（参議院事務局）・風間一毅（沼津市役所）「市民による新たな共同性を回復する試み」

分科会 2：

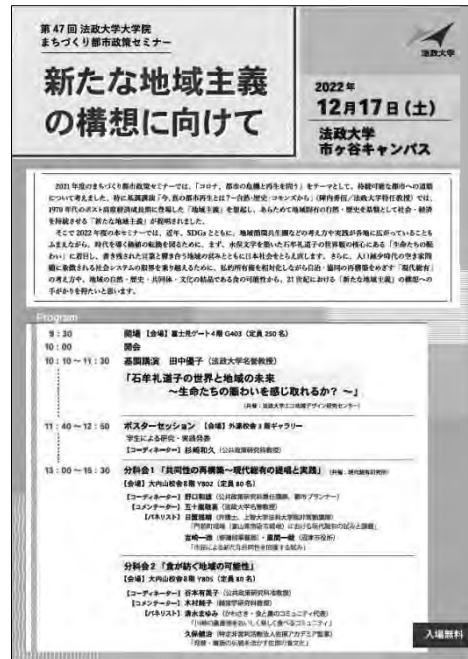
「食が紡ぐ地域の可能性」

[コーディネーター] 谷本有美子（公共政策研究科准教授）[コメンテーター] 木村純子（経営学研究科教授、エコ地域デザイン研究センター兼担研究員）

[パネリスト]

清水まゆみ（かわさき・食と農のコミュニティ代表）「川崎の農産物をおいしく楽しく食べるコミュニティ」

久保健治（特定非営利活動法人 佐原アカデミア監事）「発酵・醸造の伝統を活かす佐原の食文化」



## 法政大学 エコ地域デザイン研究センター メンバー

2023年3月現在

### 【センター長】

高見 公雄 法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科 / 教授

### 【兼任研究員】

高村 雅彦 法政大学デザイン工学部建築学科 / 教授  
岩佐 明彦 法政大学デザイン工学部建築学科 / 教授  
網野 禎昭 法政大学デザイン工学部建築学科 / 教授  
小堀 哲夫 法政大学デザイン工学部建築学科 / 教授  
川久保 俊 法政大学デザイン工学部建築学科 / 教授  
朴 賛弼 法政大学デザイン工学部建築学科 / 助手  
道奥 康治 法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科 / 教授  
福井 恒明 法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科 / 教授  
鈴木 善晴 法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科 / 教授  
今井 龍一 法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科 / 教授  
根崎 光男 法政大学人間環境学部 / 教授  
小島 聡 法政大学人間環境学部 / 教授  
高田 雅之 法政大学人間環境学部 / 教授  
木村 純子 法政大学経営学部 / 教授

### 【特任研究員】

陣内 秀信 法政大学 / 特任教授

### 【客員研究員】

石神 隆 法政大学 / 名誉教授  
高橋 賢一 法政大学 / 名誉教授  
西谷 隆亘 法政大学 / 名誉教授  
永井 進 法政大学 / 名誉教授  
森田 喬 法政大学 / 名誉教授  
馬場 憲一 法政大学 / 名誉教授  
出口 清孝 法政大学 / 名誉教授  
宮下 清栄 元法政大学デザイン工学部教授  
北山 恒 元法政大学デザイン工学部教授, architecture WORKSHOP 主宰, 横浜国立大学 / 名誉教授  
神谷 博 特定非営利活動法人 雨水まちづくりサポート / 理事長  
岡本 哲志 岡本哲志都市建築研究所 / 代表  
金谷 匡高 世田谷区教育委員会 / 学芸員  
浅井 義泰 (株)エキープ・エスパス / 取締役  
阿部 彰 A+A 美来研究室, 建築家・都市環境プランナー, 東京ウォーターフロント協議会, 国際観光施設協会専門委員

猪野 忍 (有)猪野建築設計 / 代表取締役  
 大隈 哲 建築家・(株)イーソーコ総合研究所 / 特任研究員  
 小松 妙子 マヌ都市建築研究所  
 酒井 哲 TownFactory 一級建築士事務所 / 代表  
 佐々木 政雄 (株)アトリエ74 建築都市計画研究所 / 代表取締役  
 清水 淳 北川かっぱの会代表  
 菅原 圭子 大成建設(株)  
 鈴木 知之 写真家  
 高松 巖  
 鳥越 けい子 青山学院大学総合文化政策学部 / 教授  
 難波 匡甫 Lueur 場所と空間の研究所 / 所長  
 堀川 洋子 法政大学デザイン工学部 / 兼任講師  
 水田 恒樹 社会福祉法人 小茂根の郷 / 監事  
 横内 憲久  
 恩田 重直  
 長野 浩子 株式会社 UR リンテージ九州支社  
 石渡 雄士 秋田公立美術大学美術学部美術学科景観デザイン専攻  
 稲益 祐太 東海大学工学部建築学科 / 准教授, 法政大学デザイン工学部 / 兼任講師  
 樋渡 彩 近畿大学工学部建築学科 / 講師  
 高道 昌志 東京都立大学都市環境学部都市政策科学科 / 助教  
 ディエゴ・コサ・フェルナンデス 一般社団法人キタ・マネジメント・建築文化研究所 / 所長  
 森屋 雅幸 江戸川区教育委員会 / 学芸員  
 栗生 はるか 一般社団法人せんとうとまち / 代表理事, 法政大学デザイン工学部 / 兼任講師  
 金子 俊之 株式会社福山コンサルタント  
 金井 翔哉 日本工営株式会社

【客員研究員 (海外)】

神田 駿 マサチューセッツ工科大学建築+都市計画学科 / 教授  
 阮 儀三 同済大学国家歴史文化名城研究センター / 所長  
 Richard Bender カリフォルニア大学バークレー校 / 名誉教授  
 Rinio Bruttomesso ヴェネツィア水都国際研究センター / 元所長  
 Donatella Calabi ヴェネツィア建築大学建築史学科 / 名誉教授  
 Paola Falini ローマ大学建築学部都市計画学科 / 教授  
 Giuseppe Gargano アマルフィ歴史文化研究所 / 歴史家  
 Ekhart Hahn ドルトムント工科大学客員 / 名誉教授  
 Milan Konecny マサリユク大学地理情報学科 / 教授  
 Matteo Dario Paolucci ヴェネツィア建築大学 / 講師  
 Suwattana Thadaniti チュラロンコン大学社会科学研究所 / アドバイザー・准教授  
 Paul Waley リーズ大学環境学部地理学科 / 教授  
 Roderick Wilson イリノイ大学 / 助教  
 Olimpia Niglio パヴィア大学 / 教授

以上

## 法政大学エコ地域デザイン研究センター

本研究センターは、「環境の時代」を切り開く真の「都市と地域の再生」のための方法を研究することを目的とし、2004年4月にエコ地域デザイン研究所を設立、2016年4月にエコ地域デザイン研究センターと改名しました。環境のバランスと文化的アイデンティティを失いつつある日本の都市や地域を持続可能で個性豊かに蘇らせるために、〈エコロジー〉と〈歴史〉を結びつける独自のアプローチをとるところに大きな特徴があります。

国内外の専門家とネットワークを形成し、多角的な理念と手法を探求することにより問題解決に取り組んでいます。他の国や地域と比較しながら都市とテリトリー（地域）の水辺空間や自然環境を歴史的な視点を取り入れつつ深く研究し、その再生の具体的な方法を積極的に提言していきます。

特に今後は、都市とその周辺に広がる地域を、歴史文化・社会経済・水循環などのまとまりを持つ新たな領域概念「テリトリー」として提示する活動に重点を置きます。東京周辺・瀬戸内・新潟などをその対象としています。

## 法政大学エコ地域デザイン研究センター

### 2022年度報告書

発行日 2023（令和5）年3月

発行 法政大学エコ地域デザイン研究センター

（代表）〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1（市ヶ谷キャンパス）

（所在地）新見附校舎1階 研究開発センター内

<http://eco-history.ws.hosei.ac.jp/wp/>

印刷 藤原印刷株式会社

協賛 総合資格学院